

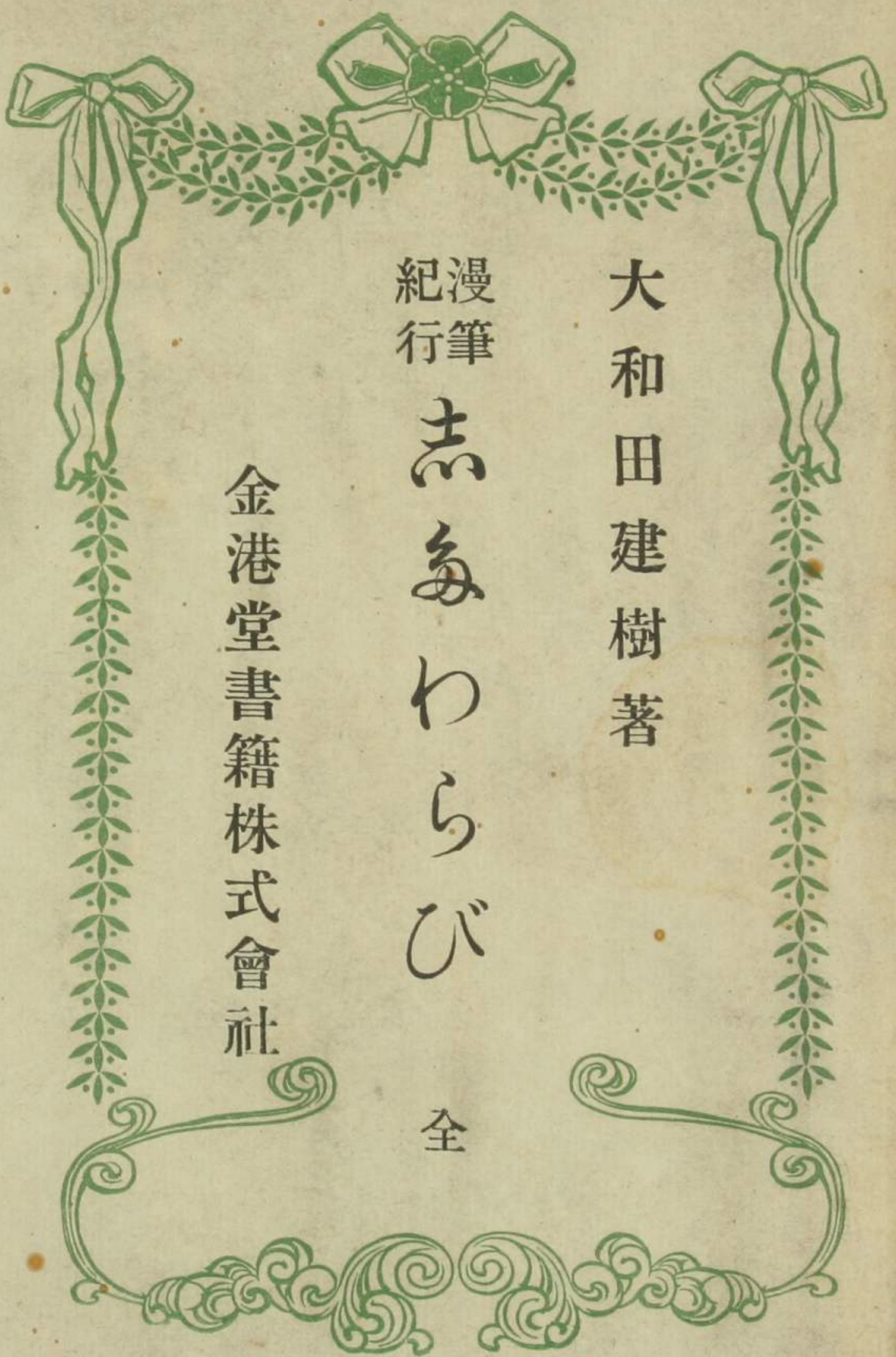
大和田建樹著

漫筆
紀行

志あわらび

全

金港堂書籍株式會社



5

10

15

20

漫筆
紀行
志
多
わ
ら
び

全

大和田建樹著

- | | | |
|-----------|---------|--------|
| ◎西伯利鐵道 | 田邊工學博士著 | 定價七拾五錢 |
| ◎名家訪問錄 | 石川松溪氏著 | 定價拾八錢 |
| ◎當世人物評 | 石川半山氏著 | 定價參拾錢 |
| ◎氣焰錄 | 登張文學士著 | 定價參拾五錢 |
| ◎北州考及端唄評釋 | 如電、醒雪著 | 定價拾五錢 |
| ◎人生之快樂 | 本田信教氏譯 | 定價六拾錢 |
| ◎教育論集 | 曾根松太郎氏著 | 定價拾五錢 |
| ◎教育漫筆 | 幣原文學士著 | 定價拾五錢 |

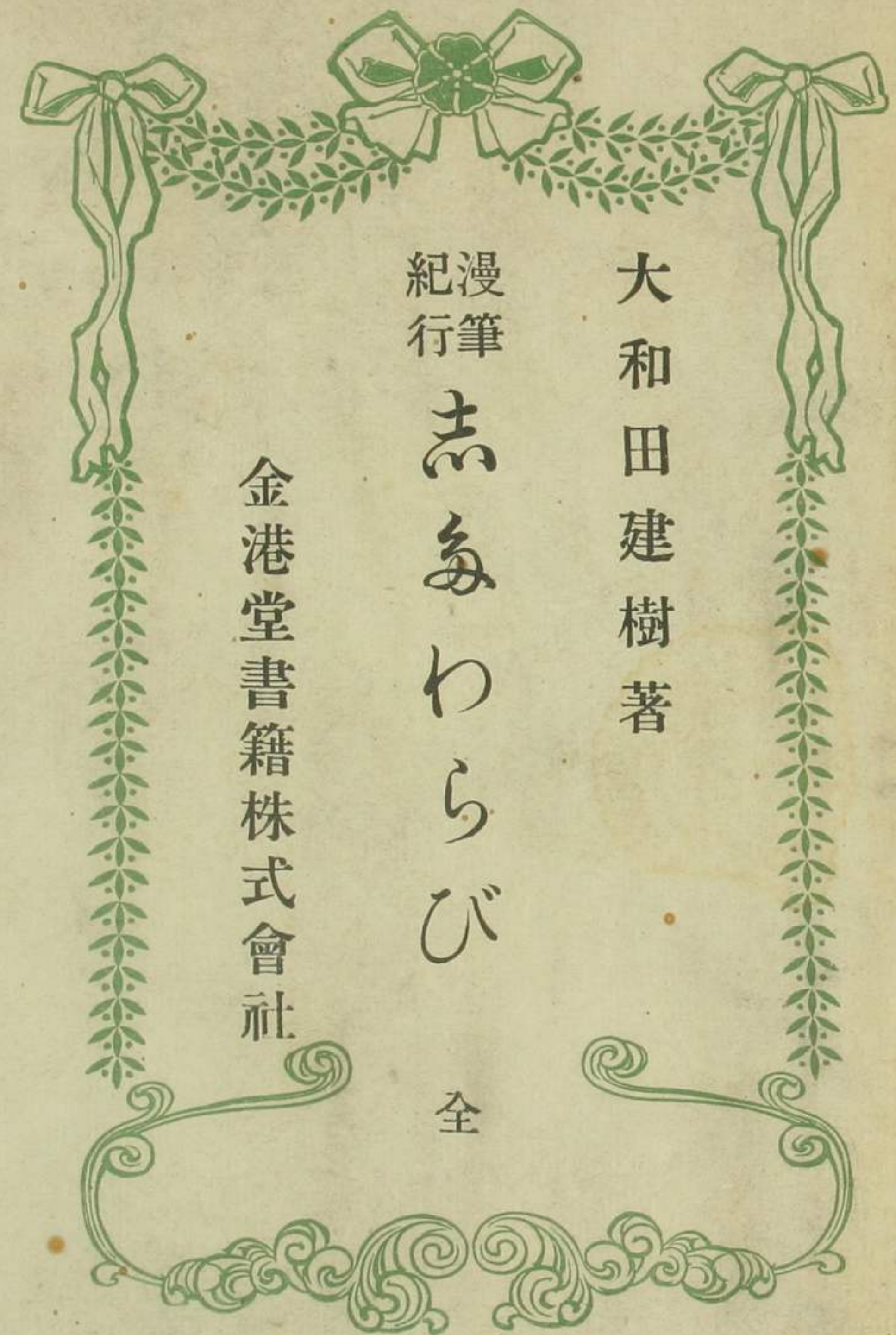
- ◎西伯利鐵道 田邊工學博士著 定價七拾五錢
- ◎名家訪問錄 石川松溪氏著 定價拾八錢
- ◎當世人物評 石川半山氏著 定價參拾錢
- ◎氣 焰 錄 登張文學士著 定價參拾五錢
- ◎北州考及端唄評釋 如電、醒雪著 定價拾五錢
- ◎人生之快樂 本田信教氏譯 定價六拾錢
- ◎教育論集 曾根松太郎氏著 定價拾五錢
- ◎教育漫筆 幣原文學士著 定價拾五錢

漫筆 紀行 志 多 毎 わ ら び 全 大和田建樹著

大和田建樹著

漫筆 紀行 志 多 毎 わ ら び 全

金港堂書籍株式會社





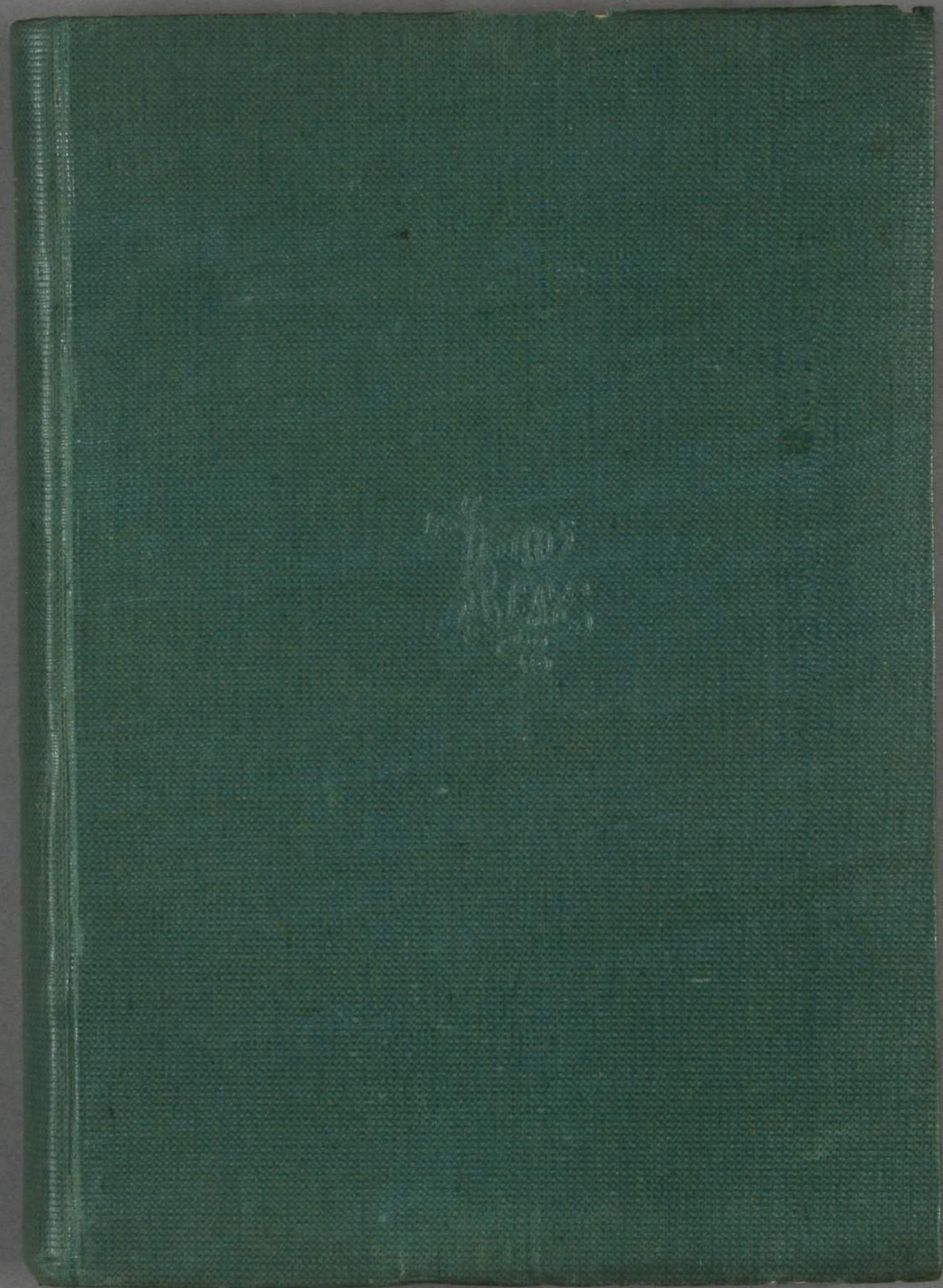
漫筆
紀行
志
た
あ
ら
び

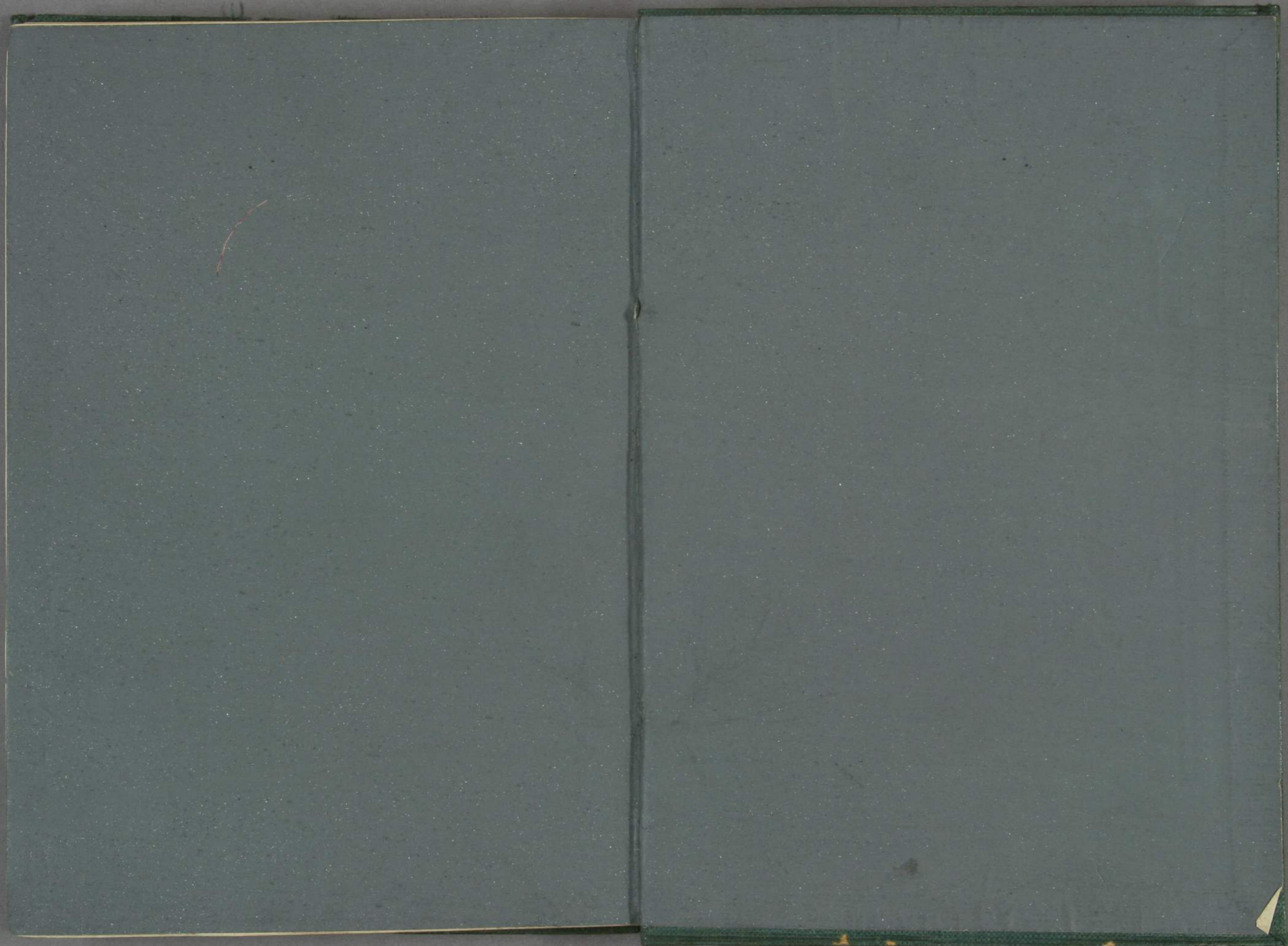
漫筆
紀行

志たあらび

全

大和田建樹著





去年の春よりすさびすてたる反古どもを。
拾ひ集めて一卷とはなしつれど。古人の吾
詩を祭りけんみやび心の。十が一つにも及
びがたくや。とまれかくまれ。

子等にだに見せてほこらん足引の。
山したわらび短けれども。時は明治みづの
え寅の春。彌生の望を昨日といひし夕暮の
窓に。建樹しるす。

目次

山櫻 西の窓 女の童 去年の夏 いちご 蚊屋 開けぬ頃 道成寺 金平糖 唐人笛 御賞賜 涼しき蔭 十二社の瀧 赤間が關

一 四 七 七 九 九 一 一 一 四 五 八 〇 一 二 二 三

茄子 團扇 九盆 鯛 涙 オルガン 煎餅 下駄 信心 よその落花 馬の脊越 榮螺 唱歌 庚申堂 釣瓶 赤茄子 時の太鼓

二四 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三一 三二 三二 三三 三四 三五 三五 三七

伊豫神樂(長歌)	七〇
寶丹	七四
石鱗	七五
癖	七五
味噌	七六
百人一首	七七
櫻の枯葉	七八
石の牛	七八
馬	七九
豆算	八〇
五月雨	八一
豆腐	八二
蠅	八二
黒木の鳥居	八三
えびす岩	八三
百合	八四
蝙蝠傘	八五

松明	七〇
横笛	七四
夕日	七五
簾	七五
田植	七六
心太	七七
雨垂	七八
林檎	七八
風鈴	七九
石竹	八〇
漁火	八一
神樂	八二
繪馬	八二
十三の娘	八三
木綿糸	八三
もじずり	八四
水車	八五

松明	八六
横笛	八六
夕日	八七
簾	八七
田植	八八
心太	八八
雨垂	八九
林檎	九〇
風鈴	九一
石竹	九二
漁火	九二
神樂	九三
繪馬	九四
十三の娘	九五
木綿糸	九五
もじずり	九六
水車	九七

城	三八
潮音寺	三九
花葵	四〇
六角堂	四一
新年梅(長歌)	四二
歌の會	四五
古新聞	四六
夏橙	四七
氷水	四八
カステラ	四九
挽茶	五〇
松葉牡丹	五二
八幡宮	五三
螢	五四
紫陽花	五五
夏海棠	五六
白羽の蝶	五七

蜻蛉	三八
夏の食味	三九
櫻の寶	四〇
茶碗	四一
おさん狸	四二
馬車	四五
猫に冠	四六
時計の針	四七
遠征のいろは	四八
小兒の寫真	四九
筏	五〇
張物板	五二
花簪	五三
梅の寶	五四
村雨	五五
新茶	五六
マツチ	五七

蜻蛉	三八
夏の食味	三九
櫻の寶	四〇
茶碗	四一
おさん狸	四二
馬車	四五
猫に冠	四六
時計の針	四七
遠征のいろは	四八
小兒の寫真	四九
筏	五〇
張物板	五二
花簪	五三
梅の寶	五四
村雨	五五
新茶	五六
マツチ	五七

蜻蛉	五七
夏の食味	五八
櫻の寶	五九
茶碗	五九
おさん狸	六〇
馬車	六一
猫に冠	六二
時計の針	六三
遠征のいろは	六三
小兒の寫真	六五
筏	六五
張物板	六六
花簪	六七
梅の寶	六八
村雨	六八
新茶	六八
マツチ	六九

障子張	一三〇
狐の聲	一三一
拜殿	一三二
晚鐘	一三二
蓮	一三三
籠	一三三
龜	一三四
空蟬の世(長歌)	一三五
雷	一三六
梅の種	一三七
園遊會	一三八
足袋	一三九
夏の夕	一四〇
汗	一四二
ハンカチーフ	一四二
酒	一四三
玉子	一四六

雀	一四七
朝顔	一四八
喇叭	一四八
夕立	一四九
隣	一五〇
猿が秀	一五一
衰	一五二
琴	一五二
蕙帆	一五三
豊後橋	一五三
玉蜀黍	一五四
行水	一五五
神鳴門	一五五
虫干	一五六
物のよしあし	一五七
烏	一五八
梨子	一五八

雀	一四七
朝顔	一四八
喇叭	一四八
夕立	一四九
隣	一五〇
猿が秀	一五一
衰	一五二
琴	一五二
蕙帆	一五三
豊後橋	一五三
玉蜀黍	一五四
行水	一五五
神鳴門	一五五
虫干	一五六
物のよしあし	一五七
烏	一五八
梨子	一五八

夏の歌(短歌)	一〇一
木魚	一〇二
人魂	一〇二
稻妻	一〇四
三日月	一〇四
芝居	一〇五
脚半	一〇七
燈籠	一〇七
下女	一〇八
山桃	一〇九
齒	一〇九
海水浴	一一〇
女の子	一一二
雨傘	一一二
羊羹	一一三
墓の蔭	一一四
馴れたる昔	一一四

蠟燭	一一五
餅	一一六
田舎	一一七
別れしこなた(長歌)	一一七
まむし	一二〇
香	一二〇
緑の蕙	一二一
作文の先生	一二一
砂糖	一二二
柳の箸	一二二
黙電和尙	一二三
椎の枝	一二四
香水	一二五
水の月	一二六
母の文	一二七
念佛	一二八
十ふり	一二九

蠟燭	一一五
餅	一一六
田舎	一一七
別れしこなた(長歌)	一一七
まむし	一二〇
香	一二〇
緑の蕙	一二一
作文の先生	一二一
砂糖	一二二
柳の箸	一二二
黙電和尙	一二三
椎の枝	一二四
香水	一二五
水の月	一二六
母の文	一二七
念佛	一二八
十ふり	一二九

籥 作 る 翁	除 隊	教 子 に 與 ふ (短 歌)	寺 の う しろ	ゆ く 秋	天 長 節	茶 の 花	庭 の 暮 秋	薩 摩 芋	寺 山	小 石 川	男 の 髪	蜜 柑	賽 錢	袖 の 木 蔭	松 茸	紙
------------------	--------	-----------------------------------	-------------------	-------------	-------------	-------------	------------------	-------------	--------	-------------	-------------	--------	--------	------------------	--------	---

二二二	二二一	二一〇	二〇九	二〇七	二〇四	二〇三	二〇一	二〇〇	二〇〇	一九九	一九三	一九一	一九〇	一九〇	一八九	一八九
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

菰 豆	木 枯 の 風	歌	村 の 正 午	豆 腐	二 人 の 影	庭 の 鶯	紅 白 の 小 袖	煙	乳 母	耳 切 丸	猿 引	鋤 の 柄	學 校 カ バ ン	夕 日 の あ と	昆 布	近 火
--------	------------------	---	------------------	--------	------------------	-------------	-----------------------	---	--------	-------------	--------	-------------	-----------------------	-----------------------	--------	--------

二二六	二二五	二二四	二二四	二二三	二二二	二二一	二二〇	二一九	二一九	二一八	二一八	二一七	二一六	二一四	二一四	二一三
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

水 引	樽 御 輿	白 木 の 机	二 百 十 日	芭 蕉	神 代 の 光	提 灯	八 足 机	女 郎 花	半 日 の 留 守	袴	日 蝕	雲 間 の 星	船 頭	噴 水 器	水 遊	寢 覺
--------	-------------	------------------	------------------	--------	------------------	--------	-------------	-------------	-----------------------	---	--------	------------------	--------	-------------	--------	--------

一七一	一七一	一七〇	一六九	一六八	一六八	一六七	一六六	一六五	一六四	一六四	一六三	一六二	一六一	一六一	一六〇	一五九
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

鳥 打 帽	枝 の い が 栗	柿 の 皮	ぬ れ 佛 の 顔	半 鐘	畑 の 煙	秋 の 歌 (短 歌)	岩 の も と	赤 ゲ ツ ト	鯉	犬 葡 萄	猿 田 彦	芋 汁	夕 顔 鎗	歸 る 父	石 地 藏	松 虫
-------------	-----------------------	-------------	-----------------------	--------	-------------	-------------------------	------------------	------------------	---	-------------	-------------	--------	-------------	-------------	-------------	--------

一八八	一八七	一八七	一八六	一八五	一八四	一八二	一八二	一八一	一八〇	一八〇	一七八	一七七	一七五	一七四	一七三	一七二
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

頭巾	二二六	紺足袋	二三八
冬の始	二二七	南天	二三九
人の世	二二七	水仙	二四〇
火鉢	二二八	嵐	二四〇
煤拂	二二八	ランプ	二四一
伊豫の山(長歌)	二二九	瀧つ瀬	二四二
手料理	二三〇	こぼれ米	二四三
一人の翁	二三二	墓の中道	二四三
郵便函	二三三	繪馬	二四四
冬の暮	二三三	庖丁	二四五
毛糸の玉	二三五	針の穴	二四五
夜なか	二三五	三河萬歳	二四六
三角の巨燧	二三六	櫓の聲	二四七
霜柱	二三六	藥瓶	二四七
鈴	二三七	早苗の歌	二四八
仁王尊	二三七	雪舟の達摩	二四八
粥	二三八	小社	二四九

帆柱	二五〇	梅の木蔭	二六二
手紙の文字	二五〇	冬の歌(短歌)	二六二
寒き日	二五一	おもひいで草	二六四
針仕事	二五二	松葉牡丹(長歌)	二七六
兵士一隊	二五二	むかし今	二七八
奈良の春	二五三	目なし鳥(長歌)	二九八
うしろの岡	二五三	四十年前の正月	三〇〇
水道	二五四	鈴の響(長歌)	三〇五
ほしきもの	二五五	袴能	三〇七
車夫のあくび	二五七	能の脇師	三〇八
材木の上	二五七	雑の歌(短歌)	三一〇
馬上の軍人	二五八	宇和島日記	三一四
大根賣る男	二五八	雑の歌(短歌)	三九八
畫帖	二五九	初茸狩	四〇一
人足四五人	二六〇	大磯の海	四一〇
薺	二六一	節分詣	四一一
芹	二六一	雪の恨(長歌)	四一八

目次終

金比羅まわり
春の歌(短歌)
木曾路の旅

四二〇
四三二
四三四

志たわらび

大和田建樹 著

山櫻

一

葉の赤くつやゝかなるに。 残れる雪かと見えて。 白う咲
きいでたる山櫻よ。 八重はあれど一重はあれど。 又似る
ものこそ見出だされね。 片山蔭の細き流に枝さしおほひ
たる。 おもひもよらぬ野寺の軒を半ば埋めたるなど。 雨
に悩める海棠も物かは。

旅人は峠の一軒屋にて。草鞋はき直し。茶を飲みなどす。日はあたくかなり。鶯こなたかなたに歌ひかはして。山ざくらほろく／＼とこぼれぬ。

三

蕨の多さにうかれ來ぬれば。いつしか谷水のほとりまでおりたり。見かへれば。來しかた高き花の雲間に友は残りて。おい／＼と呼ぶ。

四

道ふみちがへて炭焼のすみかにいでぬ。思へば去年の初茸狩に。湯をもらひたる處なりき。あるじいとよき男にて。庭の櫻を。乞ふがま／＼に折りて與へぬ。

五

薪いたゞきて里に出づる女あり。姉も妹も。見事なる櫻の枝をさしそへたるは。賣らんとにやと問へば。いないな。日頃なさけかうむる御寺様への。御みやげぞといふ。

六

むかしの佛とはんとて山寺に入れば。春の日永うして人音もせず。岩もる清水に枝折り漬けたる山櫻の上を。黄なる蝶二つ。むつましげに飛びぬたり。

七

茶摘歌の聲するは。山一つあなたならん。行くとはなしに越えつれば。見おろさる／＼麓の櫻。わかれし春は猶も

留まれり。折しも鶯なほ老いずして鳴く。

西の窓

窓を開けば。竹あり栗あり青桐ありて。冬は時雨と霰を聞き。秋は釣ばりの如き三日月を梢に高く見いだすも。あはれ淺からず。遠く向ふは惠比壽山にて。そこに隠れし夕日の色まで忘れざるは。父あり母ありし家の昔ぞかし。

殊に讀書の窓にとてゆるされし一室なれば。友の如くはらからの如き思出もせらるゝかな。義經の顔を障子にかきしも此窓なりしよ。手づから作りし西瓜燈籠かけてな

がめしも此窓なりしよ。今も此窓のもとにて。白氏文集よみたる事を記憶す。長恨歌の李花一枝といふ句を口ずさみし折しも。軒端の雪は朝日にとけて。瀧の如くに落ちたる事こそ。昨日のやうなれ。

あつき日ぐらし。玉勝間うつしたる事をも記憶す。さしこむ夕日をおほひもせずして。筆とりつけおたるに。父上見かねて。汝がしびれからだには驚くなり。のたまひながら。澁紙と竹竿もておはして。日よけを作り與へさせ給ふ。深き慈愛を思ひしりたるも此窓なりき。十七八の頃は。讀書にふけりて。二夜も三夜も全く眠ら

ぬ事さへありしを。母君いたく氣づかひ給ひて。此のちは十時うちたらば必ず寐よとの。嚴命下れり。されどなほ十一時十二時まで。枕につかぬ事ありとて。いたく御叱を蒙りたる事もありけるが。其頃ゐたりしみねといふ下婢。かくまでおすきな學問をやめて。寐よとの仰せは。いかにもおかはいそうなり。などいひつゝ。ある夜も栗のうでたるをひそかに持ちきて。庭より此窓に入れてくれたる事ありき。學成りたらば。其志にむくいん物をと。若き心にも思ひたりしが。いにし年國にかへりて其女を問へば。すでに此世にあらざりけり。今夜も筆とる事ありて三時を机の上に聞きけるが。うで

栗あたへし人の面かげ。なほ燈のあたりにはほのめくを覺えぬ。

女の童

苔むしたる石燈籠のあなたには。新築の小座敷ありて。主人謠ひ客鼓打つ。日はなほ高し。女の童庭にいでゝは。薔薇一枝折りて髪にさす。

去年の夏

胡瓜の花口なし色にさきて。庭の日かげやゝあつくなる頃。風入る窓に長椅子をよせて。歌がたりすれば。汗を

ふきつゝ筆記せし人。いまはいづくぞ。かはらで来るは。白羽の蝶のみ。夕飯はてゝも日はまだ高し。いつも遊ぶ近くの野邊にて。晝顔摘みつゝ歌よみし人。今はいづくぞ。かはらでにはほふは。夕焼の空のみ。寺を尋ねて思はぬ墓の文字をよみつゝ。此人がこゝにと驚きし人。今はいづくぞ。木魚の聲讀經の聲。かれもこれも去年のまゝなる物を。夏はかへれど人はかへらず。かへらぬ人の土かひし紫陽花。はなもつ事去年よりも多し。

いちご

父は夕飯をはりて新聞をよみ。母はむかひ座して猫を遊ばしむたりしが。皿なるいちごを匕にすくひて。こちやといへば。白き筒袖きたる子は。來りて手をかさぬ。愛よ愛よ。汝のすみかは獨り天國のみにもあらじ。浄土のみにもあらじ。

蚊屋

おのれ蚊を嫌はざるにあらず。蚊よりもなほうるさきは蚊屋なり。書よまんとすれど。火を入るればあふなく。

外にれけば暗し。風はた軒の風鈴におとづるゝ夜も。快
くは入りこぬこそにくけれ。

若くて下宿住居せし頃。小女來りて蚊屋つらんといへど。
決してゆるさざりしに。一夜いたく攻めよせられて苦し
みしかば。日頃の我慢も忘れて釣らせんとすれど。人は
皆寐たり。せんかたなさに布團引きおほひ。頭を風呂敷
包にして眠らんとすれど。あつくてたまらず。手を出だ
せば忽に集まりては刺す事。針の如し。今更おもへば獨
笑ひぞせらるゝ。

されども此もの。あながちに無くもがなとのみは思はず。
去年の夏佐渡に旅して。本間といふ家に宿りしが。庭の

麻もて織りたる蚊屋とて。いとあたらしく大きなを。
十疊の間につりて。ラムプも机も。茶碗くだものをさへ
に。入れてくれしは。浮世へだてし書齋を一つ得たる心
地して。うれしかりき。火を吹きけして眠らんとするに。
桐の葉でしの月さへ近くながめやられて。

開けぬ頃

実戸の伯父上が長崎より歸り給ふとて。御みやげに摺附
木を賜はりたるうれしさこそ。忘られね。小さく丸き箱
に入りて。赤き青き玉のつきたるものなりしが。摺れば
音して。ぱつと火のいづるが面白さに。明暮もちあそび

おたりしは。八つ九つの頃なりけん。思ひきや四十年近くの今日は。マツチと呼ばれて。道行く人まで携ふる具とならんとは。

此頃の事なりき。手習友だちは。一寸ばかりなる糸の如きものを贈りぬ。引けば伸ぶるが不思議なりとて。寶のやうに持ちあそびしは。思へば破れし靴のゴムなりき。開けぬ頃には。かゝる事多かりしぞかし。

英國の軍艦。わが故郷の宇和島に來れる事ありしが。人々その舟を見物に行けば。水兵どもはガラスの壘を一つづゝくれたり。底のあがりたるこそ珍らしけれとて。持ちかへりては花をさすもあり。桃の節句に白酒いるゝも

りき。あはれ貧女の買ひあるくビールの明壇。かくまで歓迎せらるゝ折もありしよ。

牛を殺して其肉くふこと。是も明治の二三年頃よりおこりけん。始は其名をいふも思ひ嫌ひつゝ。田を耕す猪なればとて。田じゝと稱へ。又は子丑寅の順序によりて。寅の前などゝも呼びたりき。太神宮の嫌はせ給ふものなりとて。神棚ある家にては鍋をもちだし。庭にて煮る人もありしとぞ。

いにし年京都の博覽會みにもものして。四條わたりの家に。晝飯せんとゆきたりしに。隣の席には僧侶五六人まとおをなし。法衣にも恥ぢず。牛肉の鍋に箸さし入れつゝ。

飲みつ笑ひつして打ち興じぬたりしには。人情の變遷にこそ驚かれしか。

道成寺

横濱まで友を送りて行きたるに。舟まだ出でず。芝居一つ見て行かずやといはれて。入りたるは羽衣座なりき。幕あけば波の上に舟あり。堤のほとりに榜示ありて。日高川渡場としるしたり。三味線なり淨瑠璃はじまりて。島田に結ひたる美しき娘いで来る。のがれし僧をおひかけて。道成寺に行かんとするなり。娘の後ろをば上下きたる人とらへゐて。人形使ふ眞似す。

使はるゝ人形。首をふり手を動かし。拍子をふみ身を躍らせ。總べて人のするに任せてあやつらるゝが如し。使ひ終りて手をゆるむれば。腰より上を前に打ち垂れ。首さへ手さへ波うたせつゝ。釣られをるさまを装ふなど。見るもの誰か。涙もつ目の白粉の下にひろみをるを知らん。況や此腮。延ばさば延ぶべき鬚もつ人なるをや。世には我もつ言語をすてゝ。文を漢にし詩を唐にせんとつとむる人あり。作るも好むも此芝居みるのたぐひか。

金平糖

わが田舎には上菓子といふものなくして。三月節句の雛

の手向も。京大阪より取り寄するなれば。たま／＼母上より賜はる落雁有平のかけにても。子供心には。うれしき事たぐひなかりき。されば常は佛前にそなふるにも。目鏡菓子とて。小麦粉にて作れる目鏡の形したるものか。黒砂糖の餡を入れて。菊牡丹の様に作れる花餅。もしくは女郎花ともいひつべき伊賀もちの類に過ぎざりしかば。江戸より歸りたる人の。珍らしき折など贈れる時は。父上の蓋うちひらき給ふかたへに。妹と首を三つ四つならべて。唯おどろきつつ見物せし事もありき。緑の蕨。紅の梅。いかでか俄に掌中の玉となる事を思はん。

ある時母上は仰せられき。金平糖はいかにして作ると思ふぞ。おのれは答へぬ。丸き玉に角を一粒づゝ附くるならんと。母上いたく笑ひて。さる氣長き作りかたにはあるまじ。御身も都にいづる事あらば。よく見てこよと宣ひしは。十一二の頃にやありけん。此時まことに金平糖つくる家はなかりしなり。されば二粒三粒得たる喜び。風月堂の西洋菓子にも。優りたるこそ理りなれ。東京に来てのち。金平糖はさまでうまからぬものなるを知りぬ。うまからざるには非ず。口のおどりになれたるぞかし。此頃みれば。子供が置き忘れたる紙包の内より。蟻にやす／＼と引き行かるゝもしば／＼なり。人ほど始

をわすれたがるものあるべしや。遠國の講習會にもものしたりし時。その閉會の式ありてのち。會員一同に茶菓の饗應ありといふを見れば。委員金米糖を袋よりいだして。少しづつテーブルの上に置きつつ配るなり。頗に鬚ある校長教員。いと樂しげに打ち味ひつゝ茶をすゝるさまカステーラ羊羹にことならず。そぞろに少年の昔思ひいでたるは此時なりき。今は田舎にも菓子作る家あり。賣るには都びたる折をも用ふ。さはいへ猶も花餅いがもちの時代こそ戀しけれ。

唐人笛

我故郷に袋町といふありて。そこに祭れる惠比須の社は。正月十一日に祭をなし。其夜は福引を催すをもて。にぎはふ事限りなし。

此鬮札はかねてより家々に賣りあるくを。我家にても吉例として。いつも求むる事なりしが。僕をやりて。何があたるならんなど。母上とかたりつゝ寐たりし曉。めさめて見れば。枕元に物こそあれ。紙にて作れる白き唐人笛なれば。嬉しさのあまり。ふうと鳴らして。夜中なるにと叱られたりしが。朝になりて見れば。白きと思ひしはかはりて。山吹の花の色とぞなりぬる。誰が取りかへしぞといへば。母上明りのかげと晝の光とは。物の色目

のかはるものぞと宣ひし事。今も童どもの喇叭吹きあるくを見る毎に。思ひぞいでらるゝ。

御賞賜

童の頃藩の學校に通學するに。年の終には御賞賜と稱へて勉強なりし人々へは紙扇などたまはる例なりしが。八つの頃にや。論語孟子など習ひをへたりし年。五色の色したりし有職扇を五本ならべて。いてふの葉の形に。要の方のみ包みてたまはりたる嬉しさ。勲賞などいふもの知らぬ心には。桃太郎が鬼が島よりの家づとも。是にはいかでと思はれたり。

歸りて見せまゐらせたれば。父母御けしきうるはしく。汝が殿様よりの拜領は。是が始めてなれば。めでたく机の引出しにしまひおけと。のたまひしかば。入れはしたるものゝ。見ずには居られず。出しては廣げ。たゞみてはしまひ。朝おくれれば出だし。學校よりかへれば出だし。花よりも。紅葉よりも。めでならしつる事ありしが。かかる樂しみは。又得んとして再び得られず。

涼しき蔭

白き服装せる兵卒七人。喇叭を手にしてならび立てば。一人これに向ひて教へつゝあり。あつき日影は天に怒り

て。土もほこりも烟ならんとす。青山の練兵場にて涼しきは。此木かげのみ。学校の生徒も荷を負ふ丁稚も。稽古見ながらこゝにあつまる。

十二社の瀧

あまりの暑さによき陰もがなとて。ものしたるは。十二社の瀧のもとなり。水は八つの瓶なる酒のまんとする如き大蛇の口より。吐きいださるゝを。あなつめたしとて。人々身を打たせをるさま。見るだにもそゝる寒きほどになりぬ。飛び散る雫。しげりあひたる小笹にかゝりて霰の如し。

赤間が關

童なりし頃。手習の稽古に持て行く硯は。虎石とて質いとあらしき石なりしが。卒業ちかくなりたる生徒は。赤間が關といへる。やゝ柔らかき質のを用ひをる羨ましさ。我もいかで赤間が關にならばやと。明暮いひゐたりしに。或日そとよりかへりて見れば。伯母君おはしたり。ようこそとて頭さぐれば。御身が部屋の机を見よとのたまふ。障子あくれば。花より紅葉より戀しかりたる硯こそ。一つ置きてありしか。

茄子

茄子を植ゑたるに。花もちたりと喜ぶ間もなく。紫の玉
なす實の垂れそめたるは。待ちえたる菊の苔に劣れるか
は。初物なればまづとて。神棚にさゝぐる心。つくらぬ
人は思ひも知るまじ。

秋風やうく老いてのち。黄ばめる葉かげに二つばかり
残れるは。又來ん夏の望も見えて。あはれさ唯ならず。

團扇

鎌倉にゐたりし夏。そゞろあるきしながら。片瀬まで行

きつるに。曇りたる日は晴れて暑ければ。休みたる家に
て。團扇一つもらひ。あふぎく江の島に渡りぬ。
いつもの岩本に立ちよらんとするに。何故にか今日は休
めともいはず。手代も迎へず。さてはと心づきて見れば。
打ちかざし行く團扇に。えびすやといふ文字こそ。あら
はれたれ。

丸盆

十四五年前に。物まなばんとて。家にゐたる乙女あり。
其のこしおきたる丸盆は。膳に用ひたるものなりしが。
いと古風にして。剥げても雅致あるが面白ければ。今も

時々前にいづるを。出づる毎には。其人の質素なりしさ
 ま。勉強せし心がけなど。語りぐさとならぬ折なし。
 此頃その人。三女うまれたりとて。つれ來りしかば。か
 の盆にくだもの載せて出だしたるに。命の長き事よとて
 驚きぬ。

鯛

父上は釣を好み給へば。舟も新しく造らせて持ち給へり。
 ある夜寐てゐたるに。起きよくとのたまふ聲は。母君
 なり。何事ならんと行きて見れば。父上夜釣よりかへり
 給ひしとて。二三尺の鯛は。桶にはね籠に躍りつゝ。今

しも下男などに運ばれ來りしなり。其外の青き黄なる中
 魚小魚。かぞへもつくされぬ程なりしが。先づ大きな
 を一籠とて。藩主の邸に捧げられし事のみは。忘れやら
 れず。大きな法螺の貝の肉つきたるをいたゞきしも。
 此時なりしか。

涙

おのれ親しき人に死にわかれつる事。しばくあれど。
 今はの時はあまりの驚にて。涙だに出でこず。柩に納め
 て蓋うちかたむる時ぞ。泉の如く流れきたりて。聲さへ
 吞まるゝは。誰もしかにや。

妹を人にやらんとして。婚禮の行列おくりいだす折に。さらばといはれて。今より朝夕あはれぬと思へば。ふと胸せまりて。瀧の如くに出でこし涙。まぎらはしつれど人も見つらん。

オルガン

オルガンといふもの。初めて見きゝたりしは廣島にゐたりし頃。亞米利加の教師のもとにてなりき。水の滴が大洋をなすといふ詩を。ミセス、カロザースが弾きて聞かせしは。面白からざりしにもあらねど。習はゞ教へんといはれしを。さらば願はんといひながら。試験や日課やと

おはれつゝ遂に果さず。

今は家にもすゑて。明暮妻や子供の弾きならすを。羨ましと思ふことに。悔しきは二十五年前のおこたりぞかし。

煎餅

正月の謠の會には。餘興として福引をもよほし。其番組の文句に寄せなどしつゝ。おのゝ趣向を凝らす事なるが。或は天上に歸らん事もかなふまじとて。鼠のもてあそびを餅に入れて持ちゆくもあり。皆一同に立ちかへるとて。おきやがり小法師を十二いだしたるもありしが。觀世の弟まだ年ゆかざりし頃。鹽煎餅を竿につらぬき。

小船せうせんに棹せうさしてと戯れしには。皆々腹をかゝへてこそ興
せしか。

下駄

和蘭陀人のはじめて我國に來りしが。下駄を見まねに作
らんとして。先づ板をけづり。齒をはめ鼻緒をとほす穴
を明けんとせしに。足のおやゆびと他の指との間は片よ
りたれば。まんなかにては履かるまじとて。右の足のは
左の方へ。左の足のは右のかたへよせて附けたるに。は
けば傾き歩けばころびて。つひに用をなさざりしといふ。
物は理論よりも經驗こそ大事なれ。

信心

宇和島に山家清兵衛といひし忠臣あり。逆臣のために憎
まれて。六月二十四日の夜蚊屋にまとひ殺されたりとて。
其靈神に信心こらす人々は。此蚊屋つらさして寝るを習
とす。わが幼なかりし時。知りたる人にもそれがありし
を。いかにして凌ぎ給ふぞと問へば。夜すがら家をいで
とあるきあかすとぞ答へし。さる信心を神も受け給ふに
や。

よその落花

古寺のれくに墓あり。苔むし蔦かゝりて文字も知られず。僧にとへども。主なくて年久しといふこそあはれなれ。嵐は今も來りて。よその落花をこゝにおくる。

馬の脊越

みかへる松原霧にかくれて。朝山いと寒し。馬の脊をえともいふへき處を。ぬれく行けば。梢うすく足もとにあらはれて。時鳥二聲三聲おどろかし顔になく。

榮螺

故郷にかへりて人に招かれたるに。榮螺の壺焼といふも

の。先生はめしあがるにやと。あるじ問ふ。それこそ好物なれ。江の島に遊びて味ふ心は。たぐひなきをといへば。御覽にもなりたる事なからんと思ひしにとて。すゝめたり。我はまだ故郷を忘れざるに。かれこそ我ふるさと人なりしを忘れたれ。

唱歌

文部省より學制といふもの分たれしは。明治五年なりしと覺ゆ。學課の中に唱歌圖畫などいふ名目のあるを見て。我手習の稽古せし頃は。休みの間にても。畫をかく事さへ自由ならず。まして誰やらが鼻唄うたひたりとて。罰

に掃除させられたる事も忘れぬものを。之を學課として習ふとはと。怪しみ思ひしが。今は津々浦々山の中の一村里まで。學校あれば必ず君が代はの聲を聞くに至りぬ。花おちて梢あをし。今日も軍歌うたひつゝ行く生徒の一隊。おしたてたる校旗と共に我門を過ぐ。

庚申堂

近きわたり庚申堂あり。乳母に負はれては日ごとのやうに遊びたるが。里人の納めたる括り猿の大きな小さき。四五十ばかりも柱などに釣りさげてありけるを。今も記憶せり。見ざる言はざる聞かざるの石の前にて。土

あそびをすれば。あの鼻かけたる言はざるさまに叱られますぞと。言はれし小兒はなほ無事なるを。乳母の古塚。水たむくる人ありやなしや。

釣瓶

春の山路をあへきぐのぼれば。あつき事かぎりなし。峠の里に井戸を見つけて汲まんとせしに。釣瓶の中には。残れる水に山吹三つ四つ浮ぶ。

赤茄子

親類の家に先祖祭に招かれしに。供物の中に人よりおく

りたる赤茄子ありけるを。式をはり下げてのち。あまりに美しければ。味ひて見ばやとの評議おこりぬ。されども誰も食ひかたを知らず。一人は生に砂糖つけて食ふべしといひ。一人は鹽こそよからめといふにまかせて。思ひくゝに試みたるに。澁くゝ。いやなる匂さへして。口に入るべくもあらず。はては焼きたらばいかゞとて。火にかけて見たれど。なほ同じさまなりしかば。笑ひて止みたる事ありき。後に聞けば。スープにするか。ソースを掛くるが常なりとぞ。歐羅巴人の始めて日本茶を得たりし時。煮て鹽つけて食ひたるに。苦くて捨てしといふ話も此たぐひか。

時の太鼓

わが若かりし日は。時計なかりしといへば。童あやしみて。學校へ行くには如何にせしと問ふ。時間ごと。城の屋倉にて太鼓打ちて知らせしよといへば。相撲の様なりとして大きに笑ふ。さても太鼓打つ人は。何にて時間を心得るやらんと問へば。其話を面白けれ。大きな角火鉢に溝をつけて香をもち。其燃えて行く道に。九つ時八つ時七つ時などいふ札を立ておき。そこまで火が來れば。其時刻ぞと知りたるなり。されば雨の日は香しめりて一時間ながく。快晴の日は短きもをかしからずやと語

るに。おもしろがりて。猶その話をつゞけよといふ折しも。柱の時計午後の十時を打つ。おもひいでたり。九月の中頃なりしが。母君と四つ時。すなはち今の十時うちたらば寢んといひゐたるに。待てどもぐく太鼓きこえず。母君さては芝居のある故ならんと。宣ひし事ありき。其時は何事とも知らざりしかど。後に聞けば。夜芝居は四つ時までが制限なれば。興行中には賄賂つかひて。時の太鼓を延ばしてもらふ習ありとか。

城

わが生れしは城の麓なり。夏くれば。天守にのぼりて涼しき風に吹かれしを思ひ。冬くれば。木の間くゞりて椎の實ひろひたる事をおもふ。井戸の丸といふに深き井ありて。海まで抜けたるといひつたへたれば。のぞきて見るもそゞろ寒く。雷門には雷の落ちたる物語をのこして。雨の日など物すこし。國を去る時。舟より長く見かへられしは汝が影よ。

潮 音 寺

潮音寺に観音堂あり。こだかき處なれば。宇和島の城下のこらす見ゆ。天井の板には極彩色にて。花鳥人物など

を畫がきたれば。それ見んとて。子供の頃しばく行きたり。四萬六千日には涼みがてらの夜まうで。いとにぎはしければ。俳句このむ人は。行燈にしるして奉るもあり。おのれも一年さる事しつるが。渡部桃仙といひし宗匠。虫なくや潮の音をきかぬ寺。と追吟せられしこそ。思ひいでらるれ。

花葵

燃えたつ如き紅の色したる花葵の。五月雨にぬれつゝ立てるを見れば。故郷の庭にありしに少しもかはらず。穴戸といふ家の佛事に招かれける日。この花の筒に立ち

てあるを見て。柿島といひし翁。葵が散れば五月雨は晴るゝといふを。まだ半にもなるまじと語られし言葉。歌直してもらひし人なれば。今もなつかし。

六角堂

家の大伯母上のたまふ。六角堂の中に赤い小僧が一人をるものは何ぞ。此謎ときたらば。望むものを與ふべしと。おのれ子供心に少しも分らず。二日も三日も考へたりしが。ふと妹の持ちたるほゞづきを見て。是れならずやと申しゝかば。さなりゝとて。請ひたるまゝに。天神さまの懸物と神酒どくりとを。たまはりたる事ありき。

新年梅

朝日さす軒端の梅は

くちびる唇を半ばひらきて

笑まひつゝ我に語らく

さえ渡る師走の月夜

雪よりも白き光を

我友と世に出でそめし

其かみは乙女の指の

それよりもちひ小さき苔

なつかしと誰か見るべき

あみ書學ぶ窓の板戸を

さし捨てゝ人ぞ眠りし

折りさして人ぞ歸りし

あはれ世はかくなりけりと

思ふ間に年は歸りて

門の松みどりも深き

君が代を祝ふ歌聲

こゝかして響くまに

人は來て我木この下もとを

なつかしみよりては詠め

天の下春に先だつ

色香をも今こそめづれ

しかはあれど霜にあはずは

身の譽かくやは得べき

國の爲め世のため盡す

人々の清き心も

よし暫し雪の下草

埋もれて香は隠すとも

めでられん時なからめや

君が代の光いたらぬ

隈しなれば

歌の會

わがはじめて歌の會にいでたるは。十五の年の三月なり
 き。其日は友だち打ちつれ。蕨とりに山に行きたりしが。
 歸るや直に行かんとせしに。兼題の歌まだ出來てあらず。
 母君わがために膳をしらへし給ふかたはらの様にいでし。
 行きかよふ人こそ絶えぬ嵐山

みねの櫻の花さきしより

とひねりいだしたる事。いまでも記憶を離れず。題は名所
 の花なりけん。

會は師とせし穗積重樹翁の家にてなりしが。其ありさま

の心に残るは。師のみづからしたまひし披講の聲と。庭の櫻の色香のみ。

古新聞

汽車にて新聞をよむに。一面も二面も。何とやらん見きゝたる事のみなり。月日を見れば。一月前のなりしこそ腹立たしけれ。窓を開きて呼べども。賣子すでにあらず。是は國府津にて十年あまりも前の事ぞかし。去年の秋友と大坂に行きしに。是ひとつとて分たれたるサンドウイッチの包紙を見れば。二三年前の新聞なりき。讀むともなしに讀みもてゆけば。別れし古人にめぐりあ

ひたる心地もするかな。古きもの必ずしも腹立たしきものにはあらず。

夏橙

田舎にて人を訪ひたるに。是はわが山につくりたる自慢の夏だい／＼なりとて。砂糖いと白くかけたるを。氷の如き皿に盛りていだしぬ。おのれは齒の浮くたちにて。かゝるものあまり口に入れたる事なけれど。すゝめらるゝまゝに。一つとりて試みたるに。酸き事かぎりなし。あるじも妻君も一口にこりて。再び手をいださぬさまなり。げにも是は風味よしと客よりほめられもせず。さりと

てあるじより止めよともいはれず。共に他の話にまぎらはしてこそやみにしか。

氷水

佐渡には狐のあるまじといはれて。有りと答へしかば。其色を問はれ。形を問はれ。遂に鳴聲を問はるゝに至りて。答究し失敗せし物語は。作りて能の狂言にあり。昨年の夏かの國に至りて。氷水うる家を問ひたるに。佐渡にはさるものなしと答へしが。をかしければ。御身も都にいづる時は。氷水賣る聲をまづ習ひおくべしとて。笑ひし事もありき。

カステレーラ

英語を始めて習ひける頃。會話の時間にアイ、ライキ、カステレーラ、ベリ、マツチ、といひしかば。リーネルといひたる教師。そはスポンジ、ケーキ(海綿菓子)とこそいへ。カステレーラは英語ならずと教へたり。後或人の語りしは。昔し長崎の人とか。此菓子の名を和陀蘭人に尋ねしに。其箱にゑがきてある城の畫の事と思ひあやまり。カステルと答へしより。世に廣まれりしとぞ。外國語の來れるはじめには。さる事も多かりけんかし。

挽茶

挽茶をいだされて失敗せし事おほかりし中にも。殊に顔を赤くしたりしは。四年ばかり前なりき。故郷の宇和島に歸りける折。何とかいひたる婦人會にて。文學の物語してよと頼まれしかば。二時間ほども物して歸らんとおもひしに。是より本式に挽茶たてゝまゐらせんとする計畫ありとて。引きとめらるゝ事ねんぞろなり。好意は謝すべしといへども。禮も作法も知らざるものが。六七十人も茶の湯ならひたる令嬢がたのあつまりゐる目の前にて。茶碗取れとの嚴命は。首きらるゝよりもいとつらし。

いかゞはせんと。ためらひゐたるに。同行せし門人。かくと見るより。時計をいだして。先生おやくそくの時間過ぎては。かしての都合もあしからんとて。袂ひきつゝ促がしくれたるを機會にして。のがれいでたりし玄關口は。虎の口よりも恐ろしかりき。今一つは。信州の月見に行きたりし秋。網掛村といふ處の豪家。月よりのかへるさに一ふくさしあげんといふ。辭せんやうもなければ。行きて床の前に座をしめたり。伴なふ人々は皆土地の教育家なりしが。挽茶いで菓子いで。辛うじてこゝを逃れいでぬ。門をいづるや一人まづ曰く。私は先生のまねさへしたらばよからんとて。茶碗

とりたりしが。何にもせよ大汗かきたりと。是よりはち
と勉強して茶碗の持かたくらゐは習ひおかんと思ひたり
しを。二三日たてば又忘るゝこと。是のみならめや。

松葉牡丹

水も湯と湧く夏の日に。いよ／＼咲きほこる松葉牡丹こ
そ。愛らしけれ。或は賤が藁屋の軒端に。或は海士がす
みかの庭口に。黄なる赤き色しつゝ盛みせたるは。晝の
寐ざめのつれ／＼なぐさる。西瓜の味に劣れるかは。
葉山の庵に植ゑ捨てたりし去年の此花。ことし持ちたる
苔はいくつ。

八幡宮

ふるさとの八幡宮は。陰暦の八月十五日に祭禮を行ふを
もて。人皆その夜宮に月見がてら参詣す。鳥居の前にい
と大きな河原あれば。柿店ならべて賣る者多し。名づ
けて柿祭といふ。おのれ家僕につれられて。一とせ行き
たるに。誰とは知らず頬かむりなどせし人。こゝにもか
しこにも腰うちかけて。皮をむきをるを見たり。月のか
げは晝に似て。宮には神樂の太鼓とゞろく。

螢

江の島にやどりしに。波の音心地よく聞えて。夜は更け
そめぬ。眠らんとして燈を消せば。蚊屋の内に光るもの
あり。螢と見れば憎くもあらねど。そとを照らさせんこ
そよからめとて。蚊屋をまくれば。くゞり出でゝも。な
ほ枕のあたりにふはりくと飛ぶ。

紫陽花

教子なる乙女たち集めて。歌の會を開きぬ。折しも六月
の末つかた。日もあつければ。椽に出で窓にそひ。筆もつ
もあれば本をひろぐるもあり。探題ひらきて考に沈む人。
短冊出だして清書にかゝる人。よそめに見なばいかに興

あらん。

おのれふと庭にいで。青葉をぐらき木のまを隔てつゝ
見入れたるに。衣の色。おびの色。リボン花かんざしの
よろほひに至るまで。趣味さまざまの小世界。畫にもか
ゝまほしうこそおぼえたれ。其かず二十三人もやありけ
らし。
何がし伯の令嬢。ことし十六なるが。よみいでられたる
は。

をとめ子が振りつゝ遊ぶ袖の色に

似て咲きにけり紫陽花の花

げにも其花の色したる衣もまじりたり。されども兼題の

水鶏は。水とほければこゝまでは聞えず。

夏海棠

海棠に似たる花を。一鉢もとめ來りて庭に置くに。又ふりきぬる五月雨にぬれて。花ごとに露の玉をかざれるさま。つれづれ慰むるよすがとなりぬ。

此ものゝ名よ。賣りたる翁はほくさといひたれど。いかなる文字にや。みやびやかに聞えず。秋海棠といふもあれば。夏海棠とや名づけん。いな草に近ければ。草海棠こそよからめなど。語りあふ折しも。友の來りて阿蘭陀海棠ぞ誠の名なるといふにて。言葉だゝかひは止みぬ。

さるにても。おのれはなほ夏海棠を捨つるに忍びず。

白羽の蝶

五月雨やうく晴れて。夕日はなやかに青葉の梢を照らす。明日は暑くなるべし。紫陽花の花は蝶の如くにこぼれ。白羽の蝶は紫陽花の花の如くに飛ぶ。

蜻蛉

池に橋あり。橋の下には眞菰まじりに杜若さきたり。童におはれて飛びくる蜻蛉。今しも殊に丈高き花の上にとまる。

夏の食味

夏やすみにならんとする前。友とひ來りて。下宿せんに
 は何くがよからんといふ。何がし樓は涼しけれども。食
 物のあしきこそ缺點なれなど語れば。夏はいかなる者も
 味なければ。食のよしあし我は少しも問ふところに非ず
 とて。空氣の流通のみを專と撰べり。かのれは夏とても
 食味は變はらぬものを。其よしあし如何に健康上の大問
 題ならずやと。語りし事もありしを思へば。早く十七八
 年の過去とはなりぬ。食味ある人は。今なほ箸とりて膳
 にむかふに。食味なかりし人は。古寺の石となりて苔す

にで青し。

櫻の實

叔母上よりみやげにもらひたる箱根細工の籠は。小さき
 娘に提げられて庭にいでぬ。暫くして持てこしを見れば。
 櫻の實なかに満ちたり。心せよ木かげには毛虫こそ多け
 れ。

茶碗

かのれ旅を好むが故に。旅の宿にてもらひたる手拭盃の
 たぐひに至るまで。保存して。時々いだし見るを樂しみ

となす。去年の秋奥州線の瀛車に乗りたるに。残暑の頃にて。喉のかわく事甚しく。茶賣の聲きくごとに買ひたりしが。茶碗はつもりて五つになりぬ。赤きもあり白きもあり。揃はざる處に味あれば。持ちかへりて歌の會にいだしたるに。人々おもしろしと。手を打ちて笑ふ。あたかもよし其時の兼題は瀛車なりき。

おさん狸

廣島におさんだぬきといふ古狸ありけり。何とかいひし名人の能役者。嚴島神社に能を奉納しての歸るさ。江波といふ處にて。夜ふけて舟より上りしに。月朧にて道さ

だかならず。折ふし怪しげなる小女來りて。旦那おせなかなるは何ものぞと問ふ。是かといひさま。風呂敷包の中より般若の面一つ取りいだして。ふとかぶりしに。いたく驚き。わらは誠は狸なりしが。人間のばけ方には叶ひ侍らず。此事たれにも漏らし給ふなよと。いひすて、こそ逃げ失せけれ。

我友。此物語を英語の文章に書いて出したりしに。外國教師のいたくほめて。甚だよしとの評語をぞあたへし。

馬車

馬丁鞭をあげて一打うてば。骨と皮なる馬は。馴れたる

道を一直線に走り行く。馬丁酷なり。馬あはれなり。な
ど評しつゝも。此車に乗る人われのみならず。田舎に祭
ありて。村のちまたに舞ひおたる獅子。えいと一聲かけ
られて。左に右に避くる子供。水かけられたる蟻の子の
如し。

猫に冠

猫にかんぶくろといふは。今日の俗語。猫に冠かぶせた
るが。古人のたはむれならんと。一人がいへば。さる證
據やはあると。又一人とひかへず。あるともく。さら
ば何の書に。枕冊子なるを知らずや。上にさぶらふ御猫

は。かうむり賜はりて。命婦のおもとゝいていとをかしけ
ればと。あきらかに有るものといふにぞ。ありあふ人
々。だまされたりとて笑ひとよめく。命のぶるは女學生
の集まりぞかし。

時計の針

日清戦争の従軍日記を讀むに。寒氣つよくして時計の針
をとめたりといふ事あり。文の空言ならんと思ひしに。
一とせ信州の講習會にゆきて。講義せし冬なりき。朝ま
だ早しと思ひしに。會場より何とて遅きぞとて。迎來る
いで、見れば。既に二時間もすぎたりとて。會員皆あく

びしつゝ待ちぬたり。袂時計を見れどもとまりてもあらず。いぶかしさに問へば。寒氣甚だしき時は。油をほりて動かぬ事あれども。又すこしゆるめば手をかけねども進むなり。先生の時計もそれならんといはれたるにて。始めて知りぬ。従軍記の偽ならざりしことを。北清事件にて名譽の戦死をなしたる服部中佐の遺物は。其家に達しぬ。時計を見れば。其針あたかも戦死の時間を指したり。斃れたる時。その刺撃は針のすゝみをとゞめしならん。物は實際に見ざれば。うそらしく思はるゝ事こそ多けれ。まして戦の物語においてをや。

遠征のいろは

波の上に盪うかべて乗りたるは。漁夫の子なり。三四尺の竿を手にして。ボートの如くにかけば。盪傾きながらゆらめき進む。夕日かたむく青海原に。萬里遠征のいろは習ふは。一人ならず。二人ならず。

小兒の寫眞

かはゆき小兒を寫させんとて。乳母は椅子のうしろに隠れてかゝへをり。寫眞師は器械をすゑて打ち向ふに。小兒うできて少しも靜まらず。ふりつゝみなと持ちいだして。遊ばしすかしつゝ。片手を鏡の蓋にかけて。あと

いふ間に寫しをはりぬ。知らず今より二三十年の後。いかなる人の手箱の中にてか。此寫眞は懷舊の物語をなす。

筏

秋の雨しづかにそゞぎて。嵐山の麓に紅葉見る人を見ず。蔦も色づく岸をかすめて。さしくだす筏の上には。篋きて立てる人畫に似たり。

張物板

張物板を椽に立て掛け。ふとんを載せてはすべりある子あり。春日あたゝかに照らして。太鼓たゝきぬたる弟

も其中に加はる。

花簪

産土神社の春祭に神樂あり。わが故郷のは伊豫神樂とて。能と舞樂とに似たる品よきものにて。神官みづからこれを舞ふ事なるが。母君まだ十六七におはしける日。これを見にもものし給ひしに。舞臺も棧敷も同じ拜殿なれば。母君の花かんざし。狩衣の露にかゝりて持てゆかれぬ。あなやと思へど。舞人は知らずがほにて。其まゝ樂屋に入りたる事あり。後八犬傳をよみて。對牛樓の處に至る毎に。いつも思ひいでらるゝよと。衣ぬひながら語り給

ひし事ありき。

梅の實

天神さまに供へたる梅の實。人の踏むところに捨つべからずとて。庭の小高き處に埋め。竹をしるしにさしたる事あり。三十四五年も立ちたる此春。花となりて誰にか折らるゝ。

村雨

俄にふりける村雨に。傘なき人々。西に東に走りちがふ。高殿のみす巻きあげて。花に心を悩ます姫君。なりはひ失ひたる賤のありとしも知らず。

新茶

手づから摘みて作れるなりとて。人の新茶を送れる。いとうれし。日ながき窓に讀書あきたる時。乙女來りて茶碗につぎくるゝ。更にいとうれし。若葉のにほひは。風と共に盆のあたりをぞめぐる。

マツチ

煙草は吞まざれども。旅にて袂を離さぬはマツチなり。三更人しづまりて。枕のともし火きえたる時。道にて車

夫の提灯つけんとして。此ものなかりし時。人にも我にも。不意の便をあたふる折こそ多けれ。さはいへ煙草盆に此もの載せて客にいだしたるは。禮儀の末路を證明してあまりあり。

伊 豫 神 樂

みづがきの久しき世より

伊豫の國宇和の郡に

傳はれる神樂の舞は

樂みくに似て樂にもあらず

能のうに似て能にもあらず

一種いちしゆの手ぶり足ぶみ

神さびてをかしき遊び

品高く清きわざをき

打つ鼓とゞろと響き

吹く笛はひゝらとなりて

千早振神のみまへに

白妙の袖ふる時は

此里の乙女うなゐら

むら肝の心も空に

行く水の走りきつとひ

見るさまのいかに樂しき

嬉しとは神もめづらん

面白と人ぞよろこぶ

かくばかり妙なる舞の

一度はたえんとせしを

糸筋の命なりしを

嬉しきは時なりけりな

此里をうしはく神の

御心と人あひ助けて

又も世におこしあらはし

千代かけてすたらぬ物と

定まれる今日の嬉しさ

反歌

古への手ぶり足ふみ一つだに

岸原の舞あしはらくづさで習へ舞人のとも

手にとりてふるや小鈴のすゞやかに

心なるまではやせ人々

さか行かん明日の樂しさ

翁とてわびやはをらん

木綿ゆふとりて立ち舞ふ人の

それよりも我ぞ舞ひ出でん

心地のみして

嬉しとはみそなはすらん皇神も

昔にかへす舞の袂を

岩屋戸の神代はしらす目の前に

光まちえし心地こそすれ

寶丹

守田治兵衛。人にかたりて曰く。我家の寶丹は。みづから手をくだして調合するを定とす。極暑嚴寒の日といへども怠る事なし。是れ他の賣藥にことなる所と。世には諸人あつめて歌の會をもよほし。詠草は門生に直させて。みづからは勞をとらざる宗匠あり。守田治兵衛の話を書

いて。恥ぢざらめやは。

石鹼

山里にやどりける時。カバンの中より石鹼をいだして。風呂場に持ち行き。忘れて座敷にかへりしに。五つ六つばかりの子供の。母をよぶ聲こそ聞ゆれ。曰く。こゝにお客さまの御菓子置き置きとあるよと。

癖

謠の師匠人に指南してゐたりしが。腹痛おこりぬとて。兩の手して腹を抑へたるに。弟子また同じく腹を抑ふ。

抑ふる人心なけれど。心なき間に。師匠の癖のうつさるゝは。かゝる少しの事よりならん。福澤先生紺足袋を好めば。慶應義塾の學生みな紺足袋となり。何がし宗匠團子といふ事を歌によめば。社中の青年われおとらじと。團子の串になどよむ事流行す。同じ癖にても。前なるは害なく。後なるは人に傳はりていと危し。

味噲

風ひきて熱甚しく。下宿屋の二階に伏したるまゝ。箸を近づけざる三日になりぬ。友來りて。何かほしきものあらずやと問ふ。味噲ならば味ひて見んと思へど。人にた

のまんもうるさければ。言はでぬたりと答へしに。早くも近くの店に走せ行き。竹の皮よりあふるゝばかりなるを。もとめきてこそ得させたれ。此友今は高等官にて。地方の參事官となれりと聞く。思へば味噲屋に使せしなさけも。二むかしばかりになりけり。

百人一首

勝つた負けたと叫びては。紅葉なす手を振り上げつゝ。百人一首の草子を打つ。坊さんたゝきの最中なり。子供三人。雨の日のつれぐゝを。母のそばにむつましく暮らすはよけれど。罪なく鞭うたるゝ僧正遍昭こそ。氣の毒

なれ。

櫻の枯葉

身を横たへて涼しき木かげに眠り居る犬。夢に見たるは肉か雪か。蟬の聲こずゑにしぐれて。櫻の枯葉一ひら枕に落つ。

石の牛

藤見がてら龜井戸の天神に詣づ。社の右のかたに人多く集まれるを。何ぞと見れば。石もて作れる牛のひたひに。遠くより銅貨を投げこゝろむるなり。のりたらば願ふ事

かなふべしといへど。落ちたるは七つ八つあるに。のりたるは五厘と一錢と只二つのみ。その中おしわけて來りし老婆の。ふと投げたるが。見事あたりしかば。皆々おぼえず手を拍ちてほむ。角のあたりに蝶とぶ花の如し。

馬

馬にげて青山の原を走りまはる。人々あれよくとおひかくれど。その早さに及ぶものなし。人々を疲らしたるのち。馬は遙かあなたにとままりて。綱ひきたれつゝ草をはむ。追ふもの來れり。馬また拒まず。

豆算

幼かりし日の衣類は。おほく母上手織の木綿なりしが。いつも之を織らんとしては。大豆を持ちいだし。黒と白とを三つづゝ五つづゝなど。互ちがひに並べて。とやせんかくやせましと計算し給ふさまなりき。縞の大小や糸の配置は。これによりて定まりしならん。

同じ頃ちかきあたりに豆腐屋あり。女あるじは常に大豆を店におきて。八分の豆腐かはんとする人。二匁をわたせば。まづ大豆を二十ならべ。其中より八粒のぞきて。十二のこるを釣と知りつゝ。一匁二分かへすとやうに。

五月雨

いつもしたりしかば。子供等には。大豆のをばさんと呼ばれたり。さても大豆は。古代のそろばんともいひつべきか。

ふりつゞく五月雨に。庭は池の如し。枝をひたせる未央柳は。花ちりそめて。すぎにし春の山吹よりもあはれに。垣の朝がほなかばは水にひたりて。花さくものとも忘られたるが如し。一尺の鰻いづこよりか來れりとて。子供はぬれつゝ追ひまはす。

豆腐

雨はれたる夕べ。豆腐を盆にのせて家に持ちゆく子あり。自轉車に突きあてられて。まるびたれば。盆も豆腐も泥の上におとしぬ。のる人にくし。泣く子あはれなり。

蠅

車にて木曾路をゆくに。引く男の脊なか。半は蠅なり。蠅も他人の力をたよりに。十里の旅行を試みんとするか。おへども去らず。拂へども逃げず。晝飯の膳に集まりきては。食さへ我ふるまひを受けんとぞする。

黒木の鳥居

竹の下道おくぶかく入れば。黒木の鳥居は昔戀しげに立てり。蔦の色やうく黄ばみはじめて。野の宮の秋まささに身にしまんとす。

えびす岩

恵比壽が鼻のえびす岩とて。烏帽子狩衣の姿したるが。海にのぞみて立てり。舟にて釣する人。此まへを過ぐるに。神酒をそなへずては魚とれずとて。父上なども徳利の酒を海にそゝぎ入れ給ひし事。おもひいづれば昨日の

如し。此岩なほもかはらずと聞くを。釣せし人は去り。
去らぬ人は老いたり。

百合

逗子ステーションの上に山あり。草葉にまじはりて百合
の花多く。赤きは火の如く。白きは雪の如し。瀛車まつ
間の長ければ。細道たづねてのぼらんとせしに。心なき
笛の音。今しも横須賀の方より響き來にけり。
窓より見上ぐる人。山より招きかくる花。瀛車のあゆみ
常よりも早し。

蝙蝠傘

幼かりし頃は。雨ふれば雨傘をさし。日てれば扇。もし
くは手笠とて。竹の皮笠に柄をつけたるを。かざしゆく
のみなりしが。十三四の頃より。晴雨をかぬる傘できた
り。名づけて照り降り。又は雨天といふ。やはり竹の骨
に青き紙を張りたる昔風のものなりき。
今は晴雨にさすのみならず。杖にも突かるゝ便利の品と
そ行はるれ。若緑なるあり。藤色なるあり。廣ぐる乙女
が顔さへ染めらるゝもうつくしや。

聲うちしめりたる音楽の内に。英照皇太后の今はの御くるまは。過ぎさせ給ふ。人も泣き神も泣き。天も泣き地も泣きぬべし。官人が手に取る松明の光。東山おろしに吹かれて。しめらんとしてはほのかに燃ゆ。

松明

横笛

牛込の堀に。瀛車まだできずして蓮おほかりし頃。夕風に吹かれつゝそゞろありきせしに。いづくやらん笛の音きこゆ。あゆみをうつして其家を見れば。伶人何がしの

住めるなり。習ひおぼえし陵王の曲。いとおもしろきに。花の匂はこゝまでも來れり。

夕日

賤の女二人。柴おひつれて里にいそぐ。道のべの野菊。かげやうく淡く。夕日は峰より二尺高し。

簾

嵐に破られたる簾。いまだ取りもかへざるに。月は其間より顔を見せたり。虫さへ鳴きぬ。故郷めきたる夕べにもあるかな。

田植

和靈神社に御田あり。その田植には。女ども牡丹の花笠かぶりつれて。四十人も五十人も立ちならぶ。歌うたふ聲のおもしろさは。待ちて聞くらん時鳥も。物のかずかは。

一とせ御田植みんとて。四五人うちつれ共にものしつ。わが歌まなびし穂積の翁。詩をよく作りし橋本武彬。文人畫かきたる菊地足稻。これらの先輩も。一行の内なりしと覺ゆ。

かへるさは何がし樓にて酒くみかはし。歌の當座などよ

心太

みつるが。こゝをいづるや。橋本氏は足もとよるけてころげたり。あなあぶなといふく。師の翁の口ずさまれしは。橋本がつひまちがうて足引の。山時鳥ほツちヨこけたか。こけたとは。ころげたるの方言。ほちよこけたかは。故郷にての時鳥の鳴き聲ぞかし。昔おもひいづる折しも。いづこなるらん。田植歌早稻田の方に響く。

松蔭に床几ならべて客を招けば。ゆきゝの旅人など。荷をおろしていつも休み居るを見る。日は空の半にありて。暑さあぶるが如くなるに。老婆が突きいだす心太は。椀

雨垂

に盛られて氷柱のやうなり。

おちくる雨を一つづゝ手を受けて。指の先に玉を附けた
りなぞいひしも。雨垂なりき。硯に受けて書をかき遊ば
んと。友だち集まりてつれぐゝなぐさめしも。雨垂なり
き。柱につかまり。あふむけに顔さしいだして。目とも
いはず鼻ともいはず。するどきしたゝりに洗はせつゝ。
すゝしくと叫びしも。雨垂なりき。五月雨はれがたき
夕べに。窓に鴨川集を開けば。むすびてながす軒の糸水
といふ蓮月の歌あり。げにも握りてはながしつる事さへ。

童こひしう思ひぞいでらるゝ。

林檎

長野より汽車に乗らんとして。ステーションに至れば。
里人は林檎五つ六つ小風呂敷包につゝみて。持てきてお
くれり。己れ両手に蝙蝠傘カバンなどあまた持ちたれば。
手にあまれるを指に挟みつゝ。からうじて乗りこまんと
すれば。いづる人のさわぎにやおされけん。林檎はころ
くゝと風呂敷よりのがれいでたり。ひろはんとすれば。
又ころがりくゝする事。みつよつになりぬ。驛鈴こゝろ
なし。はやちりんくゝとひゞきて。驛夫戸を立てに来る。

風鈴

客あり。すゞしき窓にて。おどけ話などしてゐたりしが。軒に音する風鈴を見あげつゝ。これは敦盛よといふ。なに故にと問へば。使ひ捨てたる一文銭が釣りてあればなりりと答ふ。げにも一門の果ぞ悲しきとは。敦盛のうたひの文句よとて。あるじも妻もわらへば。子供は短冊にかきたるわが文字の評かとおもひ。顔ふくらして立てり。

石竹

瓦の外には色もなき二階の屋根に。ひとり咲きゝほへる

は鉢の石竹なり。白と赤との絞りなるが。そよふく風になびくも優なるに。夕立のもてこし露を残して。ゆらめき居るこそ涼しけれ。折しも團扇もちたる人。虹をみんとて此窓をのぞく。

漁火

秋の雨こぼれいで、海の上くらし。消えのこるいさり火たゞ一つ。心ぼろげにたゞよひをるは。島のあなたか。こなたか。あはれ市の魚も命もてこそ釣りえたるなれ。

神樂

大本の社には正殿あれども拜殿なし。祭は陰曆の六月五日なるが。廣前の土の上に筵を敷き。其めぐりには竹を立て注連引きわたして。夜神樂をおこなふ。空には花の如き星の光をながめつゝ。あまたともしたる提灯のかげに集まりて。舞みるもおもしろければ。参詣人は年ごとに満ちたり。おのれも童の頃は缺かしたる事なかりしに。此頃ゆきて見れば。社はあれども神樂は絶えぬ。杉の木のままの弓張の月のみ。祭の夕べを忘れずがほなり。

繪馬

和靈神社に参詣する毎に。たのしみなるは繪馬殿なりき。お多福の幣と鈴をもちて神樂まひをる處と。羽柴筑前が佐久間玄蕃をにらみたる目より金の光のいでたる畫とは。今も記憶に残りたるが。二十年目にまうで、見れば。日清戦争の圖とこそ掛けかへたれ。さすがに新しきものは。未だ紙つぶての跡を見ず。

十三の娘

人の家にやどりたる朝。蚊屋は、づしたれども疊むすべ

を知らず。釣手をそろへてゐるはんとすれば。裾の方よりくづれゆきて。又もや始にかへる事しばくくなり。十三の娘ふと來りて手を添へくれたるにて。わが拙なさも隠れぬ。兩手にあまる大蚊屋なれども。やすくとたみみて押入に入れたるを見れば。物は馴るゝにありて。力づくにあらす。

木綿糸

旅する毎に。途中の用意とて。母君いつも針と糸とを授け給ふ。されども綻ぬふすべを知らねば。糸卷にまきたるまゝ。物の間よりいでくる事たびくくなりしが。女の

手まさぐりする木綿糸のくづだに。今は其世がたりの種となりぬ。

もじずり

五月雨はれたる頃。野に咲きいづる愛らしき草あり。細く短き葉の中より莖長くいで。白と桃色とのしぼりなる花。その先の方に巻きつきたるやうに咲く。故郷にてはもじずりと名づけて。常に見なれたるが。なつかしければ。青山の學校の庭にありしをもらひ來て。植ゑたる事もあれども。ことしは根さへ絶えけん。咲きもいでず。小林ます子を訪ひたりしに。小さき瓶にさしたるが。書

棚に乗りてありければ。何といふぞと問ひしに。こゝにてももじずりといふと答ふ。一花もらひてかへらんと思ひしに。いとま告げたるは夕暮のまぎれにて。忘れおきたる口惜しさよ。

歌の圓居に招かれたりし安藤こら子の庭にも。さきぬたれば。又とひぬたるに。ふるさとの美濃にても文字ずりなりといふ。折しも降りいでたる雨の。水晶の數珠など亂したるやうに。かゝりしさまこそ忘れね。

本田といふ家に此頃ゆけば。あはびの貝がらに植ゑたるが机の上にある。あたりはなれぬ猫さへうらやましく思はるゝは。我のみか人もか。

水車

家に春といひし女の童あり。十時を打てば。門をしめに
出づるを定とせしが。いつも其頃になれば。何くやらん
とんくくと物をたゝくやうの音きこゆ。狸の腹鼓ならん
などゝて。逃げてかけ入る事も。たびくになりぬ。

この事を近きわたりの人に語れば。われも曉おくるごと
に必ずさやうの響をきくなり。料理屋にて蒲鉾たゝく音
にやと思ひしよといふ。

つひに其物音の正體はわかりぬ。狸にもあらず。蒲鉾に
もあらず。關口の水車なりけるこそをかしけれ。げにも

十時にいで、聞けば。ことんくときこね。曉めざめて
きけばなほ同じ音ぞひびく。

夏の歌

十首

葉がくれに鈴をつらねし梅の實も

時々みえて朝風ぞふく

我宿の初花柑子ことしより

實になる秋の待遠にして

岩の上に鳥居ならべてうなる子が

水遊びする夏はきにけり

よちのぼるくさり危き神山の

水車

裏山いちで色づきにけり

板くちて年ふる川の 一つ橋

ゆく子あやふし螢みだれて

むつましく助けかはして賤の女は

隣の田にも採る早苗かな

浮びてはかくる、鯉の影みえて

ひともとゆらぐ河骨の花

中々に巻きたるよりも玉すだれ

もりくる月ぞ夏はすしき

山寺は明ぼのすし花皿の

あか井にふる、音も聞えて

ふるてらの庭の蓮池水こえて
ゆかの下までなく水鶏かな

木魚

鴟なき紅葉こぼれて。秋おいんとす。寺は何くぞ。木魚の音かすかに聞えて。野道一筋糸よりも細し。

人魂

信濃の小諸に成就寺といへる大伽藍あり。十日ばかり宿りぬたりしが。いと廣くして住持は何くにあるやらん。人こゑもわが方には聞えず。一方は床の間にて。一方は

玄關への通路。又一方は内庭をへだて、本堂に向ひたれば。夜は寂として人げもなし。今一方は藤棚の下に池あり。水のおもては草に埋れて。凄き事たとふべくもあらぬに。そのかなたには墓見えて。うしろはやがて山につゞきぬ。夕顔の卷の何がしの院など思ひいでられつゝ。夜のとく明けなんと思ふ事もしばくになりしが。ある夕べ人に招かれて。夜ふかく歸り來りしに。己れは寐たりと思ひしにや。戸は固くさして。呼べども敲けども誰ありてか。答へん。空は暗し雨は寒し。傘かたむけてたゞずむ折しも。本堂の屋根をかすめて。ふはりくくと見むかくれするは。人魂なりき。あはれ今宵も。かの一間に入りて眠らねば

ならず。己れかくまで臆病者とも思はざりしを。

稻妻

夜瀛車にて山かげの道をゆく。火花のちりて螢の如く見ゆる外には。心をなぐさむる木草もなし。折しもきらめく稻妻のかげに。五重の塔ひとつ見えて又消ゆ。

三日月

枝を拂へば天にむかひて。只すく／＼と眞直にのぶる木あり。子供の頃たれいふとなしに。人もわれも天つく天つくと名づけつ。これをつたひて雲の上までのぼらんと

望みたる事もありしが。金の糸よりも細き三日月の。いづも其木のあたりに見いだされしは。夢にもあらぬを。竿の先に鎌をゆひつけ。高き處の枝はらひたる忠藏といひし家僕は。すでに夢なり。

芝居

家に梅の大木三もとありしかば。其實をひさげば一年の芝居みるに足るべしと。母上は常にかたり給へりき。されど幼なかりし頃。おのれは何となく芝居を好まざりしかば。いづも留守番ひきうくるを。却りてうれしき事におもひたり。友だち集めて一家のあるじぶりつゝ。菓子

などふるまふ事をゆるされたればぞかし。ある時かめや餅といふ餅を賜はりしかば。かめや餅盆に山ほどたまはりて。おるす嬉しき今日にもあるかな。とよみてほめられんと思ひしに。おもひきや歌はさるいやしき事をよむべきならずと。いたく母上の御叱を蒙らんとは。これ十一か二の時なりしならん。母上芝居より歸りおはしては。いつも火鉢のかたへに座をしめつゝ。始より終までの事。委しく語り給ふ。己れゆく事は好まねど。聞く事よむ事は何よりも面白ければ、夜の更くるまで眠さも忘れて。承りたる事もありき。あはれ此頃こゝかしこの芝居みて歸る毎に。母上に團十郎

勸進帳をなどおもへど。其かひなきを如何にせん。

脚半

冠着山にのぼらんといへば。脚半してゆけとて。籠寺の僧は貸しくれたり。越えて姥捨の月見にゆきしに。先生風の風こそおもしろけれとて。人々わらふ。何がと問へば。其脚半がと答ふ。信州には葬式おくる僧ならでは。白の脚半せぬ習なるに。おのれ其いでたちなれば。笑ひしなりとぞ。祝のむしろならざりしこそ幸なりけれ。

燈籠

盆をどりの唄とほくちかく聞えて。月いよく白し。木
の間に古寺あり。軒につりたる切籠燈籠の火かげにつど
ひて。昔をかたるは。いつの世の佛ぞ。草むらの虫ち
ちと鳴く。

下女

あはれ父あり母ある世ならましかば。今日の上き日に。
獨り留守する身の上ともなるまじきものと。洗濯しか
けて獨りつぶやくは。まだ奉公なれぬ下女なるべし。静
なる庭の姫桃。蜂に吸はれて。摘草の人々垣のあなたを
過ぐ。

山桃

うしろの山なる山桃の實を。枝ながら折りもて來て瓶に
させば。かたへよりもぎつゝ食ふもあり。田舎の夏こそ
戀しけれといへば。いかなるものぞと。東京の人は問ふ。
いちごに似て丸く。色こく堅き實なるが。味よりも其美
しさを見せたくぞ思はるゝ。

齒

齒のぬけんとして動く時ほど。歯いたきはなく。抜けたる
あとほど。心地よきはあらじ。齒上齒は下むきて生えんや

うに。椽の下に捨つべく。下齒は上むきておひよと望みて。屋根の上にあぐべしと。祖母君は教へ給ひつ。今日か明日かと待たるゝ齒に。糸まきつけて。上に下にと引きゆるがしたる事。誰もしかするにや知らず。

海水浴

きのふは帽高く服くろく。馬車の上に髯なでゐたりし人も。けふは白地のゆかたに麥わら笠をかぶりつゝ。海人もへだてぬ相摸の海に鹽あみをなす。たのしきは都の外山の夏ぞかし。朝とく磯にいで、貝ひろふ乙女子。たれかは何がし伯の姫君なりと知らん。したがひゆく犬の外に

は。又供人もなし。

おのが葉山の庵に近く。山本海軍大臣の亭あり。亭まだ工事中なりし頃は。おのが湯に入りに行く家にいつも來りて。かれも湯あみす。あはれ國の政とりて社會にあふがるゝ人と。戯の筆もてあそびて世の隱家にひそみをる人と。一つの桶に垢をながすは。都に於てえらるゝ風流ならんや。おのれは一家を健全ならしめんがために。海水浴を好む。いなゝゝさらに質素なる世を知らしめんためにも。又これを好む。

女の子

夏の夕ぐれ。七つ八つばかりなる女子の遊びぬたるが。
 ふと走りきて。をぢさまあの百合とりてといふ。其かほ
 こそ百合よりも美しけれといへば。今母上と湯に入りた
 ればと答ふ。べには齒までも染めて。開ける口は柘榴に
 似たり。人ほは齒の華をかかるといふ。世の無常の如きも
 工事中なり。雨傘は人の心をなやませたるは外道の如きも
 門をいづれば車もあるに。しひて持ちゆけと勧めらるゝ。
 却りて苦しき時あり。かりたるものは返さるべからず。

雨傘

二町三町は。ぬれてゆかるゝ雨なるを。

ふりいづる時に借りゆく傘は。直にかへし申すべしとい
 ひたるに。晴れては忘れたる如く。もてきもせず。後に
 あひて。いにし日の傘はといへば。驚きたるやうにわび
 言す。されども猶もてくる事なし。雨の日また誰かに貸
 したるにやあらん。人情おほかた是なり。

羊羹

紅葉みくらして日光の宿りに歸れば。名物の羊羹そへて
 玉露をすゝめぬ。いでやと。めをと箸わらんとするに。
 大谷川の川音。歌はいかにと尋ねがほなり。

墓の陰

石しろく立ち並べる墓のかげに。夏草を薙としつゝ。晝
飯の箸とる人あり。門に立ち道に座して乞ひえたるもの。
今朝はいくばくぞ。懐なる子は乳いでずとて泣き。脊な
る子は飯たらずとて叫ぶ。

馴れたる昔

おのれを挽く車夫は。かつて鮎飯屋にゐたりしが。今も
時々あそびにゆきては。にぎりこゝろむるをもて。何よ
りの樂しみとすといふ。かゝる事すら。馴れたる昔は戀

蠟燭

時計なかりし頃は。歌の數よみなどするに。火を附けた
る蠟燭に鉢巻させて。その處まで立つ間に。何十首など
定むる事なりしが。人より先に一つにても多くよまんと
競ひつる折しも。風ふき消えしかば。そのさわぎに二首
そんをせしなど。つぶやきしこそをかしけれ。その人い
まは商人になりぬ。

餅

十六の年なりき。學校にて小使に手紙の代筆してやりたる禮なりとて。あん餅あまた紙につゝみて。人見ぬ時にくれたり。いかゞはせんと思ひしかど。人の志を無にして返す事もできず。さりとして捨ておくわけにもゆかねば。兩の袂にいれたるに。夏の事として軽きかたびらなれば。重くさがりて。よそめをのがるべくもあらざりし事。思ひいでゝも赤面のたねなり。人はしかなりと知りたりや知らずや。此時ばかり困りし事こそ。あとにもさきにもなかりしか。

田舎

六歳の小兒。ゐなかとは如何なるものぞと問ふ。相州葉山には連れてゆきたれば。葉山の如きところぞといふに。さらば海ある處かと又とふ。のち書をいだして。是は田舎の景よとかたれば。葉山にはお寺ありしに。何とてこゝにはなきやらんといふかる。大辭典づくりし著者も。小兒の間には落第せり。

別れしこなた

伊豫の三津が濱にて

遠つ人松田我友

行く雁の別れしこなた

はたちあまり五年へたり

今日こゝに來ぬるぞ契り

出で舟を一夜まつ間の

つれづれに逢ひて語りて

旅心忘れんものと

玉づさの使をやれば

いとはやも歸り來りて

其人は亡き世の數に

入りにしと告ぐる悲しさ

今までも猶ある物と

思ひつゝ心に問ひて

若かりし昔の君も

八束つかはげ髻まげなでゝや語る

諸共に鞠うちあひし

樂しさを數へん物と

思ひしは夢なりけりな

亡き魂も三津の濱波

かへり來て今宵はかはせ

うき世がたりを

まむし

はじめて大阪に至りし東京の人。井の蓋も取らずにマムシときゝて箸を捨てたりしが。解釋してのち。さてはと驚きた事ありき。東京のマムシは蛇の類にして。大阪のマムシは鰻めしの事ぞかし。難波の蘆は伊勢の濱荻。旅する人は。まづ方言字書を懐中せざるべからず。

香

和尚物かき居るとて未だ出でず。小僧茶を勧めて去りたる跡に。床の間の懸物をよむも。心おのづから閑なり。香爐の煙糸の如くのぼりて。梅が香いづくよりか来る。

緑の菴

苗代の水を離るゝ時は過ぎて。早苗とる頃は未だ來らず。見わたす山田はたゞ藻にて。緑の菴を敷きたらんやうなり。蛙ときぐく首をいだして。雨を呼びつゝ鳴く。

作文の先生

作文の先生人にをしへていふ。御身の文は始から本題に入りたれども。文はまづ準備してのち其目的にすゝむべし。かの饅頭を見給へ。皮ありてのち餡あるならずやと。生徒こたへていはく。始から本題に入る事。例なきには

候はず。 餡を外にし皮を中にする團子こそ。 其一例なれと。

砂糖

ある本に。 蟻を家の内に入れざる法といふ見出しの目録あり。 子供おほき我等が家には必要なりとて。 開き見るに。 砂糖をおほく家の四方にまきおくべし。 是れ糧を敵にあたへて死地に導くの法ぞとありしには。 腹をかゝへてこそ笑ひしか。

櫛の箸

久保能登といへるは。 多賀神社の神官なりしが。 櫛の枝など持ちて神樂を手に舞ひたる姿。 茶色の狩衣と共に。 今なほ面影に浮びてぞ見ゆる。 此人ものまなびすとて。 伊勢にゐたりし頃。 神路山の櫛もて作れる箸に。 みづからの歌かきておくりくれたるが嬉しきとて。 父の見せたりし事も。 三十年ばかりにもやなりぬらん。 父も死しぬ。 子も又死しぬ。 此頃人のみやげにもらひし神路山の箸。 おもへば形見の心地こそせらるれ。

黙電和尚

黙電といひたる僧は。 徳高く行すぐれたりしよし。 祖母

上など常に物がたり給へり。ある年旱つづきしかば。君命を帯びて。滑床といへる深山にのぼり。瀧のもとにて七日七夜の讀經をなし。雨を祈る事おこたらざりしに。満願の時刻に至り。蛇いで、經の端をくはへたるよと見るまに。一天墨をながして。盆をこぼすやうなる雨ふり來れりと。手習の稽古場にて友のかたるを聞きたりしは。此和尚の事なりき。眞偽はともあれ。世にうやまはれしさまは。是にて知らる。

椎の枝

書生の時は辭書を枕にし。船中にてはカバンを枕にす。

物のなき折はこれすら嬉しきに。おこり長じては。もめんはよからず。絹はつめたし。茶がら蕎麥かすよりは。毛を入れてこそなどいふめり。人の心こそうたてきものなれ。おのれ佐渡の金北山にのぼりて野宿せし夜半。椎の枝を風呂敷に包みて枕とせしこそ。いつまでも消えぬ思出草なれ。

香水

いづくよりか傳はりくる薔薇のほひ。瓶にもなければ庭にもあらず。女の童の髪かとして問へども。つけたりといふものなし。からうじて見いだされたるは。机の上な

る手紙なりけり。香水の下露。さながら巻きこめてやおこせたりけん。

水の月

夏やすみの頃。ある人うたひの會をなしけるが。宴たけなはにして主人は鬮をいだし。客におのゝ引けといふ。引きあてたるは。ゆやは何くにあるぞとて。石鹼をとるもあり。勝手の御前に仕へ申すとて。杓子をとるもありたるが。末座の一人。それがしは。かげろふ稻妻水の月かやといふ熊坂の句なりといふ。さらばこなたへとて。庭下駄を直し。皆々つれゆきたるは。井戸のそばなり。

あれぞらんせよといはれて見れば。遙なる水の上には。大きなる西瓜こそ浮べてありけれ。さてこそ姿は見れども手にとられずよと。喝采の聲しばしも止まず。

母の文

家におく女生徒あり。其兄の病せまりたる時。母より文をおこせて曰く。此事いもとに知らせなば。悲しみのあまり。立てたる志くじく事もやあらん。折をもて力おとさるやう。説き諭し給ひてよと。彼の机は我がたはらにあり。よむ時に見てはるたらずや。兄は死ぬべしなどいひたる事もあれど。聞かば涙に沈まではあらじ。今い

ふべきか。後にすべきか。心つよからぬおのれこそ。ま
づは胸とゞろきてしづまらざりしか。

念佛

十七の年に烈しき倭麻質をわづらひ。いたみて夜も晝も
寐られざりし事あり。りうといへる老婆は。看護のわざ
に熟しむれば。やとひて兩親は我につけ給ひしが。い
たみつよくなる毎に。南無阿彌陀佛とよなへては。手を
さすり足をさすりくれたりき。其やはらかなりし情の力
はうれしけれども。念佛の聲は今なほ耳にのこりて腹だ
ゝしと。なほりて後母上に申せば。汝の佛法をきらふも

程こそあれと。叱り給ひき。打たれても親の杖。なつか
しきは昔ぞかし。

十ぶり

塗りたる蓋物の中に大豆を入れて。一人が出せば。一人
は振り試みて次へ廻す。其人五粒入りたりと思へば。五
つとかきたる札を。人みぬやうに箱の中に入れ。次の人
また思ひくゝに音をきゝて。考へ得たる數だけの文字を。
かきては入れつゝ。をはりに蓋物をあけて。其かすの合
ひたる人が賞を得るなり。之を十ツぶりと稱へて。わが
十ばかりの頃はやりたる遊なりしが。此頃とへば故郷人

にてたれも知りたるはなし。おのれも古物の一つとなりたるかな。

障子張

書生の頃。松山なる友の家に二三日遊びたりしが。その家に祝事ありて客來るといへば。おのれ何にても手傳ふべしといひしに。さらば座敷の障子を張りてくれよとて。糊と刷毛とを紙と共に渡されたり。今更できぬともいはれねば。糊つけては張りはじめたるに。小刀あつれば隣まではがれ。皺を直せば端より破れなどして。物になるべくもあらず。されども苦しみは修業の母にて。やうや

う出來たるを園にはめたる心地。試験の落第點を讀みきかざるゝ時も。之には過ぎじ。翌日客そろひ膳いで。おのれも其中の一人に加はりたるが。紙ひづみ皺だらけなる障子をながめ渡しては。吸物の箸とる勇氣もなく。只しほくとしてひかへるたり。

狐の聲

子供を能につれゆきたるに。釣狐といふ狂言を見て。なせあの狐はカンくくと鳴くぞと問ふ。人の話にて。コンくくとなくものと思ひたればぞかじ。もし狂言師の子ならましかば。なせお話の狐はコンくくとなくぞとや問ふ

らん。先入主となるは子供にかぎらじ。

拜殿

いてふの落葉ちりかさなりて。里宮の拜殿。秋風ひとり
鈴を吹く。祭もすぎたり。奉納の姓名おほく張りつけて
あるは。ことしも豊けき年のしるしか。

晚鐘

憂なき身にも悲しきものは。夕ぐれの鐘なり。只ものし
づかに霞みわたる花の奥より。鳥みつよつ寐につく山の
麓より。今日も名残と響きいでたる。近くて聞く讀經木

魚も物のかずかは。

蓮

人の庭に池あり。水のかぎり蓮にて埋めたれば。うす紅
に花さく頃のすゞしげなるが。うらやましくて。おのが
家にも。かゝる庭つくらばやとこそ思ひしか。それより
十四五年をへだてたるに。庭まだ蓮を植うべき池だにあ
らず。思ひし事はなかば皆是よ。

籠

父君豊後に入湯して歸り給ひし時。舟まで御むかへにゆ

きたれば。小さき籠の赤くいちまつに色どられたるを。
 みやげぞとて渡し給へり。庭の李ひろふとては之を持ち
 いで。はせ釣りにゆくとは之を持ちいで。一とせ二と
 せもそこなはずに用ひたりしが。籠ちひさけれども。入
 りたる御いつくしみの大きさをいかなりけん。

龜

水のおもてに脊を半ばあらはしたるは。岩かと思れば龜
 なり。百日紅の花ときぐこぼれて。甲の上を赤くまだ
 らに色どる。

空蟬の世

一

空蟬の世は夢なれや

天つ雁つらも亂さで

送り行くうから友垣

捧げ行く旗手眞榊

きのふこそ笑み語りしか

をとつひこそ出で遊びしか

夢なれや幻なれや

うつせみの世は

空蟬の世は夢なれや

二

見るがうちに空しきからは

穴ふかくかきおろされて

おく土の下にうもれぬ

露霜の寒けき野邊に

立ちかはるしるしあたらし

稻妻の影か水泡みなわか

人の命は

雷

夕立來らんとして雷まづ響く。祖母上いたく嫌ひ給へば。下婢は心得て蚊屋をつり。線香を立てつ。母君の仰によりて。おのれは太鼓をたゝきて其音をまぎらせたる事も。夏毎の習なりき。今は家に一人も蚊屋つれなどいふものなし。されば子供に臍とらるゝぞなどいひても。誠とせずして笑ふのみ。

梅の種

大橋乙羽君の歐米小觀をよみたるに。桃のたね一つを惜みて森の中に投げすて。幾年の後このあたりに桃の實の熟する事あらば。土人の利益大ならんといひつる。亞米

利加人の話をのせたり。これにつきて思ひいでしは。八つ九つの頃なりき。家こぞりて船遊をなし。沖に漕ぎいでたるに。辨當の中に梅干のありしかば。種を捨てんとせしを。母君とゞめて。梅は天神さまの御愛木。天神さまは人の利益になる事を好み給へば。梅のたねを徒に海に沈めて。又おひいでん春なからしむるが如きは。よろしからず。皆もちかへりて陸にうゑよと。仰せられき。きゝぐるしき我ぼめには似たれど。同じ心の人もあるものかなと。ひとり感せられてなん。

園遊會

ビール店あり。團子店あり。すしやもあれば。天麩羅屋もあり。花白く水緑なる池をとりかこみて。客よぶ乙女ども。さるいやしき人めかぬは。何がしの令嬢など。赤だすきして交じり給へばならん。髯ある方々。人おしわけてすしをつまむも。天下晴れての立食なれば。かへりて興あり。近ごろ流行る園遊會よ。一幅の茶番めきたるこそ紳士の花なれ。

足袋

わが友にあわてものといはれし人あり。ある日つれだちて町をあるきしに。本屋みつけて入らんとせしが。うる

たえて取りちがへ。隣の店につかくとゆき。平田先生
の古道大意ありやと。問ひはしたるものゝ。見るに足袋
屋なれば。あやまてりと思ひしに。手代へいと答へて奥
に入りぬ。さても合點ゆかずと持ちいでたるを見れば。
おもひきや紺足袋ならんとは。作りしやうの話なりと笑
ひたりしが。其友今は世にあらず。

夏の夕

牛込見附を過ぎんとするに。夕日はうしろより照らして。
あつさ猶ほ傾かず。妹の手を引きつゝ来る乙女。撫子よ
りも赤き顔のおもてに。かゝれる汗は玉か露か。

飯田町に棟上の祝ひあり。五色の幣など靡かしおたるに。
餅ひろはんとにや。貧しき人どもあつまりをれるあはれ
さ。夕日やうく沈みて。空のいろは飾りたてたる扇の
紙にのこれり。
丸の内なる柳のかげには。海老茶の袴はきたる女生徒二
人。本づゝみを膝にあげ。中腰になりつゝ休息す。その
かたはらには。堀にむかひて。何やらん寫生しをる中學
生あり。白き帽子と赤きリボンと。水にうつりて油繪を
なす。
喇叭の遠音すゞしく聞えて。十日頃の月一つ高し。

汗

日傘を草の上に横たへて。百合の花折らんとする乙女あり。蜻蛉などや追ひつゝ來りけん。赤く熟したる顔のおもてには。汗こまやかに玉をなしたり。百合が乙女か。乙女が百合か。露は汗より清く。汗は露よりも美し。

ハンカチーフ

麻のきれを八寸四方位に切りて。松に羽衣のかゝれる能の道具をわざ／＼畫がゝせたるを。母君は夏ものへ出で行く時。常に持ち給へり。今のハンカチーフなかりし時

代の汗とる物なりしならん。此頃人におくる事ありて。是やあれやと撰びて見たるに。羽衣こそなけれ。母君にさしあげたらばと思ふ品々ぞ多かるや。さはいへ彼麻のきれはいかになりぬらん。なくなり給ひし時手箱の内よりも出でず。

酒

野口庄兵衛といへるは。寶生流の能役者なりしが。ある時樂屋にて。おのがまはしつる盃を受けつゝ曰く。私は毎晩このくらゐの盃にて。よきほどにのむ習なるが。孫に酌をさするほど。たのしき事侍らずと。酒もかゝる樂

しみに伴なひては。天の甘露もいかでかこれには及ぶべき。庄兵衛その時七十にこえて。猶すこやかなりき。三好竹陰といひしは。わが文字の師なりしが。酒をのまではかく事なく。のめばのむほど其筆力凡ならざりき。腥々曉齋の書また酒壺を右におかでは神なしといへりしを見れば。かの李白一斗といひけんも。支那人の法螺にのみもあらじ。

伴信友は焼鹽と小刀を机のかたはらにおきて。客來れば之をもて酒をすゝめ。學を談じてうむ事なく。藤田東湖は杜氏全集とかきたる本箱の中に瓢を入れて。獨酌するにも客にいだすにも。家人を少しも勞せざりきと。酒の

文學と縁ある。これのみにあらず。大伴旅人の歌は極端なれども。一九が。禮には及ばず。酒をのませといひたる雅味は。掬すべきおもむきこそあれ。母君ある時。馬琴の朝夷巡島記を見給ひて。朝夷が英雄も酒なくてはといひける言を壯なりとし。汝も大きくならば。下戸になれとはすゝめずと。のたまひし事。忘れもやられず。旅のやどりの雨の夕べ。舊き友に訪はれたるともし火のもと。豈酒なからめや。豈酒なからめや。酒なくて何のおのれがさくら哉。さはいへ。花さけど酒なきは我ふだん哉。わがしらぬ味は。下戸の方にもあるべし。

玉子

お玉といへる女生徒。青森より來りてある學校の寄宿舎に入りぬ。いつも音聲の清濁さだかならずとて。笑はれしが。中々強情ものにて。改めんといふ事なく。土手はつゝみぞと人をしふれども。いやつゝみなりとて。かれ従はざりけり。一日誰かゝその名をよびて。たまごさんくといひしに。私の名はたま子に侍り。鳥の子とは同じからずと怒りしかば。さては君にも清濁の事わかるやうになりたるかと。皆々わらひしといふ。わがつかれる武器にて。我身を打つたぐひよ。

雀

手も入れぬ菊のさきこぼれたる垣の内には。こきちらしたる稻ありて。秋ゆたかなり。人は晝飯せんとてや家に入りけん。雀三つ四つ啄ばみあるけど。追んともせず。この鳥なりしよ。我ゆく瀛車の。國府津より松田にかゝらんとする時。かなたの小田より幾百となくむらがり立ちて。二子山のあたりを埋むと見えしは。歌によみ晝にかゝれて愛らしき鳥も。耳に鳴子のおとある世こそあはれなれ。

朝 顔

山寺に簞とめて立てる僧あり。垣の朝顔花あたらしく
て。日いまだこゝまでは來らず。朝まうでする里人はな
くや。澁茶すゝめて花の大きさもほこらんものを。霧全
く晴れて。草刈童すでにかなたの山路をゆく。

喇 叭

軍をすゝむる貝鐘陣太鼓に代ふるに。喇叭を以てするや
うになりたるは。わが十一二の頃にやありけん。其はじ
めは耳になれざる音調とて。習ふ人も聞く人も覺えにく

夕 立

かりしかば。教師は曰ふ。百人一首の歌とおぼえて。花
さそふくと吹くべしと。げにも是までは意味なかりし
ププププも。花さそふといふ歌詞つけられては。いつ
しかおもしろくなりて。忘れぬやうになりしといふ。今
は皇御國などいふ曲あるを聞けど。明治の初年頃に此事
ありしは。是やさきがけならんかし。其教師なりし人は。
河内源太とやいひつらん。

夕立きたれり。池の蓮葉ひまなく打たれて。莖をれ葉も
破れんとす。夕立晴れたり。たまれる水はこゝろよくた

へて。風ふくことに。左にかたむき右にかたむきを。
ふと飛び來りて踏みこぼす蛙。葉よりも實よりも青し。

隣

しばし住みたる家の隣に。老人夫婦あり。ぢいは遊舟に
やとはれて。晝は海に暮らし。婆々は畑を作り衣をあら
ひなどして。家をまもる。是まゐらせんとてさしいだせ
るを見れば。女郎花なり。露おきたるまゝが面白ければ。
いたく禮いひたるに。くる日もく。桔梗や月見草やと。
花をかへてはおくりこしぬ。夕べになれば。磯に蒔もち
いでゝは。月見し給へ。すゞみ給へとて招く。酒肴など

猿が秀

のもらひたるがある時は。いつもあたふるに。こゝろよ
く飲み食ひして。よろこぶ事ふたつなし。隣もつにはか
ゝる人の家をこそと。常にぞ思ひいでらるゝ。
猿が秀の池といふあり。堤には。ぐみ犬葡萄など熟して。
秋おもしろければ。初茸狩のゆきゝには。いつも遊びた
りしが。今はたが影をかうつすらん。雨さむくこぼれて。
川せみ一つ飛びをるやいかに。

蓑

いつしか山はかきくれて。雨となりぬ。小田の早苗はぬれつゝ靡けり。汀の眞菰は白き露もてかざられたり。風さへまじりて。蓑きたる賤の男。晝にかきたるやうに畔道をゆく。

琴

和琴の賣物ありたれば。求め來りて壁に立ておきたるに。妻の弾くとしておきたる箏と共に。二つになりぬ。此頃は娘のさへまじりて三つになれるを。人の見て。先生は琴

船 帆

をしきりに弾き給ふとして。かたり散らせりと聞くこそをかしけれ。世の中の噂は此たぐひぞかし。

海人が苦屋の二もと柳。なかば黄ばみて夕日なゝめに波を染めたり。夕めし炊きて妻子のまちたる夫の舟は。船帆あはれに沖よりかへる。

豊 後 橋

うばに負はれて夕ぐれごとに遊びたるは。豊後橋なり。かたへの石垣には晝顔の花もありき。土手には蚊屋釣草

の穂にいでたるもありき。四十年のちわたりてみれば、石橋は土橋となりて。夏なれども花もなく。この草もみえず。石につきたる辨慶の足跡のみ。昔をかたる友とはなれり。

玉蜀黍

東京にていふたうもろこしを。わがふるさとにては唐きびといへり。一とせ仙臺にあそびしに。唐きみと稱ふるを聞きてさへ。ふるさと戀しき心地せしが。今年はむかし住みたる家をとひしに。庭は唐きびの畑とぞなりぬる。あはれ此ものを焼きて給ひし母上とも。昔かたらば

うれしかるべきに。

行水

ものよりかへれば。下婢は湯をくみ入れて。行水をすゝめ。妻はあたまより水をそゝぎて。髪を洗はず。月すでに梢にあり。女にて此たのしみあるべしやは。

神鳴門

わがふるさとに神なり門といふあり。神なり長屋といふあり。何れも雷の落ちたるによりて。呼ばれたりき。東京にきて神なりおこしといふ菓子をもらひし時は。神な

り長屋にて賣る故にやと思ひしに。是は淺草の神なり門の名物なりと。人教ふ。其神なり門はと問へば。もと雷神を山門にまつりたるよりの名なりとぞ。物の名も處によりてにはあらで。名の意味こそは處によりてかはりたりけれ。

虫干

虫干するとして廣げゆく書物の中より。挿みおきたる花などの出で來れるもなつかし。搜して得ざりし寫本など見つけたるは。いふべくもあらず。亡しと聞きつる友にあひたるも。かくやとさへこそ思はるれ。

今日も風いとすゞし。座敷は更なり、玄關までも埋めて並べん樂しさよ。

物のよしあし

おのれは東京のよりも故郷の鰻を好むと。常にいひしが。其地に至りし折。友人はみづから釣りみづから焼きたりとて。二里ばかりもある處より。持てきておくれり。風味はさておき。其なさけこそ東京にては釣りがたけれ。物のよしあし。如何でか其物のみにて評し定むるを得べき。

鳥

城山さして寐にゆく鳥。さながら白き紙に。黒き點を透間もなく打ちたるやうなり。暮れはてゝはそれも静まり。月やうくさしのぼりぬ。初更にもやあるらん。一つ鳴きいでたるは。子を尋ぬるか母をこふるか。あはれかざりなし。庭の柿の實うかふとて追ひつるは。是なりしが。今もさる恐ろしさをや夢みる。

梨子

故郷の梨子は。かくまでにうまからぬ物ともおもはざり

しを。此夏たま／＼味はひて見るに。東京のものと比較すれば。とても口に入るべきにあらず。東京の梨子はさほど貴しとも知らでありしに。故郷よりかへりて見れば。さながら砂糖水をのむ心地して。甘露も是には如何でおもはれたり。

何物にても。それ一つを見て評するはあやまれり。

寐覺

おのれはいつも夜おそく枕につけば。家にては寐覺してくるしむ事いまだあらず。旅にては。ともすれば宵より寐る事ありて。十一時十二時などより目さむるには。こ

まる事いとおほし。物かゝんとすれば。行燈の火くらくして油の少なきも心ぼそく。わづかに風の音波の聲などを友としつゝ。歌おもふ時の心地は。家にある身のしらぬ苦しみなるべし。さはいへ心しづまり魂さだまりて。うれしき考のいでくるは。かゝる折にこそあれ。

水遊

若葉のかげいと涼しげに流れゆく水。きよき事銀の糸の如し。弟學校よりかへりて。紙の汽船など浮ぶれば。姉は黍がらにて作れる水車もちきて。小石もてせきたる處に掛く。

噴水器

池の真中より噴きいづる水。公園の松より高し。風に散りては。汀にたゝずむ人の袖をうるほし。雨となりては。築山の上なる蘇鐵にそゝぐ。

船頭

九島に仁三郎といひし漁夫あり。我家に出で入りせしかば。父君の釣にものし給ふ時などは。其船頭をいつも命せられけり。此男酒のめば心ふとくなりて。いさかひなどする癖あれば。妻いまして禁酒せしめ。我家にも堅

く飲ませて下さるなど。いひぬたりしが。或日も釣にいで、歸り給ひしに。雨ふりいで、寒さたへがたければ。今日だけはゆるすべし。まづ一盃のみてこよとて。一人さきへ歸し給ひしに。それとは知らで。母上なほいつもの癖いでしならんとて。あたへ給はざりき。父君のちに聞き給ひて。さては失望したりしならんと。宣ひしが。のみたるが利か。のまざりしが利か。家まもる妻こそ知りてはあらぬ。

雲間の星

花火あがれり。拍手の聲空に満ちぬ。柳の如き光は。流

星を三つ四つのこして消えうせたり。それも暫くにして。おちたる跡に一つかゝやくは。雲間の星のみ。星ものさびし。次の花火は再び響かず。

日蝕

午後二時三時の頃日蝕のありけるが。折しも八月半の事なるに。小春の空もおぼゆるばかりの涼しさとなりて。木の間などさながら月夜に似たり。蛾の鳴きいでたるこそ。今も忘れぬ。

袴

おのれまだ何も知らざりし頃。十里ばかり隔てたる里より來りて。能を興行したる事ありしが。安宅の山伏が装束の足らざりしにや。只のまちだか袴をはきて舞臺にならびしは。何となく能らしからぬ心地して。見んと思ふ心も失せたりき。美術にはかゝる缺點のあるをゆるさずとは。人のよくいふ事なれども。

半日の留守

家に歸れば妻も子供も出で迎ふ。數の多きはと思ひしは。

女郎花

病にて國に行きたる書生の。心地よくなりて歸りしなり。書齋に女郎花のなつかしきが挿してあるは。友の持てきておくれるとぞ。半日の留守。うれしき事も集まりたるかな。

歌の圓居する家にいたりしに。折しも秋の半なりしが。壁には仲國の笛ふきぬたる畫をかけ。薄墨にかきけしたる松の梢を。月のさえ行くも面白きに。其前にはいと盛なる女郎花を。ふさくと馬盃といふ花瓶にさしたりしこそ。いひ知らず身にしみて覺えしか。

八足机

古畫に。兼好法師の八足机に書おきてよみぬる處をかき
 たるが。心も清げに覺えしかば。近きわたりの道具屋よ
 り。塵ばみたるを求めきたり。けづらせなどして。歌書
 や何やと積みおきたりしは。昨日なりしに。いつしか板
 よでれ足かたむきて。今は女のわらはどもの。縫ひさし
 たる衣のするものとぞ。おちぶれたる。始に此さまを見
 たりしならば。兼好めきたりとて。羨みもすまじきもの
 を。

提灯

維新の頃。夜中無提灯にて道行く事を禁せられし時あり。
 一人の目くら提灯を手に持ちながら。又他の目くらにつ
 きあたりぬ。此ひろき道の真中にて。提灯つけたるは見
 えずやと。互にいひあひしが。やうく同じ目のなき人
 なりしを知り。打ち笑ひて別れんとする折しも。見てお
 たりし子供。あれみよ。何れも提灯はとく消えたるをと。
 はやしたてしとぞ。

神代の光

蟬の聲やうくたえて。くれわたる山かげ。又涼しさめ
 づる人もなし。神垣ふかく見入れたれば。木立ほのぐら
 くものすでき中に。御かゝみ一つ。神代の光してぞかゝ
 やかせ給ふ。

芭蕉

芭蕉の上をぬひありく蝸牛。ろれもつれぐなぐさむる
 一つなり。軒までのびて日かげかくすはうるさけれども。
 風に吹かれて露うち散らす心地よさ。秋よりもむしろ夏

こそ。此ものはよけれ。

二百十日

ある人畫師を家におきて。あけくれとかゝせたるに。一
 枚は松に虎をかき。一枚は檜に馬をかきたり。あるじな
 じりて。虎には竹をかくこそ常なるに。松とはことやう
 ならずや。檜と馬ともわがまだ知らぬは。たが筆意ぞと
 いひしに。君まだ曆を御らんせずや。木の畫とらと申す
 事も。ひのえうまと申す事も候ふをといふ。よしくと
 て其日はやみにしが。十日たちてのち今はもはやかゝす
 べきものなしとて。二百文あたへたり。畫師いたく怒り

て。一枚にてすら一兩のあたひはあるものをといへば。いやさないひそ。曆を知らぬか。二百十日と出でたるをといふ。いよく怒りて。障子をこぼち壁を破り。あばれのしりて出でゆきけるが。振りかへり見ていひけらく。是ぞ二百十日の荒なるよと。

白木の机

あたらしき佛のある家を訪へば。誰もく皆うちしめりつゝ。語るごとに袖もて顔をおほはぬはなし。白木の机にくだものなど供へたる前には。香の煙系のやうにぞ立ちのぼる。此時の心。親ある人は知らじ。子ある人は知

らじ。

樽御輿

酒樽を御輿として。いたゞきに團扇を翼としたる鳳凰をのせ。男の童等。威勢よく掛聲しつゝかつぎあるくは。江戸子の氣象保存ともいふべきか。わつしよいの聲門前をすぐれば。肩なる小兒も。両手をひろげて喜びいさむ。

水引

歌によまれぬ花ながら。秋の野のおもむきをそふるは。水引なり。向島の花やしきより移したるが。此頃庭にさ

きいでしかば。折りて薄にさしそへたれば。月まつ友の
一つとなりぬ。されど此花。いづくにありても。物を助
くる手ぎはこそあれ。主人となるべき位を持たず。

松虫

都築花守といひし翁。

より松に松虫きゝにまゐらまし

歌もよむべく酒ものむべく

といひおこせたるは。秋の花やうく盛すぎんとする頃
なりき。より松といへるは。翁が心やすくする家のある
田舎なれば。やがて打ちつれものしたるに。道より雨ふ

りいでゝ。半ば色づく稲のぬれつゝなびくなど。あはれ
浅からず。

その家にては。いとめづらしとて。もてなさるゝほどに。
ひとり雨にもしをれぬ聲の聞えきたるは。何よりの着な
るに。うしろは山。前は田なれば。静にくれゆく夕べの
けしき。歌もよむべく望満たさんには。この上の處や
はある。

あはれ今年も秋すでにふけぬ。翁の墓には萩をりたむく
る人。ありやなしや。

石地藏

山とえの道の涼しき處に。石地藏あり。草かりてかへる里の子は。こゝに休みつゝ。岩の上に這ひをる蟹を捕へては。佛の顔にあるかせ。鼻にのせなどしてたはむる。

歸る父

門にいで。物まちがほに立ちをる子あり。夕日は沈みて。撫子色の雲は。其あいらしき顔を染めつ。うねりうねりては松林の中にきえゆく道より。いでくる人かげ。父にやあらん。かたへの草花ひとつふたつ摘みたり。子は馳せゆきぬ。父は花を渡しぬ。入相の鐘。音楽よりもたのし。

夕顔鎗

わが叔父上にあたれる堀江氏に。先祖傳來の鎗ありて。つねに長押にかゝりたりしが。鞆には夕顔のからをしたれば。名づけて夕顔鎗といへり。

ある時藩侯の御前にさぶらひ給ひしに。汝が家に傳はる夕顔鎗のいはれこそ。聞かまほしけれと。問はせ給ふ。さん候。先祖にて候ひしもの。之を好みて用ひ始め候ひしが。一とせ箱根の關所にて狼籍者にあひ。取るより早く。鞆をもはづさで突きつけしには。皆人平生の心掛を感せぬ者も候はざりしとぞ。夕顔鎗はそれより世に知ら

れたるよし。承りて候ひぬと。答へ申されしかば。いたく御けしきうるはしく。さぞあらんく。汝も一つ先祖が手柄をまなびて見せずやと宣ふに。君命いかでかのがべき。さらば御めん候へとて。御庭に飛びおり。手頃の竹を持ち來りて。ひきしこきつゝ。やつと一聲。松の木めがけて突きつけたまひぬ。叔父上の御おぼえめでたかりしは。此頃よりの事なりしか。おのれはおぼろならでは叔父上を覺えず。されども火事ときゝては。先づ飯をくふべしといふ教などは。今も母上よりきゝおぼえて。忘るゝ事なし。時うつり事去りて。夕顔鎗も人と共に形をとゞめず。い

芋汁

にし春も故郷にかへりて。其御石碑を尋ねたるに。草ふからして。遂に見いだす能はざりき。

これをとて。女の童の盆にのせて。おもやより持て來てくれしは。芋汁なり。さては今宵は八月の十五夜。書生の身にも月見すべしとて。もとめ來れる團子を辭書の上におき。かの芋汁の碗と共に窓に供へて。夕ぐれの光を持ちたる事もありしが。きのふけふ我膳にのぼれる里芋。いかにしても其頃ほどの味をもたず。

猿田彦

赤城神社の秋祭に詣でたるに。神樂ありて人の山を築きたり。おのれも子供と共に。日かげの涼しき處に立ちて。物賣る店にさし廣げたる傘のひまよりぞ。ながめける。子供。あの天狗と馬鹿と戦ひ居るは。何ならんと問ふ。げにも鼻高き面に。白妙の毛をかづきたる人。銚やうの物を持ちて。賤しき男を打ちすゑたり。暫くありて女體の神あらはれ給ふ。かの賤しき男。おそろしき人ゐて。我力には叶はぬよしをいふなるべし。手まねして鼻の高さを語るやうなり。さては天孫降臨の猿田彦ならんとて。

其よしを語れば。さらばあの馬鹿は何ものぞと問ふ。家來なるべし。家來とはいかに。隣の別當のやうなる物ぞ。さらば馬なきはいかになど。問ひつむる子供。問はるゝ父。これも嘶の種なるべし。男神女神はつひに評議とゝのひて。降臨の事ならんとする歡をのべんとにや。扇をひらき鈴を振りて。相舞にまふ。天つ風すゞしく吹きて。天の八重雲はれわたれる心地ぞせらるゝ。きく人心までに神代なり。岩戸の笛のね。又この外にあらめや。

犬葡萄

野菊すゝきなど亂れ生ひたる草の中より。ぐみの實の赤く見いだされたるもうれしきに。數珠の粒の大ききして。るり色さては紫に色づきたる犬葡萄の。こゝかして鈴なりに蔓より垂れたる。何となく秋のあはれの集まれる心地す。あはれ今少しよき名の。つきたらましかば。

鯉

柳の葉の散りうきたる水のおもに。時々いで、鱗ふるは鯉なり。かなたかと思へば。早くもこなたに來りて。藻

にかくれ蘆間をぞゆく。時々をどりては全身をみするもの。一尺二尺の間なるべし。

赤ゲツト

田舎者の旅をするには。夏は御座を負ひ。冬はケツトを纏ふをもて赤ゲツト先生の名あり。されど我十七八の頃は。學校に通ふ中年の生徒ども。われおとらじと青赤のケツトに包まれつゝ。道行く事なりしこそをかしけれ。明治十二年東京に來りし道にても。今切の渡舟にて相乗せし十七八の令嬢。今の權兵衛八兵衛の如く。赤に黒の筋あるものを。首よりおほひてこそすわりぬたれ。

岩のもと

蕨とりつゝ大きな岩のもとに來れり。のぼらんとすれ
 ど足ふみかくべくもあらず。躑躅は火の如く其あたりに
 咲き亂れ。上より垂れたるかづらの端には。藤のつぼみ
 も見ゆ。あはれ此岩。仙人の行場か。猿の子の體操する
 庭か。

秋の歌

十首

中々につくらぬ庭のおもむきも

見えてなつかし秋草のはな

庭のおももの有明月夜ありしよを

しのぶか虫の打ちみだれ鳴く

かきわけて見れば尾花の露おちて

月こそ濁れ山の井の水

月みつゝあくがれいでし長濱の

かへるさ遠し汝も満ちきて

初茸をあさりくゝて山守の

庵の庭まで知らず來にけり

引板のおと遠く聞えて更けそむる

やまだの月に秋風ぞふく

蓮葉のかれたる池にたゞ一つ

魚の影みる秋のさびしさ

落栗をひろふ末野のしもと原

さきだつ色やぬるでなるらん

かの山の紅葉うつくしいかにせん

踏めばゆらめく谷の板橋

柳葉のかれ葉たよふ水の上に

ふる雨さびし秋のくれがた

畑の煙

霜は雪よりも白く。氷は板よりも厚し。農家三つ四つ隣あはせて。白つき水くむいとなみ。寒き朝とて怠るべく

も見えず。子供は早くも枯葉あつめて。裏の畑にたきたつる煙。これのみ暖たかげに立ちのぼれり。

半鐘

おのれ始めて東京に來りし夜に火あり。遠しとは聞けど田舎にて火事としいへば。一さとこぞりてさわぐ事の心ならひにて。寐てもゐられず。あわたししげに窓をあけたりとて。笑はれぬ。されど東京なれたる此頃は。三つ半鐘にも枕もたげぬ事さへあるこそをかしけれ。あたらしく來れる書生をおきたるに。鐘さへなれば。どこぞくと。心配しつゝ問ひあるくは。さながらおのが

昔を其まゝなり。是も今には火事みてこよと起せども。寐言まじりに空返事するやうにならんとおもへば。いとをかしくて。

ぬれ佛の顔

木魚のおと木のまに絶えぬ。ぬれ佛の顔の何とやらん見し心地するは。早くも蕨採に来て茶を乞ひたる寺なりけり。つくれる菊のさかりなるにうかれて。門を入れれば。松の梢より垂れたる蔦。春の花よりもとは。げにもまたと。

柿の皮

秋もふけゆく頃。乙女の教子あつめて園遊會めきたる事せしに。十五になる一人が。先生と競争して。必ず負かしまゐらすべき事こそあれといふ。よし何にても試みんといへば。さらば柿の皮のむきくらべをなしてん。ちぎれたらばまけとすべしと定めて。はじめつるに。數分も立たずして。見事に敗れぬ。力も術に勝つべしやは。

枝のいが栗

わが庭には空おほふばかりの栗の木ありしが。いにし年の大風に幹ながら吹き折られて。今は影もなし。折られ

たるは。秋の半にも足らぬ頃なりしかば。枝のいが栗叩きあつめたるが。五六升もありしを。ゆでゝ見たれど。味あはくして。幼子だに甘しとはいはざりき。學の道なかばにして廢したるも。世に用ひられては。この枝栗かあらぬか。

鳥打帽

汽車とまれり。鳥打帽に獵銃かたげたる人ふたり。ステーションを出でゝ。田の中の細道をゆく。山高く秋きよし。犬は早くも尾花のかげになりぬ。

紙

紙よ紙よ。汝は幣に切られて。神の御たましりと仰がれ。花紅葉の菓子に敷かれては。やんごとなき公達の御手にふるゝ事。うらやましさの限ぞかし。學校にかよふ乙女。商家につとむる童。汝なくては。いかでか永久の記憶をつながん。たゞ願はぬは。俳優のふところに入りて。涙おほふ役に使はるゝ事のみ。

松茸

この山に松茸おほし。二三時間にて此籠一つみたしぬと語りしは。竈に柴をりくぶる翁なりき。日は山ちかし。

子供つれずは。分けても見まほしかりしを。

柚の木陰

秋の花おほかた枯れて。りんどう獨り紫なり。野路つき
て寺あり。柚の實うつくしく熟せる木陰より。木魚の聲
とほくまで聞ゆ。

賽錢

栗ひろひたる秋もすぎで。手鞠つく春まだ遠ければ。里
の子守も今日は來らず。山かげの小やしる。二つ三つ捧
げすてたる賽錢の上に。散りくるいてふ。山吹よりも黄

なり。

蜜柑

蜜柑の口なし色に色づきたる梢を。遠くながめやりたる。
花にも紅葉にもまさりたる心地こそすれ。

やゝ近づくに。枝のたわみ動くやうなるを。鳥など木づ
たふにやと見れば。子供の二三人ゐて。竿の先を割りつ
ゝ。枝ながら取りをるさへ。晝にかゝまほし。小さき枝
ひとつ。竿をはづれておち來れば。中の一人が頭をおさ
へて。あゝいたと叫ぶ。

山里の紅葉みに行き去り歸らんとせしに。宿りたる家のむ

すめ。鈴なりになりたるを。五つ六つ折りきて。山茶花の花と共にくれたり。瀛車にのりても。羨まるゝこと多し。

春にもまさる十一月の日よりに。いづこともなきそよるありきのかへるさ。田舎の店なるをもとめては。兩の袂に入れ。皮をむきつゝ田の道など行く。楽しさのきはみなり。

故郷にてりうりんといへるは。紀州みかんに似て猶あまし。今年の夏かへりたる時。その話いでたるに。りうりんとは何の意味ならんと一人がいへば。龍の鱗と書くなりと一人いひしに。李夫人としるしたるを見し事ありと。

又一人はいへり。文字はいかにもあれ。李夫人のこぶしよりも。龍の鱗の光よりも美しきこのもの。東京なる庭に植ゑて見ばやといへば。盛の頃には實のまゝに贈るべしといひしも。四箇月前になりぬ。この頃やうく市にいでたるを見るにも。心は三百里のあなたにあり。

男の髪

女の童どもに物語するついでに。おのれも十六になる年までは。頭に鬚をいたゞきゐたるよといへば。姉は相撲とりのやうなりといひ。妹は田舎のおぢいさんに似たりとて笑ふ。さな笑ひそ。父のみには限らず。たれも皆さ

やうなりしぞといへば。いよくめづらしがりて。其時のありさまを話せとせまる。おのれ十二三の頃までは。撥鬚ぼしげと稱へて。イチを三味線の撥のやうに廣げていだしたる髪にゆひ。前髪のはゝをば二寸ばかりも取りて。元結にてむすびたる所より二つに分け。鬚の左右よりうしろにやりて。更に元結にて一つにむすびおく事なりしが。世はやうく明治維新の頃となり。風俗おひくあらたまらんとしつゝ。前髪ゆふ事も。元服して前髪そりおとす事もなくなり來り。惣髪とて。前髪も何も別ちなく。紫の打紐などにて一つにむすび。やゝ短きイチをいだせる物とはなりにけり。以上

これを鬚の時代ともいふべきか。此時代には。我等男子とはいへど。今の令嬢方の島田ゆひたる時の如き。心配もありしぞかし。笑ふなよ。あすは祭よ節句よといふ時は。前の日に母上などのゆひてたまはりし髪を。夜寐亂さじと。まづ紙もてこれを包み。こよりにて縛りなどして。朝おくれれば。又丁寧につゝみ紙をとりて。枕の引出しに仕舞おくなど。かたれば随分をかき事ありしを。鬼事や軍あそびなどしつゝ。猩々のやうに亂したりとて。叱られたるも度々なりき。世はすでに維新を経て。戦争の風にかかれし人々など。鬚を廢して其も一つむすびたるをうしろに垂らし。か

の宮本武藏などいふ姿を學ぶ事もやりたれど。おのれは遂にさる事を好まずして。依然たる舊幕時代の若旦那風なりしかば。改進黨の友は。いつか大和田の髪を切りてやらんと。ひそかに話しあへりし事ども。神ならぬ身のいかでか知らん。師の家に歌の會にゆきたる歸るさ。夜ふけて追手といふに來りしが。こゝは練兵場にもなるほどの廣さにて。松高く人とほく。暮るれば女子どもは通らぬ程の。さびしき處なるに。待伏せたりし友四五人。松の蔭より群がりいで。今夜こそとて。組みつかんとするあり。剪を持ちて手を髪にかけんとするありて。しばしは戦ひしが。おのれは短冊はさみの板を振りまはしつ

ゝ。あたりかまはず打ち拂ひしかば。つひに本望を遂げずして。敵はいづくへか散り失せたり。かへり見るに。髪は四筋五筋きられしのみにて。まづ鬚に別條のなかりしこそ。めでたかりしか。此敵の中に剪持ちたるは死し。組みつきたるは。さるべき社の神官となりぬ。いにし年故郷にかへりける時。かの夜の事どもかたりあひては。大笑をなしたりき。獨りおのが髪のみならで。學校にても途中にても。切らるゝ事その頃のはやりなりしが。たれにかありけん。つひに大勢に手ごめにせられて。見事の黒髪ふつりと根もとより切られしかば。大砲に似たる大たぶさの地上に横たはれるを見て。五尺のからだを持

ちたる男が。ほろりくと涙ぐみたりとて。笑はれたる人もありき。人情のおもむくところ。今より思へば夢かうつゝか。かくまで敵には打ち勝ちたれども。つひに勝つ事あたはざりしは時勢なりき。十六の年の十月なりしが。ふと思ひ立ちて切らばやといひしを、父上いたく喜び給ひて。汝の頑固にも困りたりしよとて。御手づから剪を取らせ給ひしかども。思はしくや切られざりけん。母上と二人して。やう／＼いが栗にはなし給ひき。おのれ鏡をも見ずして學校にゆきたるに。出山のお釋迦様よとて。友だちいたく笑ひぬ。

小石川

秋ふけて小石川を過ぐ。江戸川の櫻大かた黄ばみて。ほろ／＼とこぼれかゝるを見れば。川舟に乗りて花見せし春など思ひ出でられて。あはれふかし。

安藤坂をのぼりて。傳通院をますぐに見る。こゝにも木の葉の色づきたるなどありて。墨染の衣したる僧二人。物語しつゝ立ちたり。今しも打ちつれ門前をすぐる乙女は。淑徳女學校の生徒ならん。袴の色木蓮花の花に似たり。

澤藏稻荷の坂をおるれば。いとさゝやかなる地藏堂あり。まゐる人多しと見えて。赤き腹掛を捧げ。花筒には黄菊

のあたらしきも打ちかをる。

寺 山

茸狩のかへるさ。寺山をすぐる頃日は暮れたり。友は近道よりとて別れたれば。語るもの石塔の外にあらず。御堂のともし火かすかに漏れて。梟今しも二聲三聲なく。

薩 摩 芋

ある私学校の開校式に招かれたるに。これより茶菓をまゐらせんと。校主いひ終るまゝに。袴はきたる人ふたりして。持ちいでたるを見れば。大廣蓋にふかしたての薩

摩芋を。山の如く積みたるなりき。かをりは煙と共に講堂に満ちわたりて。暖かさ春に似たり。曰く是わが故郷の名産なれば。俵にしたるを取り寄せたるなりと。フロックコートの紳士も。白襟紋付の夫人も。指輪はめたる指さし出だして。皮をむき口におくる。主客すでに心の隔なし。かのおづく手を出だす蒔繪の臺のカステーラと。いづれぞや。

庭 の 暮 秋

豆の葉は黄ばみ枯れてさびしき垣根に。晝もしぼまで咲き残る朝顔。猫の掌よりも小さし。あはれ秋も夕暮近く

なりけるかな。
薄は亂れ伏して起す人もなきに。乙女の唇なしたる山茶花のみ。時しり顔に咲きぬ。二ひら三ひらこぼれたる上に。露のほろくとおきたる。かくまで美しき物やあるべき。

大根の青々としたる葉の下には。霜より白く肥えたる肌をぞあらはしたる。去年の秋も紅葉見ての歸るさ。山里人の洗ひぬたるを見しも。此物なりしよ。
つはぶきの花は盛すぎで。畑のかたへに植ゑたる豆菊。つぼみ日にくくふくれ行く。隣の嫗の鶏頭一もと乞ひに來たるは。暖かき日の寺まゐり思ひ立ちたるならん。

霜來らば庭は冬枯の野となるべし。短き頃の夕日かげ。今暫くも花の上にとまれ。

茶の花

歌ものがたり申さんとて。何がしどの、姫君を訪ひまゐらせたるに。常に文机置かるゝ一間へと請じ入れらる。机の上には筆や料紙やと打ち散りたるに。白がねの一輪ざし。其間にきらめき立ちて。茶の花一枝ものいひたげなり。姫君は奥に御聲はすれども。未だ出で給はざるに。蠅ひとつ來りて苔の花にとまりぬ。

天長節

一

竹に音せし昨夜の雨は全く晴れて。拭ふが如き藍色の空には。天の岩戸ひらけしまゝの日輪。いつよりも笑み榮むつゝ。さしのぼれり。馬車の轟き。國旗の靡き。誰かは聖壽萬歳を稱へ奉らざらん。返すこだまは。山よりも海よりも。

二

觀兵式の拜觀を思ひ立ちたれど。御見合とあれば。道をかへて音羽の護國寺にと志す。江戸川橋をわたれば。家

々の旗風春めきわたたりて。遠の梢は霞の内に立てり。

三

護國寺の觀音堂。秋すでに淋しからんとすれども。楓は二もと先だちたるのみ。大かたまだ青し。葉のなき枝垂櫻の上には。蒲鉾なりの月一つ。消えんとしつゝなほ残り。

四

瀧の川はまだ早しといふ人もあれど。行きて見んと思ひおこして。大塚より田舎道にかゝる。それとなき林の色づき渡れるも美しきに。道のかたへの一つ家には。錢よりも小さき黄菊赤菊咲き亂れて。門の左右を守れり。あ

るじは誰ぞ。うしろの庭より答ふるは。コケコッコの
 聲のみ。

五

かなめを垣にして。奥ぶかく見入れらるゝ家あり。金の
 玉つけたる旗を國旗と共に靡かせたるは。兵士の出營を
 歓迎したるなり。人も人。時も時。知らぬ我さへ。何が
 し君萬歳と稱へでや過ぎまし。

六

紅葉の色にまがへる袴はきつれて。來る乙女あり。學校
 の式すみでの歸りなるべし。一人は作りたる白菊のかん
 ざしをさし。一人は茶の花一枝折りたるを手に持ちたり。

七

瀧の川は梢未だ染みてあらず。されども來りあつまる人
 ども。寺にも坂にも満ちくたり。こなたの木の中に茶
 を呼ぶ隠士。かなたの岩の上に寫生する書生。明治の名
 所圖會みる心地もするかな。薄にてつくれる木兎は忽に
 賣れて。海軍帽子きたる子の肩にぞかゝり行く。

八

夜家にかへれば。子は皆おきゐて。學校の式など語り興
 ず。竹に風なし。軍樂の聲いづくよりか樂しげに聞ゆ。

ゆく秋

露と共に來りし秋。風と共に來りし秋。秋は今よりいづかたに行かんとする。おのが育てたる野邊の花を見すて
見よ螢草は花やせて。色も形も。昔みし面影をのこさず。
見よ撫子は淋しげに。たゞ一花を。老いたる薄のかげに見いだすのみ。
見よ女郎花は黒くしをれて。むしたる粟と。ながめし姿はいくづぞ。
見よ花薔は僅に残りて。百合と競ひつゝ。胡蝶まねきし色は何くぞ。
秋よ秋よ。秋は去らんとして別れを告げたり。花よ花よ。

花は見おくらんとして野に立ちたり。行く秋。残る花。あはれは同じ。子も母も。

寺のうしろ

おのれ野に出でんとして。寺のうしろを行く。前に僧の二人先だつあれば。其あとをつけたるに。二人は玉垣めぐらしたる墓の内に入りぬ。猶ゆけば先はとまりて。横に折れたる細き道となりぬ。顧みれば跡より來る書生三人あり。之を頼みに折れて行けば。からたちの垣したる處につきあたりて。左右も前も行くべき道なし。せんかたなさに跡もどりすれば。三人の書生も。之を見て跡も

どりす。書生はおのれを案内としたりしなり。おのれは書生を案内としたりしなり。顔見合せて互に笑ふ。世にはかゝる事こそ多けれ。

教子に與ふ

作花と生花とを其室に置きたるを見て。

作りたる花も美し

作らざる花も美し

つくらざる花に習ひて

たぐひなき色香を見せよ

作りたる花に習ひて

咲きちらぬ工を見せよ

君が讀む歌も君が書く文も

除隊

歩兵何がし君を歓迎すと。筆太にしるせる旗。幾ながれもおしたてゝ。迎へに出でたる數十人の同勢。ステーションに待ちゐたり。瀛車つきてプラットホームより出でくる兵士三人。おのゝかゝへ持ちたる大風呂敷包の中には。何をか入れたる。父母への土産か。妻子への土産か。

きのふは銃を取りたる手。あすは鋏持つ腕とや變らん。きのふは號令を聞きたる耳。あすは臼つき唄きく耳とや

かはらん。稲穂つみたる村の中道。萬歳の聲と共に。ねり行く樂しみはいかに。

籠作る翁

山の麓に一つ家あり。あるじの翁は。うしろの谷より竹を取り來ては。鳥籠つくる事をなりはひとす。心やすくて。常にゆきゝしては。慰め慰めらるゝ中なりしが。秋も暮れんとする頃。菊の花を乞はんとて行きたりしに。いつもよりあまた積みぬたりしかば。何故ぞと問ふに。あの松にさがれる蔦を御覽せよ。今は花よりも美しきが。青葉なりし頃おもひ起して。赤くなり盡さんまでに。百

の數に満たさんと。寝る事も忘れていろしみ侍りぬ。今四つにて志は遂げなんとぞいひつる。折しも時雨はらくと來りて。落葉と共に聲あり。

近火

何やらんさわげば。雨戸あくるに。火の粉はさかりに飛び來れり。妻よ水汲め。娘は妹を脊おひて早く逃げよと。いふく荷物をかたづけんとすれば。手はかゝみ足はちぢみて。聲少しも出でず。夢なれかし。夢なれかし。書生枕もとに新聞が來ましたと呼ぶ。

昆布

若狭より歸りてし人。羽衣といふ昆布の菓子をくれたり。さては古にも。若狭の小濱のめしのかぶなどいふ小唄あれば。其地の産物ならんと。思ひて問へば。さにはあらず。北海道より來れる昆布もて製したるなりといふ。さては西洋にて仕入れたる知識を我ものとして。世に立つ學者にも似たるかな。

夕日のあと

一

糸の如き光を引きたる夕日は。さびしき松の下枝をも別れて。形はすでに見えずなりぬ。冬の日は短し。火のつかぬ先にと。家路に急ぐ市人多し。

二

空には紅の色まだ残りて。八幡の森のいてふ常よりも美し。賽錢箱のあたりに群れおたる鳩。それも翼さむげにねぐらにぞ急ぐ。

三

屋根の上の物干にあがりて。洗ひたる衣とりいるゝ乙女あり。今しも過ぎ行く雁をかぞへて立てば。消えんとしつゝ消えざる紅。額をそめて薔薇よりにほはし。

四

月はやうく我世をしめて。枯木のかげを土におとしぬ。きのふは喜び迎へられし身の。今宵は人を家におくる外には。役もなし。しめだされたる戸の内には。お月さまいくつの歌も響けど。

學校カバン

小兒の學校に持ち行くカバンを見せよといへば。店の男こゝろえて。學校カバンを御目にかけてよと丁稚に命ず。我いひし言葉は冗長にして。彼のいひしは簡單なりき。始めて知りぬ。文章の用語に上手下手の別あるを。

思ひいづれば。フルベツキ神學博士の存生中なりしが。ある日訪ひたるに。博士は和語演説の筆記を取り出だし。悪しき處は知らせてよといはる。朝の太陽のかゞやく國といふ事ありしかば。是はくどし。日の出の國にて然るべしといひしに。げにもさなりと。手を拍ちて喜ばれし事ありき。

鋏の柄

畑うつ翁は。晝飯たうべんとて家に歸りぬ。春風あたゝかに渡りて。置き残されたる鋏の柄には。舞ひ疲れたる蝶一つとまる。

猿引

秋ゆたかにして。神まつる幟は。杉林の木の間には。小猿をせおひきたり。酒宴なかばなる賤が屋の前には。太鼓たゝきをる翁も見ゆ。

耳切丸

大坂にて能ありける時。烏帽子折の合戦に身が入りすぎ。木太刀もて耳切りやぶられたる役者あり。紀念を子孫に残さんとて。その太刀を耳切丸と名づけ。床の間に飾りて家寶とす。

乳母

乳母の肩にかゝりて雛市見に行きたるに。美しき菓子を取りて一つ與へぬ。外にては食はぬ物ぞと。母上の常にのたまへば。頭ふりたるに。乳母いかりて。おのれをつめりし恐ろしさこそ。忘れね。四つか五つの頃なりけん。

煙

おもしろき山の麓など。煙なびかせつゝ、瀛車の走せ行くを。遠く見やりたる。畫にもかゝまほし。されど窓の内

くさく煙を満たして。トンネルに入る時などは。なつかしくもあらず。

今朝も文机のあたりに。目もあけられぬまで入りくる煙あり。何ぞと問へば。落葉を隣にて焼くなりといふ。寺山などに白くのぼるを見たりし時は。景色の内ぞとほめたる物を。

紅白の小袖

七八人の會葬者におくられて行く柩あり。柩とはいへど。さゝやかなる桶を駕籠に載せたるもの。打ちかけられたる紅白の小袖ぞ。あふれ出でゝは見えたる。世は常なし。

霜にあひたる花か木の葉か。

庭の鶯

一坪ばかりの庭に植木鉢二つあり。唐がらしの赤らみたと。菊の黄なるとを見て。野山の秋を思ひやるのみ。あした火鉢によりてカナリヤの歌をきくと。夕べ物干に出でゝ月かげを仰ぐ外には。紅葉ふく風の音づれもこねば。歸るさつぐる立田姫の使も來らず。日本橋わたりの家居のさまこそあはれなれ。

去年の春。歌まなびに來る乙女ありき。わが庭の鶯をきいて。いたく喜びたるさまなりしが。後に其母の來て。

娘は十五になるまで。鶯の聲を知らざりしをかしさとて。打ち笑ひぬ。げにも乙女の家は日本橋區の中央なれば。土藏の二階にのぼりて。金あみの窓より隣の屋根を見ると。店にいでゝゆきゝひまなき人と車とをながむるをもて。せめての心やりとする處なれば。さもありなんかし。

二人の影

草枯れて里いと近し。學校に通ふとて。今しも來れる乙女二人。行きてはとまり。とまりては又行く。霜やうやう解けたるならん。日いでゝ二人の影は。ふしたる薄の上にご横たはれる。

豆腐

一とせ上野に旅せし時。やどりに着きて平の蓋を取れば。べによりも紅なる鯛は。ひれも鱗もこまやかにて。はね出でんとする勢あり。されども色の少しあやしかりしかば。箸さしよせて見たるに。思ひきや豆腐もて作れるものならんとは。あまりのたくみさに。別に折詰にしみやげにと持ちかへりしに。開きて見たるわらんべはいへり。鯛の顔したる豆腐よりは。豆腐の衣きたる鯛こそほしけれと。

村の正午

庭鳥の聲藪の中に聞えて。村の正午は報せられたり。紅葉ある学校の門より出でくる生徒。あるひは唱歌を口ずさみ。あるひは今日ならひたる讀本をくりかへす。あすの休みに。母を助けて稻こかんとする子も。まじりたるべし。

歌

翁どちさしむかひつゝ。物もいはでゐたるを。幼き子見て。何したまふぞと問ふ。歌よみをるなりといへば。坊

木の枯風

もよめるといふに。そは面白し。一つよめといへば。百人一首持ちいだし。天智天皇秋の田のと。高らかによみいでたるこそをかしけれ。

木の葉空にまひ。鳥四方に飛びまがふ。歌などによむ木がらしの風とは。是なるべし。埋火かこみて聞きふかす夜は。にくゝもなけれど。火の事はあらずやと思ふ心は。安くもあらず。やうくあけゆく庭の木の間に。山寺の塔の隠す蔭なく見やらるゝは。此風のなさけとやいはまし。

豌豆

ほしたる豌豆を皿にもりたるあり。老人は見て石の如しといひ。書生は見て金米糖にもまさるべしといふ。御身はいかにと乙女に問へば。幼稚園の恩物つくらまほしとこそ答へしか。

頭巾

頭巾に顔を包みたる令嬢。町より折れて家まばらなる道のかたに歩む。待つ人は師匠か友か。木がらし來りて手に持つ水仙を吹きをらんとす。

冬の始

菊老い尾花かれたるあたりに。時えがほなるは麥なり。小川の水に洗はれたる大根の。車に乗りて里に出づる頃は。行燈の火かげ紅にともりぬ。夜は蕎麥賣る聲もいつしか冬めきわたれり。

人の世

墓の櫓をさしかへんとして。ふるきを引きぬけば。花筒のなりに。氷までつきてあがれり。今汲む水も今夜また結ばん。むすびたる氷も明日また碎けん。かたむく卒都

婆。苔むす石碑。人の世こそ氷には似たれ。

火鉢

冬の夜のつれづれに。薩摩芋一つ焼かんとて。火鉢の灰に埋めたる折しも。客來る。先づ此そばにとて。共にぬよりて語りあひしが。客何の心もなく。火箸もて文字なと書くとして。ふとかの芋を挟み出だしぬ。驚く客。困るあるじ。障子のあなたには。笑を忍ぶ妻。若き時の失策は。老後の一口話とぞなりぬる。

煤拂

棚の奥よりは思はぬ書物あらはれ。簞笥をのくれば失ひたりし剪もいでぬ。煤はきこそ喜は多けれ。髯いかめしく擦りぬたるあるじも。手拭かぶりて箒を手に持ち。おしろい残りし娘の鼻に。鍋墨のつきたりとて笑はるゝも。此日の興なり。日はあたくかし。竹藪でしに疊たゝく音。こだまに響く。

伊豫の山

伊豫の山見ればなつかし

伊豫の海見ればなつかし

故郷の空とおもへば

沈む日の色身にしみて
さす月も昔に似たり

昔とは誰かいふらん

玉鉾の道行く乙女

言の葉を聞けば其世の

心地のみして

手料理

いつにかありけん。親しき家より使もて。大きやかなる
平目をおくりぬ。折しも家の者は皆あらずして。おのれ
と十五になる女の童とのみなりしが。御身は料理したる

事ありやといへば。此者阿波の生れなれば。見覚えはあ
るべし。こしらへて見侍るべきかといふ。おのれも少し
は海水浴などに行きて。鱗おとしたる事もあれば。いで
や二人にて。見事に料理し。家の者驚かさばやとて。お
のれは臺所の流しの前に坐をしめ。童は水桶さげ來りな
どしつゝ。始めたりしが。半ばにして骨きらんとする時。
庖刀すべりて指をきずつけたるにこりて。中止の姿とな
りぬるこそ。思ひいでゝも今にをかしけれ。されども皿
に盛られたる刺身は。三角なるもの。細長きもの。引き
ちぎられたるもの。骨の突き出でたるものなど。功を奏
せざりしにもあらざるに。指いためたる功臣は譽められ

ずして。こはぐ手つだひたる乙女をのみ。人はよくこそとたゝへてぞいひける。

一人の翁

勸業大博覽會のある年なりき。京都に物せんとして乗りたるに。瀛車の内さながら蜜柑を桶に入れたる如く。立ちても居られず。人の膝の上にも腰かくる程なりしが。米原あたりより乗りたる一人の翁あり。京都の妙心寺へ参詣するとして。數珠を手首にかけ。みづから八十三なりと語りぬ。いたはしさに我腰掛を與へ。又草津にて求めたる姥が餅を。半ば分ちたれば。兩手もて拜みつゝ喜びし

面影。なほ目にちらつくやうなり。此冬もなほ圍爐裏のそばに。孫共あつめて佛法のありがたさなど。説き居るやいかに。

郵便函

朝さむくして。街に立てる郵便函の屋根霜白し。口もて手を暖めつゝ來りし丁稚は。手紙を入れて歸らんとせしが。ふと指を延ばして霜の上に。へのへのもへいなど畫がく。

冬の暮

薄墨の雲ひくゝ垂れて。雁二つ三つ翼たゆげに飛ぶも。雪こぬひまにと。蘆間をさしているそぐにやあらん。遠き村里は暮れそめて。竈の煙こゝかして立てども。氷りたるが如くにて。枯木の梢を離れず。道のかたへの賤が屋には火ともりて。障子うす紅に人の影くろし。箸とる音。茶碗おく音など聞えて。むつまじき夕飯の圓居は。まさに開かれなんとす。脊戸の方より歸り来る女は。片顔に燈火の光を受けて。かゝへたる籠の大根のみ。白くかゝやく。雪ちらつきいでたり。按摩の笛の外には。誰も道をゆかず。

毛糸の玉

乙女は手袋編みさして。鶯の初音に聞きとれたり。春日あたゝかなれば。子猫も足さしのばして。毛糸の玉をあちへまろばし。こちへまろばす。

夜なか

夢さめて又ねられず。手をさしのばして枕べをさぐれば。ランプの下にマッチさへあり。いざやともして。宵に讀みのこしたる小説を開かん。さるにても心して備へおきたる。下婢のなさけこそ深けれ。

三角の巨燧

ゐなかに志田といふ歌よみあり。其家の巨燧は三角なり
 と人のいへば。何故ぞと問ひしに。夫婦と母人と三人し
 て三方にあたり。夜も晝も屋倉の上にて。歌の會をなす
 ためぞと答へぬ。此話は。あるじを毀れるやうにも聞え。
 又ほめたる如くにも聞ゆ。

霜柱

遠く見れば花よりも美しく。近く見れば水晶よりも白し、
 印度人をして霜柱ふましめんには。いかなる詞もてか。

驚かんとすらん。京都の野の宮にまうでし日。これを踏
 みつゝ。昔しのびし事もありしよ。

鈴

村の社の梅いまだ咲かねば。朝まゐりする氏子もあらず
 日影さむく落葉おほし。風のみ來りて拜殿の鈴をならす。

仁王尊

寺山の椿を折りて歸らんとする子は。山門に立ちとま
 りて。頻におくれし友を呼ぶ。門には半ば木地あらはし
 たる仁王尊あり。仁王尊の前には。わが笠よりも大きな

るわらぢを下げたり。王母の前で、
 老いたる母は病みふして床にあり。をさなき童は枕屏風
 のかげにありて。扇ひろげつゝ火鉢をあふぐ。火は赤く
 なれり。粥は煮えてぼれんとす。あはれ孝子の親おもふ
 心は。そのあつき此粥といづれぞ。

粥

紺足袋

いつなりけん。人の家をとひしに。是より能の稽古をす
 る處なるに。よくこそおはしつれ。いで一番舞ひ給はず

やといふ。袴がなくてはいへば。貸さんといはれしに
 こまりて。さはいへ足袋は文の合はねば。借りばきもな
 らずと。のがれんとせしに。あるじぬからず。そは今は
 きてお給ふ紺足袋にてよしといふ。いかに稽古とて。も。
 紺足袋にて能まふ法式やはあるといへば。あるじ更に誇
 りいへらく。足袋の耻はかきずてにあらずや。

南天

菊は枯れ水仙はしをれたるに。ひとり赤き玉を夕日にか
 っやかすは南天なり。花筒の氷くたく人もなき墓の前に。
 いつまで其美しさを誇らんとかする。

水仙

はじめて中島大人の門に入りしは。八歳なりき。正月の
 讀初より來れといはれて。上下を着し。僕に伴なはれて
 至れば。座敷にとほされ。大學を半枚ばかり。習ひて歸
 りぬ。此時の記憶と共に呼びおこさるゝは。床の間の袋
 棚に張りてありたる。水仙の彩色畫なり。たが筆なりけ
 ん。何となく心にしみて。畫師とならばやなども思ひた
 りしが。事みな違ひて。違はぬは唯この幻の影のみ。

風

風高く。富士の山いと低し。道ゆく人にはあふなけれど
 も。空ゆくうなりは。泰平の春の音樂かとも聞ゆ。子供
 のさわぐは。又も門の松の木に引きかけたりといふか。

ランプ

一とせ奈良めぐりのかへるさ。山城の木津に休みゐたる
 に。前を駕籠にて通る人あり。女どもいでゝ見て。まづ
 おめでたい事なりきといへば。其よしをきくに。こは近
 き村の豪家のあるじなるが。ある夜遠方の息子の許にや
 るとて。手紙をかきゐたりしに。釣ランプの下なるをわ
 すれ。ふと立ちたれば。ランプ落ちくだけて満身に火を

あびたりしたため。命も危かりしを。からうじて助かり。今病院よりいで、歸る道なりといふ。此話いたく身にしみわたりにて。それより釣ランプを嫌ふこと甚しく。家のものにも戒めて。つひに之を使はする事なし。かぞへたてなば。置ランプにも怪我なしとはいふべからねど。

瀧つ瀨

山躑躅の花紫なるが。咲きほこりたる岸のあひだを。一筋しろく落ちくる瀧つ瀨。さらせる布といはゞ古くやあらん。観音のめしたる薄衣を。巖にかけたらん心地もするかな。あたかもよし。こなたの松かげには。木こりの

たきすてたる火も。半は炭なるが二つ三つのこれり。

こぼれ米

冬籠する賤が屋の土間には。俵十四五つみあげたり。袖なし着たる子供。其上にあがりおりして遊べば。ひよ子づれなる庭鳥は。人にも驚かで。こぼれ米ついはみあるく。

墓の中道

入相の鐘近く響きて。墓の中道。既にゆきかふ人もなし。小さき石碑。大きな石碑。文字やうく見えすなりて。

音するものは櫛の枯葉をわたる夕風のみ。地藏尊のうしろのかたには。昨日までなかりしも一つふえたり。

繪馬

西江寺といふに閻魔堂あり。正月の十六日には。扉を開きて人に拜ます。おのれ十二三の頃ゆきたるに。地獄の呵責を畫がきたる額あり。血の池のさまなど。歸りて思ひいづれば。夕飯の箸とる心地もせず胸わろしと。語り申したるに。母君さもあるべし。かゝる折は思を外にうつして。忘れんこそよけれと。のたまひしかば。和靈神社の御供殿にかゝりをる。神子の舞の繪を思ひいだし

て。之を打ち消したりしは。三十三四年のむかしなるが。今年もゆきて見たるに。其繪馬なほ健康なりき。

庖丁

初午まうでの歸るさなるべし。四五人づれの客。賤が屋の庭に満ちて。聲にぎはしく。田舎の氣さんじさを語りあふ。折しも鶯の歌はうしろの藪にあり。くりやには庖丁とぐ音もひゞく。

針の穴

幼き時のいたづらに。針もて障子をつゝきぬたりしを。

祖母上みたまひ。針の穴から棒の風といふ事あれば。やめよくと仰せられしに。さらば棒の穴からは何にやと申せば。手桶ほどの風ならんと答へ給ひしに附け込みて。さらば。手桶ほどの穴よりはと又申せば。ひつこきにも程があると叱られたり。此頃をさな子どもの會話をきいて思ひ合はせば。いかに腹立たしくおぼしけん。

三河萬歳

柳の枝に手が届かぬとて。父の肩車に乗りて。やうくつかまりたる幼子あり。通り掛りたる三河萬歳。扇を口にあてつゝ笑ひながら。之を仰ぎ見る。天下いたるとこ

ろ長閑なる春なり。されど鼓のしらべと唄の節とは。年々古へに遠ざかりゆく。

櫓の聲

漁笛の聲に驚きさむれば。舟は、や港にあり。別府にや佐賀の關にや。月おぼろなる磯の方より。こなたをさして急ぎくる提灯。送らるゝもあらん。迎へらるゝもあらん。あすは我身の上とし思へば。櫓の聲もよその空かは。

薬瓶

雪まじりに降る雨。氷よりも寒し。十一になる娘。薬瓶

さげかへりて。病みふす母の枕もとにおく。見れば髪の毛も白くぬれつゝ。霜やけの手は海老のやうなり。時計は正午十二時を打ちぬ。

早苗の歌

五月雨はじめて晴れて。あつき日かげやうく半ならんとす。子の手を引きつゝ。妻が提げゆく大土瓶は。田にある夫に晝けの茶をおくるなるべし。早苗とる歌。さもたのしげに遠く近く聞ゆ。

雪舟の達摩

誦經をたのむ事ありて。赤坂なる何がし寺にゆきぬ。奥の座敷に案内せられて待つほどに。小僧まづ茶をすゝめ。菓子ですゝめて去れり。床には雪舟の達摩。さとすが如く教ふるが如くに我れをにらみ。寒梅二輪。香の煙の薫ずる處に笑を漏らす。

小社

里とほき森の中に小社あり。梅ちりて後は人も詣せず。拜殿の繪馬は雨に打たれて。敦盛の顔も胡粉はげたるに。ところ得がほの親雀は。そのうしろをぞ時とはすなる。

門前は海なり。かゝれる舟の帆柱。長く短く林の如し。夕日しづまんとしては其間にとまり。三日月入らんとし。ては其間にたゆたふ。波のひゞき舟人の聲。夢にもあらず又うつゝならず。

帆柱

手紙の文字

おのが始めて手紙もらひたりしは。十一か二の時なりしと覺ゆ。師なりし人より書物かへすとて。御落掌可被下候と。かきておこされしを。年末に藩の學校よりたまは

る賞與の品にかきてあるに似たれば。ほめてくれよといふ事かとおもへど。さにては心とほらねば。父上に見せまゐらせたるに。それは受取るといふことにて。落手ともいふぞかしと宣ひき。わづかに二つの文字も。おぼえたるには歴史こそあれ。

寒き日

鐵びんのおと笙の如く。猫は眠りて火鉢のふちにあり。寒しくといひつゝ歸るを見れば。太郎の帽子は雪すでに白し。

針仕事

むすめ集めて針仕事をしふる家あり。東の窓は日あたりよければ。半ば身を椽にいだしたる教子。三人四人みゆ。うしろの藪に鶯きこえて。火のし持ちたる子まで首をいだしぬ。

兵士一隊

兵士一隊列をたゞして街をすぐ。喇叭の聲いといさまし。乳母のせなかななる子は。身を躍らしつゝ。僕も兵隊さんになりたいと叫ぶ。富士の山いよく高く。櫻の花ます

ます香ばし。

奈良の春

大佛殿の屋根。興福寺の塔。薄衣かけたらんやうに霞みわたりて。夕ぐれさびしきは。奈良の都の春なり。かへりみがちに停車場にあつまる人々。あるは花の折枝を持ち。又は春日の鳥居の藪などかたる。

うしろの岡

春たちたる日。うしろの岡にて鶯きゝたりとて語る人あり。われもかくれじとて急ぎのぼりたるは。成田の不動

に節分詣せし折の事なりき。朝日あたゝかに照らして。小笹の露は半ば消えたれど。法華經となふる聲は。晝まで待ちたるに。遂に得きかず。きゝたる人いにくく。きかせざる鳥更にくくし。

水道

捻一つまはせば。瀧の如く射いださるゝ水。おながらにして釜にも風呂にも満たしつべし。開けし御代のめぐみこそ多けれ。あはれ小金井の花の下露。今朝も盥に受けてや顔を洗はん。

ほしきもの

母上幼くおはしける日。紙にて作れる祭の御輿がいとほしとて。御父君に乞はせ給ひしに。女子の持つべきならずとて。ゆるし給はず。その頃祖父君の御部屋は少し離れてありけるが。ある日よばせ給ふまゝに。母上まゐり給ひしに。奥の間をあけよとのたまふ。何心なく障子ひらけば。爐なる助炭の上に。ほしかりし御輿はのりてありけり。此時ほど世にうれしかりし事は覚えすと。常にかたり給ひぬ。

おのれは八つなりし年。大學一冊ならひ終らば。何にて

も與へんと。母上のたまひしかば。赤間が關の硯をと願ひつる事もありしが。その硯はいかにしつらん。十二三の頃は畫かく事を好みしかば。畫の具畫筆畫手本などのみほしくて。居間としたる二階の障子まで。青く赤くぬりちらしたり。そのひまぐくには天神さま祭るとて。梅鉢つきたる御酒どくりや。御あかし奉る土器などもほしかりき。

此頃謠ひ習ひはじめたる人の家を訪ひしに。きのふ手に入りたりとて。新しき觀世流の見臺に謠本をおきて。さも樂しげに謠ひゐたりしは。なほ物のほしき時代なるよと。いとこそ羨まれたれ。さはいへ今日の己も。欲しき

もの全く無きにはあらず。得て満足しやすきを羨むのみ。

車夫のあくび

主人は奥へ通されて出で來らず。車夫はいくつもあくびしつゝ玄關に待てり。奥には琴のしらべなど聞え。門には梅の花ほろくと散る。

材木の上

光は消えたれども。春の日なほいまだ暮れず。寺に普請あり。大工は道具をしまひて。すでに歸りぬ。材木の横たはりたる上に。おりつあがりつして遊び居る子供。梅

の花をひろひては鼻にあてゝ見る。雨晴れたる日。ぬかれる泥を蹴立てゝ。馬走らせくる軍人あり。風呂敷包せおひたる老婆は。之をよけんとして。つまづきたふれぬ。軍人すこし乗りもどして。怪我はせぬかといへば。老婆わづかに起きかへりつゝ。何ともござりませぬと答ふ。我禮をもてすれば。彼禮をもてかへさぬはあらじ。

馬上の軍人

大根賣る男

大八車に大根のせて賣りに來たる男あり。さまざまの世渡り話などしつゝ。是が甘し。それが柔らかなり。漬物ならば此手もよからんと。一時間ばかりも話するたるが。つひに妻の撰ぶに任せ。長く太きのを一つ置きて去りぬ。價はと聞けば。わづかに二錢なりき。物賣るも骨の折るゝものかな。

畫帖

十八九なる下婢。主人の使にて。表具師などより持ちかへるにや。錦繪あまた畫帖にしたるを。風呂敷なかば解きかけつゝ。開き見ながら道があるけば。九つばかりの

被布きたる乙女はのびあがりつまだちて。見せよ／＼と
すがりゆく。

人足四五人

雨寒くて氷の如く。車に乗りてゆく身も。手足切るゝや
うなり。白き菅笠に紺の法被きたる人足四五人。竿の先
に。口打ち開きたる蛇の首など附けたるもの持ちつれて。
ふるふ／＼横町に入る。葬送の家に行くべし。まおも
へば車の上の人。さむし／＼など口にすべき事は。さ
はいへ柩の前に泣くらん家もあるを。今日一日の命こそ
千金なれ。

薺

岸の下に無縁の墓あり。あはれにも塵捨場となりて。櫛
の枯枝など。石碑を埋めて山をなしつ。此春は其上に土
さへ積りて。薺の咲きいでたるもあはれなるに。罪なき
子供は。ぺん／＼草つむとて。今日も石垣傳ひに遊ぶ。

芹

くぼめたる手をさしのばして。細谷水を結ばんとするに。
墨ながしめきたる濁は来りぬ。上には芹洗ふ乙女やある
らん。箸ならば尋ねもゆかましものを。

梅の木蔭

洗ひ下げたる髪を。薄紅なるリボンもて結びたるが。本
と辨當を兩手に携へつゝ。忙がはしげにゆく。學校の歸
りなるべし。梅の木蔭に足をとめて。落花一ひら拾ひ
とりては手帳に挟みぬ。

冬の歌

十首

ちりかゝる落葉はらひて木がくれの
八つ手の花を見いでつるかな
もみぢせぬ星の林も散るばかり

暗の夜嵐空にふくなり

蘆かれて廣くなりたる池のおもに

寒くも月のうかぶ夜半かな

花よりもうす紅に残る日の

かげ美しき冬の野邊かな

冬の野に一むら残る熊笹の

みどりも白く霜ふりにけり

朝ぼらけ鐘つく人の跡ばかり

霜に見えたる古寺の庭

賤の女がゆりこぼしたる水桶の

しづくも今朝は薄氷せり

水瓶の氷をくたく音きけば

手習ふ子らやいかに寒けき

ふり埋む雪のしたにも住吉の

松の姿はかくれざりけり

ふりかゝる雪を翼に拂ひつゝ

我子はぐゝむ鳥のあはれさ

おもひいで草

一

桑山長兵衛といひしは。わが家の長屋に住みたる人なりしが。いたくおのれを愛して。其成長を樂しみをりしと

は。母上の御物語にて。常に聞きおたりき。されど其面影いとおぼろにて。今思ひ出でんとするに能はず。五つか六つの頃なりけん。門に出で、遊ぶるたるに。其息子なりし人。水桶さげて歸り來れり。どこへ行きたるかと問へば。長兵衛の墓参りしつと語りし事は。昨日今日のやうにさだかに覚えぬ。是やおのれ。生れて死といふ事を知りたる始なりけらし。

二

是も同じ頃なりしが。我家こぞりて遊子浦といふに。四五日かけて行きたる事ありき。海上十里ばかりもやあるらん。此時波あれて舟に酔はぬは一人もなかりしに。知

らず顔にて喜びおたるはおのれなりしと。祖母上の御物語にて知りぬ。かしこにて海人の子供を呼び集め。父上饅頭を投げ給へば。争ひさわぎで拾ひつる事など。かすかにぞ思ひ出でらるゝ。祭なりしか。村芝居などありて。三番叟の面白かりし事のみは。忘らるべくもあらず。

三

五月雨をやみなく降る夕べ。武田太平といふ人の家に。父上の招かれ給ふ御供して行きたる事ありき。芍薬の美しく咲きたるに露のかゝりしと。武士の鐵炮打ち居る江戸畫を貰ひしとの。二つならでは覺えず。あるじは釣す

きにて常に父上と舟を浮べ。又發句をも好みたりしが。

今は其子孫に忍ばるゝ夕べありやなしや。

四

父上の召させ給ふ御馬は。魁と名づけたる栗毛なりしが。或時の事。おのれは徒歩にて馬丁と共に従ひまゐらせしに。仲間村なかひだといふにて代りて乗れと仰せらる。口綱とりて貰ひながら。八幡河原はちまんがはらといふに下らんとせしに。馬はねて眞逆さまにぞ落されたる。急ぎあたりの家に抱き込まれしに。其家にて驚きつゝ。有合の薬など顔につけてくれたりし事ありき。父上殊に氣づかはせ給ひ。醫者にやゝらん。祈禱やさせんなど宣ひし御聲御顔。なほ見

るが如く聞くが如し。されども思ひし程の怪我にてもなかりきと。歸りて母上に語り給ひぬ。

五

長州征伐とて我藩兵の出でたるは。八つの年なりき。父上も隊長となりて出陣し給ふ事なれば。曉より人々おきて騒ぎしが。まづ君の御館へとてほのく、あくる頃まゐり給ひしに。朝焼ことに甚しく。障子など黄に見えたりしを。孫助といふ賣卜者の家に來りゐて。よからぬさがなりといひたりとて。祖母上などいたく恐れ給ひぬ。おのれは出兵のありさまをも見。よそながら父上をも見。おくり參らせんとて。僕につれられ追手といふに至りし

に。朝日の花やかにさし昇る頃。陣貝陣太鼓の音とゞろき渡りて。幾隊かの兵士は勇ましく練り行く中に。父上馬上より見出だし給ひて。にてやかにふりむかせ給ひし事こそ。嬉しかりしか。御いでたちは陣笠に陣羽織なりしと覺ゆ。

六

其前なりしか後なりしかは覺えねど。京都づめを命せられ給ひし事ありき。三月三日の御乗船とて。樺崎まで見おくりまゐらせし事などは如何ありけん。少しも心に残らねど。又の日は残り居る雛棚の前につとひ。今は御船いづこならんなど。母上と語りゐたるに。ふと一僕を連

れて歸りおはしぬ。こはいかにしてと申せば。風あしく
て今日も出でずと宣ふ折しも。庭の櫻ふゞきの如く。吹
き捲かれては家の内まで散り來ぬ。

七

手習の稽古に通ひたるは。岸田藤右衛門といへる翁の家
なりしが。翁は藩の祐筆なれば。集まれるは士族の子供
等。七八十人もありけらし。朝は辰の刻より十枚づゝと
ちたる双紙を十冊。晝後は午の中刻より五冊ならひ終れ
ば。あとは遊びつゝ引くる時間を待つ事なりしが。遊ぶ
にも書をかく事。又席を立つ事は。當番の監督のゆるし
を受けねばならず。又かりそめにも。何奴何分などいふ

金目の言葉をつかへば。武士のいふべきならずとて罰に
處せられたるも。今より思へばいとをかし。其良の
罰則は三等ありて。人に對し不敬の事などをかしたるは。
末席に下り一同の前にて謝罪するを其一とし。居残りて
掃除させらるゝを其次とし。節多き竹の鞭にて打たるゝ
を最も重しとす。

清書の點は。中々宜敷と書かれたるが最もあしく。一入
宜敷が其次にて。一段宜敷が上等のほめ詞なりしと覚え
たり。師の翁の慈愛みちたる御顔は。喉笛のあたりに生
ひ出でたる六七寸の白髯と共に。夢うつゝにぞ思ひ出で
らるゝ。

八

漢學の素讀教ふる藩の學校をば。明倫館といひつ。夏は朝とく。冬は正午に。手習のひまに行く事なりしが。教場は幾十疊も敷きたる大廣間にて。教師四人四箇所に分れ。到着順に四書五經小學古文眞寶の類を。一人づゝ習ひて歸る事なりき。月の廿八日には復し日と稱へて。小試験めきたるものあり。其日は始めより習ひたる本を。のこらず持ち行きて。一人々々にぬきいだし讀まざるゝ事なれば。何がしは。風呂敷包が身のたけ程ありなどいはれたる。其身の名譽いかに面だゝしき事なりけん。

十一月に行はるゝを試みと稱へ。家老も席に臨まるゝなれば。其日に讀みちがへなどすれば。耻辱これよりいみじきはなしとて。前々より友だちの家に集まり。徹夜よみなどせしも度々なりき。翌日は家に歸りて眠る事なれば。愚なるやうなれど。一夜寢ずして疲れもせざる。今の我身のならはしは。其頃よりや得たりけん。さて十二月の末にお賞しとて。一年中の勤惰により。紙扇など品を分ちて賜る嬉しさ。此頃の何物にかはくらべていはまし。扇は五色五本の有職扇。紙は唐紙もありたるが。おのれは半紙なりしと覺ゆ。

九

復し日もこゝろみも。胸やすからぬ物なりしが。猶それ
 よりも恐ろしかりしは。おきゝこそあれ。おきゝとは。
 藩侯の御前にて行はるゝ試験なれば。首尾よく終らん事
 を神に祈りなどするさま。宣耀殿の女御のために。誦經
 し給ひけん小一條のおとゞも物の數かは。おのれは字つ
 きに用ふる白箸を神棚に捧げ。天満宮に願かけたる事な
 ど。語れば人は笑ひやすらん。されども其頃の人の心は
 誠にさやうなりし物を。御前に出でゝも御顔などは仰が
 れもせず。御見臺に蒔繪したる。三つ引兩の金の御紋の
 みこそ。僅かに見えしか。

十

乗馬の稽古には下田といふ家に行きぬ。冬毎に寒中の十
 日を限り。夜なゝ室内に集まりて。寒稽古と名づけ。
 木馬を蹴る事なりしが。木馬は三つばかりならではなけ
 れば。人の蹴る間は。多くの門弟待ちをらざるべからず。
 むしろ蹴るよりも待ちゐて話す時こそ楽しみは多けれ。
 二人大手をひろげてかゝゆる程の。大摺鉢を火桶とし。
 炭あかゝと起したてゝ。其めぐりを取り圍み。かはり
 ぐに昔話をしては。笑ひ興せし中にも。誰なりけん。
 或時日の神と月の神と。雷神を伴ひて旅しけるが。雷神
 は道すがらこゝろと鳴り渡りて。さわがしければ。宿
 りにつきて後。日の神と月の神とひそかに相談し。雷神

のまだ寐て居るを幸に。曉早く立ち出でしに。暫くして
雷神目をさまし。朝飯もてこし女に問へば。しかぐの
次第なりと聞き。月日のたつは早いものよといひし話は。
今も忘れず。されども習ひたる馬術は。忘れはてたるを
いかにせん。

松葉牡丹

一

葉は松葉花は牡丹の

形して咲ける此草

照りこがす日にもしをれず

水のなき土にも枯れぬ
雄々しとをもをしき心
雄々しさをめでゝ育てゝ
乙女子は學のまどの
をしへとはせよ

二

紅は朝の日影か

白妙は夕べの月か

口なしに黄なる花あり

焚火なす赤き花あり

何くにも植うれば生ひて

美しきゑまひぞ見する

乙女子は此花まなべ

あしたゆふべに

むかし今

宇和島新聞に送らんとて。第三字和島丸の船中にてしるす。

其一

月日は行く水と共に留まらずして。人また三十年前の齡
ならねば。物事の昔にかはるは。怪しむべきに非ざれど
も。久しぶりに故郷を訪ひて。我童なりし頃を思ひ出づ
れば。耳に目に觸るゝことに。感せらるゝ事こそ多けれ。

士族屋敷の桑畑に化したる。町と店との美しくなりたる。
中小學校女學校の立派に立ちたるなどの事は。いふまで
もあらじ。依然として舊天地の面目を改めざるは。道路
の石おほきと。城の天守の白きとのみ。
まづ宇和津彦神社の社務所の奥に枕を借りたるが。此社
の岸に老木の枝垂櫻あり。名木の一つと數へられたるを。
花の時ならねど。今なほながめわたすうれしさよ。是に
つゞきて中の町の穂積氏の櫻こそ。櫻垣内さくらがきつの名と共に高
く響きたる花なりしに。物部氏の代となりて。いつしか
世になきものとなりしとぞ。穂積法學博士の幼時を育て
しも此蔭なりしを。あのれも十五六の頃は屢ばゆきし

て。歌の會に連なりたる事もありき。
 日吉神社の櫻。來村土手の櫻などは。瘦せたるながらも
 春まちがほなるを。音に聞えし櫻町には花すこしも残ら
 ず。女學校にて講話せし日は。朝顔のあたらしきを朝で
 とに見たり。
 松根氏には生首松なまぐさまつとて。夕暮などは木のもとをゆくも氣
 味わるきほどの大松ありしが。今は是もあらず。西江寺
 なる名木の松は。一もと風に吹き倒されたりとぞ聞きし。
 住吉山の松。惠比須山の松。是は早むかしを語らすべく
 もあらず。惜しみても餘りあるは。船唄にも歌はれたる。
 惠比須が鼻の下り松ぞかし。渚にのぞめる石の神體も。

烏帽子を缺きて立たせ給ふ。

大石の町には二枚敷ほどの大石ありて。饅頭など置きた
 る如く。土の上にあらはれたりしが。踏めば大山伏が出
 るとて。人々こわがり。誰も足かくるものだに無かりし
 に。今來て見れば。石の姿は少しもあらず。土を掛けた
 るにや。堀りのけたるにや。我等と共に。岸田の手習場
 に出入したる人々は。其時の事や思ひいづらん。

其二

追手を通れば喜作餅あり。河岸端をゆけば。大福餅あり。
 是等も昔はなかりしぞかし。おのれ十三四の頃なりしが。
 馬琴の八犬傳を讀みて。相模小僧のしやべる中に。大福

もちろんといふ事ありしを。何の事ぞと思ひしに。東京に出で。大福餅の名を知りて。始めて文意を了解せし事など思ひいづれば。開けても來れるものかな。

むかしは餅としいへば。先づ指を龜餅庄屋餅花餅伊賀餅などに屈する事なりしが。龜は萬年を待たずして亡び。庄屋は維新と共に倒れ。花は散り伊賀はつぶれぬ。或日も此話いでたりしに。石崎君は再興の舉を圖るべしとて。盆の十五日戸島念佛を見んとすることあるを幸に。奈良屋に命じて作らせられたるに。惜しむべし家傳の餡の拵方を知りたるもの。一人ならずはあらず。其一人はもと手代なりしが。今は鼈甲屋を業とするものにて。折あし

く今日は家に居らずとて。餡のみは舊式にする事あたはざりしといへり。纒のものなれども。斷絶はさせたくもなき事ならずや。況んや花餅の如き伊賀餅の如き。優美にして古おもはるゝ名物なるをや。

祭の夜宮などに參詣すれば。必らず道のほとりに土風呂を置き。十六七の娘など。桃色木綿の布巾を手に取り。こねては焼き。く／＼ては賣りおたる焼餅といふもの。今は何處にか影を隠しつるといへば。いや今も尋ねばあるべしとて。まだ焼きたての暖かなるを贈れり。半は白。半は青にて。昔のまゝの文字のあらはれたるなつかしさ。されど昔のは。米の粉をこねたるを其まゝ火に掛けたる

なれば。何くまでも焼けわたりにて香ばしく。今のは一たびゆで、焼きたるなれば。炭は入らねど。焦方よからずして劣れりと。或人はいへり。げにさる事もありなん。昔はいはゆる上菓子といふものなくして。三月節句の雛祭には。上方くだりの品か。又は八幡濱より取りよせたるを。供ふる事なりしが。今は餅菓子も出来。カステラも出来。黒砂糖の餡など。殆んど跡を絶たんとするに至りぬ。口のおどりの進みたるを見るべし。昔は丸きものとのみ思ひし饅頭の楕圓形になりたるは。持ちて食ふに便利よきがためなるべく。鮎飯の上置には必らずありたる猩々海苔の。ゆくへも知れず失せにけるは。虚飾を

離れて實用を主とする世の中につれしものか。

久しぶりに風味を感せしは。羹の露芋。はじめて名をば聞きたれど。試みて評する能はざるは。畑の源氏芋なり。蒲鉾の紅粉つけて硯蓋の一方を占領せる。鯛の身の洗となりて鉢の中央に王位を得たるなど。我宇和島にはめづらしき事なりしを。唯をしむべきは。カイシキとて盛肴の真中に草花など立て、飾とする事。今は大方やみたるやうなり。いかで是等をも昔にかへさん有志者もかな。

其二

人の家を訪へば座蒲團を出だし。茶を入れ菓子をすゝむ。少しも東京など、異なる事なし。然れども昔は座蒲團を

敷かず。茶をば火鉢に懸りてある番茶を汲みてすゝむるを例とし。菓子は法事の客か。又は家に出來合の餅など有る時の外は。すべて出ださぬ習慣なりき。己は喉のいたく乾く性質にて。煎茶よりも番茶がよしといひては。昔かたぎよと笑はるゝ事も少なからず。客を招けば。盛交もりませなり刺身なり。大鉢に盛り上げて座敷の中央に陳列し。勸盃する毎に手鹽に取りては之を其人に贈り。叮嚀に禮をなす。是宇和島の美風ともいふべき。趣味のある宴會法なりしが。近頃は追々少なくならんとす。人の繁を去りて簡に就くは。自然の勢なれども。一折に一徳利をへて分配するなど。祭禮佛事の饗應に行ひ

たる人あらんには。客之をよしとて喜ぶべしや如何に。料理屋などに招かるゝ事ある毎に。是だけは改良して貰ひたしと思はるゝは。幾つも下れる釣ランプなり。酌する乙女の頭かゝめてくゞりゆくも。馴れたるわざながらいと危く。案山子めきたる紙の御幣の。垂れたるも見苦しからずしもあらず。昔は燭臺なりしかば。何の非難もあらざれど。世の開けゆくと共に。猶此上にと願はるゝ事も又多し。人の招待を受けたるには。袴着けてゆくが昔の慣例なりしに。今は十の八九まで。着流しに羽織の姿なるを見る。其代りには。宇和島にて見る事なかりし。赤袴姿の令嬢

方を生じたる事。風俗史上に特筆すべき事なるべし。汗くさきものとのみ覺えるたりし。和靈まるりの浦方娘が。香水の匂を我劣らじと髪に満たせて。新形の蝙蝠傘など刺しつれゆくを見ては。都鄙位を異にしたる感なき能はず。昔は裏附草履や草鞋掛なりしものが。今は燃え立つやうなる。天鷲絨鼻緒の駒下駄をこそ履きたりけれ。

其四

おのれ高等女學校にて講話をなしける時。一日は方言と云ふ事に就きて例をあぐるに當り。躊躇せし事おほかりしは。我宇和島の方言も。昔とはあれこれ變りたるやうに思はるればなり。是れ交通の自在になりたると。是ま

で無かりし事物の増加せしとの結果なるべし。

「めんどろ」といふは。「不體裁」もしくは「見ぐるし」などの意にのみ用ひたりしに。今は東京と同じく。「手数が掛かる困難なり」といふ場合に用ひらるゝは。「御面倒ながら」の用文章などよりや改められけん。

「氣の毒」といふは。宇和島にては自身の耻かしといふ時に用ひ。東京にては他人に對して迷惑なりといふやうの。場合に用ふるの差ありと思ひしに。今は兩様ともに用ひらるゝなり。

おのが童なりし頃。江戸より來たる人の。宇和島にては目下の人に對してのみ。「おもしろいねい」「そうよねい」など

いへど。江戸にては同等の人にいふ詞なりとて。珍らし
がりし事ありしが。今は半ば江戸流の「ねい」も行はるゝ世
となりけり。

「御断」といふは謝絶の意味をあらはす外に。「御むしん」「御ね
だり」「嘆願」などいふ時に用ふるが。宇和島の特例なりと思
ひしに。今も是は依然として存せり。之につきて面白き
話こそあれ。我父上のかつて江戸に連れゆき給ひし僕あ
りしが。隣の家にて風呂を湧かしたれば入れといふ。僕
さらばとて。其家に至り。「どうぞ御断申します」といひし
かば。入らずに歸る事と思ひしに。さはなくて。着物ぬ
ぎすて入りたるこそ不思議なれと。其家人の後に父上に

語りしとぞ。他郷に出でんとする人は。是等の詞の方言
か方言ならぬかは。心得おかまほしき事なりかし。
商家にては心やすき人に向ひて。「いきなさい」「やんなさい」
と云ふべきを。「いきない」「やんない」などいふ詞ありたるが。
今は殆んど聲を絶ちたり。士農工商の階級制度すたれた
る爲め。商家の品位の高まりたるにやあらん。
友に對して自分の事を「おらこ」と稱する事は。我少年時代
の流行なりしが。今は「僕」なる詞これに代りて。「おらこ」は
全く死語となれり。去れども「いきさい」「言ひさい」は。「行き
給へ」「言ひ給へ」の新語のために未だ優勝劣敗せず。
おのれ決して。なつかしき故郷の方言を厭ふものならん

や。唯その移り變りを比べ見て。世の有様を味ふのみ。道に遊び居る子供あり。百人一首をそらんじ居るを聞けば。曰く。是や此ゆくも歸るも別れては。汁も吸うたり牛も食うたりと。むかしは下の句。汁も吸うたりめしも食うたり。ところ言ひたるものと。いと可笑し。人情の變遷。あに飯と牛との差のみならんやは。

其五

和靈神社の夏祭に逢ひたるは。二十何年目なるべし。願はくは童心に歸りて。おねりを見ばやと言ひ出でたるに石崎君清水君など盡力して。棧敷を設け。快く見せ與へられたる嬉しさよ。

今やくと待つ程に。ヨイサ先づ来る。掛聲と太鼓の音とは昔なれども。乗りたる四人の子供。黄鉢卷に紺の印半纏めきたるものを着たるは。今様姿にて。勇ましき點こそあれ。猶むかしの赤き出立の優美なるには及ばず。況んや昔は御兵具とて。火繩筒を肩にしたる藩兵の。行列立てゝ出で來れるが謂はゆるオネリの最初なりしに。今は最終たるべきヨイサを以て道拂さする事。奇異の思こそしたりけれ。續きて幕張りわたしたる納涼舟來り。つぎに數の山車ども。鳴物にぎはしく。石多き町をゆられく來る。大きな幣一つ立てたるは。昔なかりし車なるが。何かの之

に變りしならん。小野道風と柳の枝より釣り下げられたる蛙とは。昔おもはるゝさまなれど。紅白の布まきたる四本柱に。赤地の唐團扇を置きたるは。相撲の徒歩ねりが化したるにやと。人々いひたり。十一二の少年。まけじ劣らじと力くらぶるは。一入の興なるが上に。天神七代地神五代など。行司が愛らしき聲もて讀み立つる相撲の古事も。記憶に残りて今なほ忘れかぬるを。此ネリいかで再興したきものならずや。山草を杉なりに飾りて。其上に竹を立て松を立て。松には短冊と色紙とを附けたるが來る。其下には三月雛の官女の装して。下髪に緋の袴はきたる女。うたひ囃したる

も品なからず。是等は昔なかりし事ながら。新趣向なかくに優りてぞ見えし。すべて此車にて三味ひき唄うたふ女。むかしは町ごとさるべき家の娘を撰び。美服着かざらせて乗せたりしが。今は大かた唄女を雇ひて用ふる事となりたれば。術は進みて聞ゆれども。勤め方は粗末になれりしやうなり。家の娘の出でざるは。學校などの結果ならん。祭に對しては嘆くべきなれども。世の進みからいへば喜ぶべき事ぞ。

其六

何よりも愉快に感せしは。マアハレと鎗振りとなりき。鹿の頭を戴きたる子供五人いで。唄うたひ太鼓打ちつ

つ丸く輪をなして廻り。又は投足しては。行きちがひ行き別れなどして。楽しく遊び戯むるゝさま。見れば見る程。無罪無邪氣にして。心ひかるゝなり。

昔は向新町に切附屋(今もあるか知らず)といふ店ありて。マアハレの鹿の頭を賣りたりしかば。母上に請ひては之を取りよせ。打ちかぶりつゝ。なアんぼたアづねてエも。居ウらアバこウそなど。眞似し遊びし事。何よりの樂しみなりしが。思へば三十四五年の過去とぞなりぬる。其頃は鹿のうたひし唄も。不調子の物なりしが。今年きけば。調子よく合ひて聲いとさわやかなりしは。學校にて學ぶ唱歌のめぐみなるべきか。

鎗振はもと丸穂より出でたるが。今もしかるや。斯くまではあらじと思ひしに。投げては渡し。手を廣げては振る。其巧なる。昔みたりしに少しも變らず。聞けば毎日毎日稽古に餘念なかりしとぞ。左もありなんく。

終に太鼓ひゞき神官きたりて。神輿わたらせ給ふ。御鏡の光御旗の靡きは昔に似たれど。神官の祭服せるまゝ。清淨ならぬ人力車にて引かれゆくは。有らずもがなとぞ思はれし。豊前の早鞆神社の神主は。馬上に巻煙草くゆらしつゝ神輿の御供せしとて。土地の人民は笑ひしが。巻煙草にくらぶれば。車上のみはまだしもか。是より御旅所にも參拜し。神輿還御の走込をも見物せし

が。昔おぼゆる愉快こそあれ。神事に就きては別にかは
りたるを見出でざりしかば。批評がましき事は最早いふ
まじ。さても三十日に二日足らざりし故郷の見聞。いかに
誤りたる事多かりなん。唯その神樂太鼓の上手すくな
くなりたる事と。鹿の子の唄に優等賞を與ふべき事とは。
確かに事實なりと信ず。

目なし鳥

江の島に遊びて近眼めがねを海に落とし入れたる時。

面白く今まで見つる

江の島は霧やへだてし
富士の根は雲やおほひし

われこそは峙離れし

目なし鳥いづこをはかど

鳴きて歸らん

波の上に近く向ひし

大島の煙はいづこ

我こそは月なき夜半の

浮れ鳥何を樂しと

歌ひあそばん

三二

おもほえぬ別うらめし

波の底に今宵や眠る

砂の上に明日やよりくる

汝なれこそは汀の藻屑

たが網にかゝりて

又も捨てられぬらん

四十年前の正月

家人こぞりて一つの食卓を圍めば。屠蘇の盃は。五つに

なりたる女の童より始めて。上へくと廻り來る。和氣
洋々とは此時の心なるべし。酌とる書生は。播州なるも
伊豫なるもあれば。物語遂に國々の正月の風俗に移る。
今より四十年の昔。おのが八つ九つなりし頃は。明治維
新をまだ知らぬ前なりしかば。何事も古風にて。いはゆ
る國ぶりなる事多かりけり。

我家は丸の内なれば。穢多乞食の類は。城門より入る事
をゆるされず。只孫八といへる穢多の一族のみ。下駄草
履の用聞としてゆるされたれば。正月もまづ黒木綿の紋
付羽織など着て來り。家毎に祝詞をのぶるを吉例とす。
名づけてホメといへるは。家門をほめたゝふるの意なる

べし。玄關の土間にうづくまりて兩手をつき。やんらめでたや富たから。といふを始めとし。一本毎に柱を祝ひゆきつゝ。十一本の柱は十一面の観音。などほめたつるさま。鼓と扇こそ持たね。江戸の萬歳めきたり。城門の外なる家々には。ホメはなけれど。さまざまの藝をなしつゝ。米餅など貰ひあるく物多し。俵こかしとて。小鼓ぐらゐの大ききある藁の俵をこしらへ。これを玄關の板敷などに投げころばしては。俵が舞ひ込むといふやうなる詞を述べあるく若者あり。ミサイナとて。小さき槌を振りつゝ。ミサイナンコレといふ唄をうたひあるく女あり。此ミサイナの事を今の若い人に問へば。知りた

るといふ人なし。狂言の小唄にも。鶉舞を見さいなとどいふがあれば。古なつかしき心地こそせらるれ。オカイツリとて。餅幾つに就きて幾筆と定め。顔に墨をぬらせ歩くうつけ者あり。いかに初春の笑ぞめとはいへ。是でも藝の一つかと思へば。なさけなき者よと。思ひし事もありき。壁や柱に樂書し足らぬ子供等は。いと興じつゝ。手習筆に墨くろくくと含ませて。鼻ともいはず額ともいはず。髯をかき皺をかきなどしたる果には。顔ちう眞黒にして笑ひどよめくを。めでたきしるしとなすなり。常に手習の稽古場などにて。顔に墨をつけたる人は。あのおかいつりがと笑はれたる言葉も。今は跡を絶ちた

るにやあらん。
 一人は小さき太鼓を腰につけて。唄うたひつゝ、打ちはやし。一人は長き竹竿を持ちて。鳥をさす真似をしつゝ、踊りあるく者もあり。名づけてサイトリサシといふ。隣おたけが機からおりてなど。節おもしろく歌ふ聲は。今も耳に残れり。
 これらを見ると。年始の親類まはりすましたる子供は。門松の下などに集まり。松葉をつみて相撲をとらするなどはよけれど。尖りたる葉の先を束ねて。思はぬ友のあたまに投げつけ。泣かして笑ふを興とするなど。野蠻の戯れもなきにはあらざりき。

あはれ泰平三百年時代の春と。維新三十年後の春と。くらべて見れば。よきもわるきも互に多し。

鈴の響

本居宣長翁の祭の庭にて。

三十あまり六つの小鈴を

文机のかたへにかけて

明暮にふり鳴らしては

とる筆の疲れ慰め

讀む書のいたづき忘れ

よるひるの友とせし君

あはれその鈴の響の

さやくくに清き響は

千代かけて人こそ仰げ

萬代に人こそしたへ

敷島の大和をゝるの

花櫻にほふ言葉を

面影にして

反歌

敏鎌もて誰か拂はん玉鋒の

道の醜草君ならずして

手にとりて誰か束ねん言の葉の

玉のみだれ緒君ならずして

袴能

能は装束ならではと。人はいへども。袴能こそおのれは

好ましけれ。紋附に袴のいでたちは。いふにいはいはれぬ優

美と威嚴とをそなへたる日本の特色なるに。裝飾にては

かくれて見えざるところも。あらはに見えて。その味ま

たたとふべきものこそなけれ。

中野といふ老人は。装束能を彩色畫に比し。袴能は雪舟

墨畫の山水なりと評せり。やゝわが心を得たりとぞいふ

べき。

梅若の袴能見てかへらんとせしに。前田子爵にあひたり。今日は寶生會の日にて候ふに。よくこそおはしたれといひしかば。おのが役の能をすましてから急ぎ來れり。袴能は特におもしろき處あれば。とぞこたへられし。ひそかにおもふに。今日の袴能見に來たる人の中に。裝束よりもとといふ人は。恐らくは子爵とおのれと。二人なりしにやあらん。

能の脇師

脇師こそ拂底になりたれ。稀世の名人といはれし寶生新朔は死し。シテを生かしてワキの本分を心得たるといは

れし。春藤六右衛門は死し。聲もよく人品もよしと評せられし。福王繁十郎は死し。一己の見識ありて老練の一に加へられし。尾上新治は死し。もと素人なれど進藤流の繼續者として。近年もちひられたる鈴木誠は死し。今は寶生金五郎を除くの外。脇師といふ脇師のなきこそ心細けれ。

田宮照映は。先づ今日にては見らるゝ内に加ふべく。弟の野口貢五郎はあつばれのものになるべしと。人皆評しあへり。尾上始太郎同じく千三郎。これも勉強せば相應にはできあがるべきか。さはいへ寶生一流には。若手の有望者あれば。なほ心丈夫なり。

されども故ありて。梅若の舞臺には此一流はいで來らず。二三年前までは。すべての見物にきらはれて一役のつきたる事さへなかりし花咲右衛門が。一流の人と珍重せらるゝに至りしこそ。世のさまとは。いへかなしき次第なれ。一時は人のなきにこまりて。地謡の中より鳥居坪井などいふ人々に。順番に脇の役をつとめさずする事として試みしが。そもつひにやめになりて。此頃は新しき脇師。あちこちよりいで來にけり。中にも西一衛といふ人は。評判よけれど。まだ見ねばいはず。大伴信安はもと金剛の脇をせし人のよし。形はか

どだちてなだらかならねど。さすがはむかしの修業。うたひなど何くとなくうまみあり。楠木祚胤は鳥越神社の神官とか。かたもうたひも。なほいまだ舞臺にいづべき資格あらず。あゝ能も末路になりにけり。十年あまりも前にみたる新朔の七騎落。六右衛門の角田川。福王の道成寺。などおもひいづれば。涙とゞめがたし。(三十二年七月しるす)

雑の歌

十首

海

瓊矛もてさぐりし神の昔より

山

海の色こそみどりなりけれ

山猿のこずゑをつたふ聲たえて

ゆふぐれすこし森の下みち

家

芭蕉葉のやれ葉ぬひありく蝸牛

それだに家は身に持つものを

垣

瓜の花さかせてぞ見る此夏も

垣ねの竹のこなたかなたに

隣

ともし火の壁のひまもる影みれば

隣のをちやまだ寐ざるらん

塚

里の子が手向けていにし古塚の

花ものいはす石もかたらず

碇

おもからぬ人の心のいかり綱

舟にひかるゝ世をいかにせん

笛

春日山ふえの音たかし宮姫は

あすの神樂の舞ならふらん

琴

習へどもまだ片なりの琴のねは

立てじよ母の前ならずして

机

よりなれし窓の文机足折れて

おしやられたる老の悲しさ

宇和島日記

今年はくといひながら四年も過ぎぬ。三百里あなたの古里。いでや夢路の外に。母の御墓をも掃はんとて。八月二日の朝とく牛込の家を出づ。霧ふかくして雨の如し。

人の顔やうく見えゆくに。植木屋よりや求めきぬらん。朝顔一鉢もちて歸る人あり。五六輪さきたる花の上に。かゝれる露の涼しげさよ。

雲井なる富士の高嶺も此花の

しをるゝ頃やあとになりなん

丸の内にかゝる頃。白鉢巻に數珠だすきしたる富士詣の五人三人うちつれ行くを見る。まだ汗じまぬはいと清し。晴れたらば暑くならんと。口々にいひつゝ歩む。

人に揉まれ人に押されて新橋を出で。大森をも過ぎぬ。

青田の面には草取る賤の女もこゝかして見ゆれど。池上の山陰には。火影ほのかにまだ夜を殘せり。白蓮いた

る處に風を帯びて香ばし。
霧全く晴れて空青くなりたるは。神奈川あたりにはやあり
けらし。

夏の山とてろくに百合みえて

すゞしき色の朝風ぞ吹く

大磯にては。別荘めきたる家に。髯ある人の令嬢と共に。
朝飯の箸とり居るなど。近くに見ゆ。七つ八つの男の童。
わが瀛車を見とめて。何やらん歡ばしげに叫びをり。
御殿場にては白装束の人下車し。沼津よりかりたる客ま
た多くして。室の内すゞしければ。興津江尻のあたりは
眠りつゝ過ぎぬ。

西洋辨當と。賣りに來れるを見れば。早くも静岡なり。
今年の春まではなかりしかば。一つ試みんとて笹折を開
けば。中にはオムレツ。ヲカン。シチウ。コロツケーな
どを入れ。小皿には鹽芥子バタあり。赤茄子の酢につけ
たる外には。ソースを入れたる小びんさへ添へて。ナイ
フの代りには。ブリツキのくづを入れたり。景物として
波に日の出の團扇をくれたるこそ。何よりも重寶なれ。
是を手にして阿倍川にむかふ。ほしきは語りあふ友ぞか
し。

堀の内につけば正に一時。五分間の停車ぞといへば。我
もくくと出で。蓮花の形したる大水瓶をとりまく。二

十人も三十人も入りかはりては集まるさま。蟻の砂糖につくが如し。手拭ぬらしては顔を撫づるもあれば。土瓶につめて歸るもあり。

涼しき夕風にかくられて。米原をいづれば。湖水のあなたに。眉の如き山あり。半ば身を沈めたる太陽。美人の上唇のみ見せたるやうなり。残る光は白百合の花をぞ染めたる。

あつしとておりたる人に贈らばや

この夕暮のにはの浦風

おのれも一たびは。名古屋にやおりん。大垣にや宿らんと思ひしを。今更思へば。うれしきは忍耐なりけり。

能登川にて月いでぬ。きのふ立待なりしかば。今宵は十八夜にあたれり。

家人の伏してまつらん月影を

なたかき波に浮べてぞ見る

黄金の鱗きらめき渡りて。三井の鐘の音。いかに涼しくすむ夜ならんなど。思ふほどに。早くも逢坂山の暗穴道に入る。

稻荷にはともし火あまた見えて。都の近さも知られたり。月やうく高く。御社の松の上を離れぬ。いつ渡りてもうれしきは鴨川なり。水もし心あらば。よそに見て過ぐるをや恨むらん。

橋わたる都乙女のたもとより
 ふうか川瀬の風のすゞしさ
 京都にとゞまる五分間。ともし火の影に乗りおるゝ人の
 そよめくも。憎からず。月いよ／＼白くして。顧みる東
 山。薄墨に隈どられたり。

大阪も忽に過ぎて。夢心地する間に。人々ひしめきて出
 でゆくあり。さては神戸かとして出でたるに。三の宮とぞ
 記されたる。よしさらばこゝにておりんと。町にはゆき
 たれど。知りたる宿屋もあらず。辛うじて。山下といふ
 行燈ある家を見いでしかば。泊らるゝかと問ふに。座敷
 侍らず。玄關にて宜しくはといふ。いでや一夜玄關番と

なりて。書生の昔を夢みるもよからんとて。そこに定め
 つ。化粧道具や衣類やと。散り亂れたる一方を占領せし
 なり。
 風呂はと問へば。無しと答へて。二丁ばかりも隔りたる
 湯屋に。案内しくれたり。されば終日つかれたる上に。
 汗じみたる身を。底ふかき風呂に沈めて。百五十里の塵
 をながす。心地よからずやは。かへりは月に向ひつゝ歩
 む。いと涼し。幼かりし日。湯もどりに見なほす雪のけ
 しきかな。といふ俳句をきゝたる事ありしが。今宵は見
 なほす雪のところ。いはまほしけれ。
 三日。風少しもなく。起くるよりいと暑し。二階にては

空氣枕の息ぬく音す。

今日の漁車は最急行とて。神戸より姫路までの間。兵庫の外にいづくへもとまらぬ程の。速力なれば。驛ごとの立札も讀みとるあたはず。窓の朝顔。屋根の松葉牡丹。あれといふまにあとになれり。舞子の松の木の間よりは。海おもしろく見ゆ。

須磨寺の櫻ちる頃こゝにきて

あそびし春も十年へにけり

淡路島も。物いふまなうしろになりぬ。笠岡には灣あり。海水浴してをる人。二三十人も見ゆ。福山城のふもとには。昔しばく、あそびし築切見ゆ。堀に蓮あり。

花まだ開けず。

蘆田川を渡りて尾道にむかふ。坊地ばちぢの峠といふ山越の茶屋にて。西瓜くひたる事などありしが。今はいづくにあたれるやらん。眠りつゝゆかゝる旅こそうれしけれ。

四時すぎて廣島につきぬ。あまりの暑さに氷水をといへば。女いと早くも持ちきたれり。氷は水晶の如くよき程にくだきたるを。朝顔なりの桃色硝子の器に盛り。撫子の模様ある皿に砂糖を入れて。コップと共に前に置きぬ。物は見かけによりてこそよけれ。宿の名を吉川とぞいひし。

やがて湯に入りて。ゆかた一枚になり。寐ころびながら

旅行案内など見る。旅の愉快は此時にあり。夕日かくれて風おもふまゝに入る。四日。朝とく起きて。饒津神社に参詣す。日よく晴れたり。こゝは學生なりし日に。遊びなれたる處なれば。見るもの聞くもの。なつかしからぬはなし。東照宮まづ高き石段の上に拜まれ給ふ。道のかたへには。野菊月草さきいで。鶯しきりに。夏ともいはで梢にうたふ。

思ふどちかたり行く野の手ずさびに
つみしはこれか月草の花
五年を五つかさねし古に

似てもなくかな鶯のこゑ

此あたり廣く二葉公園となりて。名代ずし二葉豆腐などいふ看板をみる。藤棚の下には掛茶屋多し。朝はやければにや。仰向にしたる床几の上に。雀二つ三つあそび居り。店をまもるは赤き提灯のみ。鳥居を入れば兩側に石燈籠多く。石もて作れる獅子は。高く雲にそびえて立てり。舟の帆の形に作れる松は失せて。戦死者記念碑の頂にかゝやける金鷄のつばには。水よりも白き月一つかゝりて残れり。拜殿には八つ花形の御鏡てらして。幣帛おそかになびく。思ひいづれは。或る日曜の日。打ちつれこゝに詣で

しが。春の祭とて。奏樂の今しも始まる所なれば。心ひかれておのれは歸らんともせざりしを。早く行きて大弓引かずやと。すゝめ促したるは。加藤なにがしといひし同窓のはらからなりき。此友の面影。聞きのこしたる笙簞築の聲と共に。今なほ目と耳とを去らず。汽船にて宇品まで行きて。那智川丸といふ汽船に乗る。伊豫に渡らんとするなり。女など來りて。葡萄買へ林檎買へなどすゝむれば。氷あらずやといひしに。さらばとてコップに二つ持ち來れり。されど大きなかたまりに砂糖かけたるなれば。我如き齒の弱きものには。噛み割るの勇氣なく。さりとして徒らに。解くるを待つべきにも

あらざれば。いざとてコップ取り上ぐるに。すは船が出る。送來し人など立ちさわぐ。女もあわてゝ。早く飲み給へ。さらすはコップを持ち歸らんと迫る。迫る人迫らるゝ人。かゝる忙がはしき目にあひたるは。初めてならん。

世をわたる賤が浮世の薄氷

とくるも待たぬ別れをやせん

下は暑ければ甲板の上におたりしに。ボーイ深切にも薄べりなど敷きくれたり。

音戸おんどの瀬戸來る。平相國の安藝守たりし時。堀り割りたる處なりと傳へて。海上に其紀念なる五輪あり。玉垣白

く松青く。英雄の名は波と共に長し。

磯には寺ありて森清く。役場の窓よりは。書記めきたる人あつさに倦みてか。我舟を羨ましげにぞあがめたる。

かく暑きものとも知らで行く舟を

うらやましとや人の見るらん

伊豫の遠山なつかしく見ゆ。

夢ならで向ふ波路の行末に

わすれぬ山を見るぞうれしき

興居島も舳先に立ちぬ。伊豫の小富士とは是なり。おのが此世に出でんとする前。母上この山を夢に見給ひしと語り給へる事など。そゝろに思ひ出でられて。

この山を十づゝ十は重ぬとも

母のなさけに及ぶべしやは

これを廻れば三津が濱より。唯うれしさもて満たされたれば。ハシケに乗るも宿につきしも。母上ならねど夢にこそ似たれ。

宿は若き頃しばく来りし久保田なり。宇和島ゆきの船はと問ふに。明日の朝なりといへば。泊る事に定めて湯に入りなどす。

庭には小松緑に石白くして。雪見燈籠のもとには。花まだもたぬ萩を植ゑたり。そのあなたには。濱と海とを隔てつゝ。小富士の立てるも嬉しきに。床なる軸を見れば。

何がし畫伯の。御殿場にて寫生せしといふ誠の高嶺なるぞ面白き。

かれも戀し是もなつかし富士の嶺を

一つの家に二つながめて

茶をもて來れる女に。松田といふ醫者この地にありやと問へば。おますと答ふ。年はと問へば。旦那ぐらゐならんといふにぞ。さては二十六七年前。廣島にて別れし同じ學の友なるべし。其後互に音づれもせねば。有り無しをも知らざりしをと。俄に手紙したゝめ。今夜の夕飯を共にすべしといひやりたりしに。思ひきや七年前に没せりとて。空しく使の歸らんとは。

世の中は夢なりけりなそれと見て

とらんとすれば水の上の月

さるにても。彼はおのれよりも三つ四つ若かりしが。今宵は白毛まじりの髯を撫りつゝや來るならんなど。思ひし事も泡なりき。

給仕にいでたる小女。まだいと幼なければ。年はと問ふに十二と答ふ。三津の生れかと問へば。神戸よりといふ。いつよりか來れる。一月ほど前より。歸りたくはなきか。父も母も興居島に來て住み居れば。歸りたくは侍らず。こゝの勤めはつらきか。朝の間に拭き掃除さへすれば。客に出る外に用なし。いとらくなりなど語る折しも。火

取虫きたりて。ランプの中に入らんとするを。袖もて拂ひつゝ曰へり。おまへも死なないですむ命を。捨てにくるとはと。人は斯かる齡こそいとあはれなれ。夜もふけたれば床とらせたるに。思はぬ處に電燈のかゞやくはとて。打ち見やられしは月なりけり。

蚊屋こしにながめんものと思ひきや

伊豫簾もりする夏の夜の月

人やうく静まりて。波の音も聞えず。松の風も聞えず。五日。まちくくして十二時も過ぎたる頃。すは來れりと手代ども立ちさわげば。ハシケに送られて日向丸に乗る。室は樓上にて。戸を開きてあれば。寝ながらに海も山も

見え。姿見の鏡にさしそへたる百合の花の美しきが。風にゆらめくもいと涼し。左に濱白く山青き陸をながめつゝゆく程に。長濱も來れり。波止場の先には昔やうの燈臺あり。日本船の帆柱などあなたに見えて。浦里に續く松の村立。是もむかし見たりしまゝなり。いと寒かりし夜に。こゝより上陸せしは。明治九年の頃にやと覺ゆ。波にゆらるゝ帆柱の上に。月一つさえたるが凄かりしかば。歌よみたるやうなりしが。今は忘れぬ。日も夕暮になりて。海の上いと涼しく。山は薄墨になりて眠らんとし。波は青く黒くして。猶吼ゆるが如き聲を

残す。海の一方に影を浸せる玉子色の空。一つ見えたる
 金米糖の如き星。いづれかあはれの浅かるべき。
 佐田の岬をめぐりて別府につきしも。夢の内なり。佐賀
 の關にはいつ頃なりけん。目全くさめて時計を見たるは。
 五時なりき。
 六日。甲板に出づれば。客多くいで、顔洗ふ。東にむか
 ひて拜むもあれば。宇和島はあの山のあなたぞと語るも
 あり。きのふは南にむかひし舟の。今は真東にすゝみ行
 くなり。日まさに出でんとして。紅に染められたる雲の
 あたりこそ。我てふる鬼が城山の空ならめ。
 川の石。八幡濱。是らの港もいつしかすぎて。一直線に

宇和島にむかふ。唯波が鼻は左に。九島は前に。あなゝ
 つかしといふ程もなく。天守の壁白き城山を右にしつゝ。
 樺崎につきぬ。
 待ちをる舊友に迎へられて。宇和島町に入れば。見覺ぬ
 ある看板は店毎にさがりて。互に健康を祝し祝さるゝ如
 し。
 今夜の宿りは。宇和島彦津神社々務所の奥の間にぞ設け
 られたる。宇和島町の眺望残る所なきが上に。宇和島灣
 より吹きくる風さへ心よく入れて。旅路の暑さも忽に忘
 れはてたり。殊に謝すべきは。毛山。清水。小梁川。石
 崎。玉井。小林。上原などの諸君あつまりて。厚くもて

なさるゝうれしさ。忘れんとすとも忘るべしやは。

きてみればうつゝなりけり夢にのみ

なれしむかしの里も野山も

七日。晴れわたりていと暑し。曉に起きて。やうく夜の衣を脱ぎすてんとする海山に向ふ。うれしさの限なり。三つ四つ二つと。鳥の打ちつれて城山を出づるなど。何事かは昔ならざるべき。

明け果てゝ先づ社頭に拜禮をなし。境内を散歩す。山を脊負ひたれば。朝日はいまだ見舞はんともせず。

ねぐら出づる蟬の羽風にこぼれけり。

春はむかしの花の下つゆ

近きわたりなる龍華山の御墓に詣づ。又今更のやうに思ひいでらるゝは母上の昔なり。

雨風に御名の文字をも打たせじと

むしたる苔の嬉しくもあるか

野菊の一輪さきいでたるを折りて。榊と共に花筒に立つ。

涼しき露は木にも草にも滋し。

なき母のをしへとぞ見る夏の日に

まづさきにはふ花の色香を

午前は人に訪はれ。午後は人を訪ひなどして夕方より約束あれば。玉井正申君の家に至る。樓上風よく入れたり。前はなつかしき祖父が森山に向ひ。うしろの窓には。栗

の大木枝さしおほひて。まだ親指の先ほとなる實の。むらがりて付き居るも愛らし。あるじが業とせる漆器工場を見る。木地を作るあり塗り居るあり。又これを乾かす室もありて。創めてこのかた。なほ四五年にも足らざるに。日に月に榮行くさまは知られたり。盃に碗に膳に重箱に。人のたくみの花紅葉。吉野龍田に至らずして。時ならず見らるゝ美しさよ。いたくもてなされて。夜もやゝ更けんとすれば。歸るさには和靈神社の夜宮参りをなす。同行には。伊藤宗義君と。玉井氏より提灯持として貸されたる丁稚とあり。語りゆく道いとつれくならず。

そもく此和靈神社の祭には。遠近の浦人が網舟おしつれて。今日の夕べに入り来る賑。たとへんに物もなき程なれば。童なりし頃は。そを見にゆく事も度々ありしが。友の一人詩を作れりといふ。いかなる詩をと問へば。一船友を呼んで兩船と爲る。三船四船五六船。船去り船來つて船極まりなし。船々々々々々といひて笑ひ興せし折もありき。まづ其あつまりたる様を見んとて。袋町の濱に出でぬ。濱とはいへど。湊江ともいふべき處なるが先なる船より。押しつけく繋ぎ並べたる有様。さながら積み重ねたる目刺の鯛とも見るべきか。其數幾百艘か有るらん。此濱のみには入りかねて。須賀の川口までも

埋めたりといふなり。船には幟を立て。吹貫を靡かし。提灯あかくと照らし。酒宴するあり囃すあり。賑はしき中に。一つの舟は大太鼓を釣り。一人赤裸となりて撥を持ちたるが。踊りては打ち。打ちては踊れば。二十人ばかりも車座になりて。手拍子たゞき歌ひあそぶ。いづくか知らねど。是も一種の盆踊なるべし。海を家なる漁夫の境界。かゝる樂しみも時々になかるべしやは。向新町を過ぎて。須賀の河原を堤づたひにゆく。数千の燈火水に映じて。晝よりも明るし。人出の多きこと。さながら兩國の川開にも比しつべきか。昔は此あたりにて。

341 記 日 島 和 字

西瓜の立食などするもの多かりしが。今は絶えて見えず。氷水屋のみ右より左より。聲をからしつゝ呼ばゝる。参詣をも終り。伊藤君と別れて歸りしは。十二時なりき。閨の内あつくして夢したします。八日。朝より風なし。蟬の時雨は木々より木々に送られゆく。今日は二十五六年目にて。和靈神社の祭禮に出であふ事なれば。其行列をも見たしと思へど。此炎天に街に立たんもつらければ。いかゞはせんと思ひゐたるに。石崎清水などの諸君の心盡しにより。ある家の店を借りて。見物する事になれるぞ嬉しき。晝飯すまして。小梁川翁と

玉井君とに伴なはれゆけば。手すりには毛氈を掛けなどしてあり。まづ思ひ出でらるゝは。侍女従者どもにかしづかれ來りし。前髪時代の我身ぞかし。いでや童でゝるに立ちかへりて。むかしながらの祭をながめん。家ひろければ風通しよく。庭の方なる軒端には。凌霄花のうぜんかずらすゞしげに咲きかゝれり。あるじは銀行に出でゝまだ歸らずとて。妻君茶を立て菓子すゝめ。狂言の蚊相撲にて見るやうなる大團扇もて扇ぎくるゝなど。いとねんでるなり。伊藤君來り。菊地君來り。清水君來りぬ。幾年ぶりの祭けんぶつならん。是からは毎年見る事にすべしなど。口々にいふ。三時にもや近かりけん。すは來れり

と。道ゆく娘どもの立ちさわぐ間もなく。ヨイサといふもの來る。太鼓を中にして四人の子供、撥ふりあげつゝ、囃し立つるを。大勢して聲うち助けかつぎゆくなり。昔は緋の襦袢などにて美しかりしが。今は印半纏に黄鉢巻の出で立ち。誰か斯かる好みをばなしつらん。

次に來りしは納涼舟とて。河舟の形して淺黄の幕ひきめぐらしたるに。女あまた乗りおて。さるべき家々の前にては。一つ弾き歌ひてぞゆられゆく。其唄の何となく鄙びてあらぬは。難波わたりの歌ひめなど乗りたればなるべし。

小野道風の山車きたる。柳の下に糸もて釣られし藁がへ

るの。ぶらりくと下り居るは。昔みし其まゝなり。唄の終れるを合圖する太鼓のおと。乙女がはアと掛くる掛聲まで。祖母上と聞きたる物なるこそなつかしけれ。山草を杉なりに飾りて。其上に松竹を立て。短冊色紙なと結びつけたるは。昔もありしとおぼゆれども。白の衣に緋の袴したる官女の乗りゐて。弾きもし歌ひもするは新趣向ならん。幣の山車。芭蕉の山車。唐團扇の山車など。とりぐに美しく装ひ立て、過ぎたるあとに。待ちに待ちたる鹿の子きたる。名づけて俗にまアはれといへり。五人の男の童。頭には鹿の形したるものを戴き。胸には小さき太鼓

を附けて。まアはれくと。歌ひつゝ打ちつゝ遊び居る折しも。中の一つが。牝鹿を見失ひたりとて尋ねくるひしに。つひに見出だして喜び勇み。なんぼたアづねても。居オらばこオそ。ひともと薄の。かアげに居オるもの。皆一同に聲張り上げて。足ぶみたのしく歌ひ興じつゝ。打ち連れ歸りゆく。いかに無邪氣にして風情ある趣ならずや。其足踏の活潑なる。其曲節の爽快なる。すこし作り直して。幼稚園の遊戯に用ひばやとさへぞ。思はれたる。最後に奴の鎗振きたりしが。是も昔にかはる事なく。足ぶみに合はせては振り。振りては投げ渡すさま。いかな

れば斯くまではと譽むれば。毎夜稽古に辛苦せしは。己も見たりと。菊地君いふ。さもあるべし。ひとり鎗振のみにもあらじ。

盃の數も重なる程に。とゞろく太鼓の音を先立てつゝ。神輿の御渡りあり。神官前後に車を列ねて供奉しつゝゆく。拍手のおと。さながら雷の雲より雲に送らるゝ如し。御旅所も程遠からねば。こゝにも參詣し。いはゆる走込を見んとて。又もや御社の方へと志し。今日も須賀の橋をわたる。手にく松明を持ちて。関の聲を揚げつゝ、駈けゆく若者。道も去りあへぬほどなるが。いづれもシヤツ一枚にて。足袋をはき鉢巻をなしたる有様。いさまし

とは世のつねなり。河の中には五六箇所に大箒を設け。薪つみあげてたき立てたれば。天まで焦がすさまなるに。打ち振りつゝ走り狂ふ數千の松明。下ゆく水に影をうつして。音に聞く夜討もかくやとこそ思はれたれ。

是見んとする人々に埋められて。兩岸あたかも。人の堤を幾重にも築き上げたるやうなり。とても立ちながらに見らるべくもあらざれば。玉井菊地の君たち周旋して。とある家の二階を借り得たり。されど此二階にも幾十人入り込みて。屋根にまでこぼれ出でたれば。蒸風呂の中にあるよりも暑し。

暮れはてゝより。宵一時間もや立ちたりけん。やうゝ太

鼓の音聞え。神官引き續き歸り來る。昔は箱提灯など僕
 に持たせて。烟を扇もて打ち拂ひつゝ。木の杵ふみなら
 し歸りしかば。いと品ありて優なりしが。今はがらく
 じやらんくといふ車にかへたるこそ。口惜しけれ。人
 間もなく波の丸の高張提灯。いくつも河原にあらはれ。
 神輿三體。電燈よりもあかるき火影にかゝりやかせ給ふ。
 二見の朝日。姥捨の月。なほそれよりも待ち迎へたる數
 萬の拍手は。更に天地をも震動させつゝ響きわたれり。
 人皆愉快壯快と叫ぶ。神慮いかでかいさませ給はざるべ
 き。かくて松明の光に守られつゝ。河原を三度めぐりて。め

でたく御社に還らせ給へば。西へ東へ。我もくゝと行き
 散る人々。夕立にあひたる蟻よりも黒し。何ごととも昔なりけり走りくる。おのれも蟻の一隊に加はりて。おしわけかきわけ歸りし
 は。十時には少し早かりしと覺ゆ。毛山氏によれば。昔
 水わかしてあれば。十つかへといはるゝこそ嬉しけれ。昔
 は母君家に待ちゐて。人込の中にて踏まれはせぬかと。
 氣づかひたりしよなど。宣ひしこともありしを。
 九日。晴れたり。夕暮よりは御濱の石崎氏に。大小會よ
 りとて招かれたればゆきぬ。道に堀あり。蓮の六七分ひ

時間の講話をなす。學校は此春の新築にて。材新らしく庭廣く。朝顔多く咲き、ほひたる垣根ありて。心地いと潔し。我休憩所は二階にて音樂室なるが。南の窓よりは。祖父が森近く。方圓寺の屋根高くながめわたさる。時刻きたりて講堂に入れば。七八十人の生徒。一同に海老茶の袴をはきて並び居たり。おのが妹の學校に通ひし頃など思ひ出づれば。よし形式にもせよ。女子教育の進歩したるに驚かざるを得ず。話は國語國文といふ題にて。まづ文字の事より説き始めたり。

午後は穂積陳重君の歸郷し居たるを。本町の居村といふ旅店に訪ひ。大小會の稽古場に遊びて。夕方より石崎庄

吉君の御濱の別荘にゆく。我起き臥す家を。今日より此處と定められたればなり。

あるじは暑さも厭はで。日よけを作り草を掃ひなど。僕を指揮しつゝ共に働き居たり。庭には汐を引きたる池をたゝへ。小松青く岩白くして。平かなる處は一面の芝生なれば。月の夜などは。さながらこゝに圓居もしつべし。昔の友なる惠比須九島の山々も。居ながらに見やられて心ゆく限なるを。たゞ西を受けたれば。入日のみぞせんかたなき。さはいへ。門前たゞちに海なれば。朝汐夕汐にあびんとするも。又よからずやは。名づけて不粹庵と云ふ。常は茶の友まねく處なりとぞ。

夜に入れば。あるじを始め。同志の友あつまりて語りふかす。いづくにかまた旅心地のすべき。食は灘屋より運び。茶などは下婢きたりゐて世話しくるゝといふなり。情けふかきは故郷の友なるかな。十二日。床をいづれば。朝顔まづゑみの眉を開きて。先生お早うといふに似たり。門にいづれば蟹おほく。穴をいでゝは又穴に入る。今日の講話は。假名の事より音の事にうつれり。生徒いと熱心に聽聞す。政談ならぬに。妨害を試みんとしていとも憎きは。梢に時雨るゝ蟬の聲のみ。十三日。明方にや降りたる跡あり。蝸はじめて庭の合歡

の木に鳴く。

講話をすまして歸れば。暮方まで來客たゞず。暮るれば約束ありて毛山氏にゆく。今日は陰曆の水無月つごもりなれば。宇和津彦神社の夏越の秬にて。身の丈ばかりなる茅の輪をくゞる事あり。おのが幼かりし日には年毎に行なはれたれど。其のち久しく絶えぬたりしを。近年再興したりとぞ。俗には之を輪抜けといふ。くゞりぬけては祓戸の神を拜し。麻の葉を受けて歸りゆく人々。その賑いはん方なし。

二年を経てくゞる茅の輪の小さしと

みゆるも神のめぐみなりけり

毛山氏は此御社の祠官なれば。參詣もしがてらとて。殊
更に今夜招かれたるなり。姫路の師團にある門多能誠君
も。歸省せりとて此家に來られしかば。

風わたる門田の稻のさらくくに

君にあはんと思ひかけきや

いたく酔ひて追手を歸れば。氷店の女ども頻に休めく
と呼ぶ。

十四日。明けはてぬ内に起きて。兼助新田を散歩す。鎌
つか。おやりんぼ。蚊屋釣草。などいふ草ども。むかし
のまゝに花さき穂いで。露まだあたらし。蜩とるとて
遊びなれたる汐入沼は。何くなるらん。突貫井戸の水い

とつめたきに。其あたりに萩もて埋められたる處もあり
しが。尋ぬれども分らず。網もて鱈とりに來りし新々田
の蘆原のみは。今なほ同じ緑に生ひ茂れり。

むかし見し乙女が宿の袖垣を

杖にてさける花もありけり

講話より歸れば。小梁川翁すでにあり。穂積君また訪ひ
來りて。父翁時代の物語となりぬ。

其父翁はおのが和歌の師と仰ぎし人。小梁川翁とは殊に
親しかりしといへば。共によそくしき中にあらず。遂
に晝すぐるをも忘れたりしに。穂積君は水泳の日課れこ
たるべからずとて。急ぎ庵を出でんとする時。謠本ふと

ころにしたる客は。早くも門にあり。
今夜は従兄なる中野氏に招かる。
十五日。十六日。訪ひつ訪はれつして暮れたり。講話は
其後言語の事より文章和歌の事に説き進めて。今日ぞ全
く終りける。此學校の門を入るも限ぞと思へば。いと名
残をし。

十七日。うすぐもれり。朝おきて家へ文かゝんとするに。
昨日伊藤君より贈られたる瓶の薔薇。音もなくして一ひ
ら紙の上に散りぬ。

薄暮よりは小林樓にて。小梁川翁の古稀の祝あり。翁は
此地の謠曲を。絶えんとせしに獨り維持して。地に墜さ

りし人なれば。おのが來れるを機會とし。門弟舊友に
て之を催したるなり。會せし人五十四名。おのれまづ高
砂を謠ひ。それより順次に獨吟あり。一調あり。仕舞あ
り。宴たけなはにして。翁はおのが前に來りて盃をすゝ
め。うれし泣きの涙はと。謠ひ出だされたるにても。其
心を満たしゝを知るべし。今宵翁には玉井君の製造せし
三組の塗盃を贈り。會員には猪口一つづゝを紀念として
分ちたり。おのれ塗盃にしるしたりしは。

いく千歳つもりくゝて塵ひぢの

雲ある峰とならんとすらん

翁の名を塵芥といへればなり。猪口には。

忘るなよ花は残らぬ秋の野に
千代よびそめし松虫のこゑ

維持と奨励との功を述べたる心なりとは。聞ゆべしやいかに。

樓のあるじは。我家と縁故ある人なれば。強ひてといはれて今夜はとまる。家ひろければ聞いと涼し。十八日。寐過して起くれば。泰平寺山は庭より續きて。草木の露にきらめく朝日。まだいと美し。あるじかたはらなる山桃の木をさし示して。來年は此實をまゐらせばやと。思ひ侍るなどいふ。招かれたれば。急ぎてかへけふは高等女學校の舟遊に。

るに。やどりの門前には。生徒一同整列し。教員職員いづれも庭の芝生などにて待ちゐたり。舟は門前の濱に用意してありといへば。おのく六艘に別れて乗る。こぎいづるまゝに。早くも唱歌始まりて。樂しみゆたかなる波の上なり。惠比須が鼻の惠比須岩近く行くに。いつしか烏帽子のあたり缺けたれば。名の如くも見えず。されど拜殿ひろく立ちたるは。此山の切りひらかれたるかひなるべし。まづ汝あびせんとして。和田の小島によせぬ。松青く。岩白く。道はあれども細くけはし。生徒は年々なれたる事とて。鉢巻しつゝ舟よりも岩よりも飛び込むさま。いと

勇まし。

汝に身をきたはせてこそ海國の

をのこの母となるべかりけれ

おのれも人なみに飛び込みて見たれど。身を浮かすべ
を知らねば。兩手を砂の上につけて。どたばたと水を蹴
ちらすのみなる恥づかしさ。今少し瘦せおたらんには。
鶺鴒なりとも評せらるべかりしを。

更に漕ぎ進めて。堂崎の鼻に寄す。堂崎とは。西光寺と
いふ観音堂のあれば名づけしなり。むかし祖母上母上な
ど、來りける時。和尚いで。古へ此山に平家の落武者
の隠れおたりしを。其持てる赤旗。松の木の間より波に

うつりたるをもて。敵兵に寄せられ。皆討死せしとぞ言
ひ傳へ侍るなど。説き聞かせたりし事。なほ目の前のや
うなるを。今は法衣に袈裟かけたる住職もあらで。俗體
なる男のわづかに堂をあづかり居るのみ。
此男に乞ひて堂を明けさせ。香の煙くゆりのこれる佛の
御前にて。辨當を開きなどす。生徒は遠近の松陰や岩の
上にて。いと樂しげに握飯など手に取るさまなり。こゝ
にも汐風ひやゝかに來りて。涼しさは譽むべき言葉を知
らず。
おのれ福引の品物を持参したるが。生徒に渡して然るべ
しやと。校長にいへば。それこそ嬉しく思ふらめとて。

急に命じて一方の木蔭に集め。おのく鬮を引かしむ。満面に笑みを呈して友に見せびらかすは。始の番號を得たるなり。いくつと問はれても黙して語らざるは。聞きて白紙なりしに失望せしなり。つひに品物は手にく渡されぬ。福引と聞けば。手鞠羽子板のあらはるゝをや待ちたりけん。福助達摩の飛び出づるをや樂しみたりけん。思ひもよらざる唱歌の本を得て。よろこぶもあれば。早くも二人三人あつまりては歌ふもあり。さるにてもよろこぶ四十七人の外に。くやしがる何十人の生徒を残したるこそ氣の毒なれ。足並たゞして山を下り。皆諸共に鐵道唱歌を歌ひつゝ。

なほ愛らしき調べの波と離れざる間に。舟は沙濱ひろき小高島に着きぬ。こゝにて再び時をうつして。夕日の波に横たはる頃。お濱に歸れば。生徒職員おのく別れを告げて。おもひおもひに家路に向ふ。あはれ樂しかりし今日の日を。又もくりかへさんは何れの日ぞ。たそがれ門前に出づれば。満汐たゞへて月細く浮べり。數ふれば陰曆の五日にあたりぬ。十九日。空のけしき秋めきたり。上原君よりは見事なる西瓜を。伊藤君よりは美しき夏菊をめぐまる。下婢の家より柏餅一重おくりくれしは。七

夕の宵節句なればといふなり。是も故郷の風味の外ならず。石崎氏にては笹かざりも出来てゐたり。夕べいと涼しく。つく／＼ぼうし後ろの梢に鳴きぬ。行水すれば膚ひやつくほどなり。

ふるさとの秋の夕風かくばかり
身にしむものと思はざりしを

夜は石崎庄吉君の招によりて。灘屋にゆく。廿日。曉に降りりと見えて庭石ぬれたり。清家節君持参し來りて鰻をおくれり。曰く。これは我家の近くにて捕らせたるを。みづから焼き調じたるなりと。名物にも優れる友の心づくし。あゝ何事も故郷なりけり。

客去り客來りて今日もいそがしかりしが。すこし靜になりて。濱にいづれば。夕雲の影うすべに色に流れて。何となく星祭る頃のけしきぞかし。

むかしわが硯あらひし水の面に

うかべる星のかずもかはらず

石崎忠八君の使とて。小女二人きたりて急ぎればせといふ。至れば舍弟の東京に立つ送別の宴とて。はや來客は堂に満ちたり。中に実戸元寛君といへるは。わが幼かりし頃。和歌の道に。俳句の道に。畫の道に。行きかよひては教を受けたりし先輩なるが。酔の進みに。隔てぬ昔語互にくづしいで。大和田君が提灯屋然たる畫をかき

て見せられたる事。今思ひ出すさへいと可笑しといはるれば。歌の題に戀といへるは。如何なる事ならんと質問して。君を困らしまゐらせたる事もありしよとて。大笑になりぬ。

大雷大雨あり。ぬれて歸らんとせしに。僕は傘と提灯ともて。追ひかけ來れり。

廿一日。雨垂の音軒にあり。起きて戸を開けば。川蟬うつくしく影みえて。池より飛び立つ。

正午より大小會の會合ありとて。石崎氏に招かる。雷雨けふも時々あり。

廿二日。秋晴ぬぐふが如し。日の出でぬ先にと。新田を

散歩しつゝ御堀下に出づ。田中に作れる蓮白く咲きて。水鶏の聲かまびすし。此あたりに人丸の社ありしが。今は失せぬ。

かなたより八十ばかりの老婆。風呂敷包を持ち杖つきて來りしかど。溝一つ渡らんとするに。橋なくて困りぬたりしかば。手を取りてまたがせやりたるに。喜ぶ事甚しく。兩手を合はせてこそ拜みたれ。

ふるさとの老木の櫻ちはやぶる

神代のこと問はましものを

朝飯すましてのち。実戸伯母上を訪ひまゐらせたるに。病み臥しておはせど。御おもち嬉しげにて。むかし今

の物語し給へり。今日は約束なれば。小梁川翁の山莊にいたる。眺望うち
はれて風いと涼しく。池には三十五疋の龜むれて。浮む
もあり沈むもあり。岩の上に脊を干すも。土の上をある
くもありて。人々おもしろがる。集まりたるは隔てぬど
ち五六人なれば。何となく野遊などに來りたらん心地こ
そせらるれ。翁曰く。先生は三年前にお下りとの事なりしかば。せめ
てもの御もてなしにもとて。鯉一つ池に飼ひおきたるに。
つひに其事流れて今日は三年になりぬ。流れたるは口を
しかりしかど。鯉の大きくなりたるは幸なりしとて。四

手網もてすくひあげられたるを見れば。二尺もあるべし。
黄金の鱗をきらめかしつゝぞふためきおたる。間もなくあるじの庖刀にかゝり。刺身となり味噌汁とな
りて膳の上にあらはれいでしを。今日のは糸づくりなら
で。鯉の縄づくりなりなど。戯れらるゝあるじの謙遜。
時に取りての一興なりかし。年を経て井桁を切るも釣瓶繩
夕方客去りて。翁の一家とおのれとなりぬ。涼しく暮
れゆく青田の遠近。煙なびきて鳴子など聞ゆるに。うし
ろの藪より月も昇れり。

夜に入れば鉦太鼓ひびきて。あまたの松明。行列立て、あちこちより來れる。花よりも美し。稻の虫追なるこそ嬉しけれ。つひに古城山の麓に集まりて。一つに燃やせば。焰は空まで照らして。山さへ木さへさだかに見ゆ。思ひもよらざる御馳走にもあひたるかな。月影にかくられて上を下げば。翁も子息と共に語りつ、來らる。程遠からぬ小林氏に宿る約あればなり。廿三日。明くるを待ちかねて來の村まで散歩す。小田の中道露ふみゆくもいと涼し。三島神社の拜殿には。をさなゝじみの川中島の繪馬など一つもあらで。日清戦争のみ二つ掛かれり。

此社の祠官越智君を訪ひて。歸りには路を寄松村に取る。今は世になき都築花守翁と。雨を侵して松虫きゝに來りし家の。門の前など打ちすぎたり。軒に垂れたる柿の木ならでは。知り知られたるあるじも見えず。晝飯は。昔し父上の召仕ひ給ひし男の家にて。振舞はる。今は榮ゆる骨董店の主人にて。二階すゞしく。海よく見ゆ。夕かたは今日も小梁川氏にて語りつゝ涼む。垣の苦瓜。畑の唐芋。母上の御手づから盛りて給ひし風味にも似たり。廿四日。散歩は日課のやうになりて。今朝も三人打ちつ

れ小林氏を出づ。螢草など摘みつゝ、惠比須山の麓まで至りしに。日影やうく暑くなりたれば。海を渡りて歸らんとすれど。舟なし。海士の苦屋に綱すきぬたる翁を見つけて頼みたれば。たやすくうけがひて。此破れ舟にてもよくは召さるべし。たゞし道にて沈みたらば。皆さまにておよぎ給ふも涼しからんなど。戯れ言ひつゝ、櫓をさしのべたり。齡を問へば八十三なりと答ふ。十時よりは。丸の内の西村氏に。昔の門人たちとあつまる約ありてゆく。此家は祖先以來すみならしたる我家なりしを。今は客となりて來れるなれば。何を見るにもなつかしからぬはなし。父上と共に月見たる窓。妹と共に

西瓜提灯もちあそびたる板椽。我ならでは。誰ありてか又其歴史を語らん。

住みすてし庭の秋萩あき風に

とはれて物や思ひ出づらん
あるじは守雄とて。鬼事かくれんぼの遊び友だちなりしが。後はおのれに就きて國學などまなびたる人。盃もめぐりたる後。かきていだしたるは。

見る毎に色こそまされ故郷に

かへしす。かさねてかへる君がにしきは

眞萩原わけし袖を故郷に

かざる錦と人や見るらん

夜は宇都宮氏に招かれたるに。席に芝平内といふ老人あり。若き頃。父上より謠五六番習ひたる事ありしよし語る。思ひいづれば。おのれに鍾馗の畫などかきくれたりし。伊三郎といひしが兄なりけり。

夜ふけて歸れば。月霜の如く。豊後橋の土手には松虫きこゆ。

廿五日。隣の翁は蝦夷菊二えだくれたり。白きと薄紫なるとを。

客去りて夜なかばならんとす。踊の太鼓の山彦かへして響き來たるは。新田のあたりなるべし。

秋風のこゑより外に亡き人と

廿六日。朝とくより墨すらせて。頼まれたる歌あまた書

く。盆の十三日とて。餅や蕎麥やとおくられたる物多し。

日も暮れて門に出づれば。泰平寺山に燈し連ねたる盆燈籠。いとあざやかに見ゆ。空は清く月は白し。あまりの

昔こひしさに。客はあれども。時々いでゝながめわたすも。童めきたりと人や思はん。

ともし火の影に今宵は亡き靈も。隣むかしの秋や語りあふらん

寝んとするに。隣の翁。門前の濱に蒔敷きたれば。涼み

給へといふ。時すでに十時を過ぎたり。

宵に見し火影は消えて寺山の

さびしき月に秋風ぞ吹く

波おだやかにて疊の如く。月の光のみ花と散りては。又鏡となる。

廿七日。こゝかしこの墓詣せんとして。まづ龍光院なる妹しづをのより始む。初盆の墓には。切籠燈籠や岐阜提灯やと。美しく飾り装ひたるが多く。童なりし頃に比ぶれば。是さへいたく奢りて來れるやうなり。さはいへ。いづくもく。女郎花桔梗千日紅など。花筒にさしはやし。美しく見わたさるゝ間より。線香の煙薄く濃く立ち

のぼるは。物心ぼそからぬかは。

しづをの墓には月見草を手向けつ。

もろともに月みし秋を思ひいで

花を折るにもぬらす袖かな

けはしき山路を上り下りせしが爲め。汗は羽織までも通りたれば。暫く休まんとて山本いほ子を訪ふ。おめづらしやとて心ふかくもてなすさま。三十年一日の如し。長男は中學校にゆくとして。色くろくぐと丈夫らしき體格。絶えず母を助けつ。我をうしろの方よりぞ打ち扇ぐ。次なるは女にて十一二なるが。出つ入りつして忙がしげなれば。何故ぞと問ふに。今日はお夏めしにて。氣は氣

にあらずといふ。げにも盆にはお夏めしとて。女の子供は。米野菜など持ち集まりつゝ。煮たきをしては互に配り合ふ事のありけるよ。三月の雛遊と共に。女の子には意味ある風俗なりかし。

野川を川づたひに登りて。龍華山なる家の御墓に詣づ。木の葉一ひらだにこぼれてあらぬは。墓守と頼みたる人の心ふかければぞかし。

女郎花はなさく秋をかなしとも

おやある人は知らでやあるらん

歌よむわざを勧め給ひし。宍戸伯父上のも此寺にあり。しをりせし君なかりせば言の葉の

花さく山も知らざらまじを

なほめぐりくゝて宿りに歸れば。夕暮になりぬ。泰平寺山の燈籠やうく美しくならんとすれば。他の寺々のも共に見んとて豊後橋までゆく。まづ高く仰がれたるは太超寺山。その右なるは光國寺妙典寺法圓寺などの墓地なるべし。橋の上風いと涼しく。蓮のにはひ一かたならず。同じくは潮音寺より選佛寺西江寺などのも。見まほしきものよと。堀に浴ひつゝ二三町ゆけば。残らず一目に見やられたる美しさ。螢にやたとへん。星にやたとへん。亡き數に入りたる友の手向ぞと

おもへば悲しともし火の影

今夜はまた灘屋にて宴會あり。膝を交へて文を談じ謠をうたふ。廿八日。芭蕉ぬれて雨しづかなり。されど暫くにして止みぬ。正午より灘屋にて。おのが爲めに開かれたる送別會あり。其人々は五十人にも餘れりけらし。隔てぬ中の酒宴なれば。嬉しさと名残をしさとにて。時の移るも忘れたりしが。舟の用意よければいざ來れといふ。今宵は石崎氏の惠比須山の別莊にて。盆踊見んの約あればなり。酔のまぎれに。皆々人におとらじと。舟子を助けて櫓を押しつれつ。おくれ先だち。鬨の聲と共にゆらめきゆ

く。愉快限なし。夕日はやうく光を收めて。まさに九島のあなたに隠れんとす。先がけたりし舟は早くも着きて。既に別莊の山道をうねりく登りゆくさま。蟻の榮螺に附きたる如し。撥も揃はぬ太鼓の音の響きいでしは。先登第一を報ずる人か。別莊は山の半腹にありて。海を隔て、住吉山と相對し。樺崎にかゝりをる漁船の燈もやうく光を放ち。山の松くろく暮れそめたり。東には城山。鶴の首を波に横たへたる如く。其左には泉が森の峰。手に取るやうに見渡されて。月はや其いたゞきより。白がねの雲を先だて、昇り出づるを。別莊の木

の間に掛けてながむるこそ面白けれ。籠は近頃さかえたる海人の村里なれば。見おろす燈の光。また疎くしもあらず。間もなく漁民ども集まり來たれば。まづ酒を飲めとあるじ命ず。是も大茶碗などなれば。早くめぐりて直ちに始めつ。舞臺は廣やかなる芝生にて。四方には高張提灯あまたともしたるのみかは。月の光ひるよりも明ければ。土はふ蟻の足さへ數へつべし。一人撥を兩手に差しあげつゝ大太鼓を打てば。一人は小太鼓を。一人は叩鉦を片手に持ち。踊りては打ち。打ちては踊る。其聲。ドンドコドンドンドン。チヤンチキチ

ヤンチヤンチヤンと聞ゆるなり。唄はあれども聞き取れざるこそ残念なれ。踊手は十人ばかり一列になりて。扇を持ち又は四手しを持ち。身をねぢらし又腰を振り。兩手を隙なく働かして。すぢりもじり踊るなり。其面白さ何にか譬へん。嵐の落葉か。早瀬の波か。むかしは盆の三日の間。城下の家々を踊りめぐる事なりしが。維新の後禁せられて。其事たえたり。戸島より出づる例なりしが故に。戸島念佛と稱へたりしに。今は此土地。すべて石崎氏の所有に歸して。戸島より移住せし漁民多きが故に。踊もこゝにうつれるなり。されど若い

ものは傳習せざれば。老人ならでは知らずといふ。いかに惜しき事ならずや。數番ありてのち娘の踊りとなる。七つ八つより十九二十ばかりまでなるが。みな新しき手拭をかぶり。今日を晴と出で立ちたる浴衣姿にて。ヨウホイ／＼の掛聲につれ。輪をなして踊りつゝぐる／＼と廻る。唄のこゑ太鼓のおと。昔おもひいでらるゝ嬉しさよ。踊る娘は。是も扇または四手管笠など持つなり。始は五六人なりしが。遂には二十人三十人の多きに至りぬ。其手の軽さ。足ぶみの拍子よさ。いかでかくまで稽古のと。誰も／＼口々に譽む。

海のあなたの大浦よりも。清家節君の心づくしとて。四十人ばかりの踊子を舟にて送れり。是も連合して踊る中に。十五六なるが十人ばかり。殊によく揃ひて見えしかば。今少し踊らせばやと思ひしに。夜ふけぬ内にと。暇を告げしこそ惜しかりしか。よんべ見た子の又見たき踊かな。とは誠。十晩二十晩かさねたりとも。かゝる見ものは飽くまじきものを。酔もめぐりて此山を下れるは。三更なりけん。月ひとり金の鱗を波打たせつゝ、廣々としたる海原に遊べり。

月かげに靡く薄の並み立ちし
をとめの姿いつか忘れん

廿九日。門を敲きて小林氏より使來れり。是をとて出だすを。蓋打ち開けば。漬けたる茄子の色桔梗よりも美し。美しきは獨り其色と味とのみならめや。今日は宇和津彦神社に。神樂を奉納する事ありてゆく。事の起りは。此地に一種の優美古雅なる神樂ありて。伊豫神樂と稱へ來りしが。近年久しく中絶せしを。おのれいたく嘆きて。再興論を唱へし事もしばくなれども。行はれざりしに。神の御心か、人の思か。二三年このかた。遂に昔を見るやうになりしと聞くが嬉しければ。見知らぬ人にも見せばやとて。かゝる企はなしつるなり。神官には毛山越智渡邊久保。氏子には清水石崎玉井菊地

松本二宮の諸君ありて。わが志を助け。力を盡されたること一方ならず。童遊に神樂を真似して。共に遊びし穂積君さへ。幸にも奉納者の一人となられたりしこそうれしけれ。案内を受け。又は聞き付けて參詣せし人。土居郡長田村檢事を始として山の如く。拜殿の上下左右。立錐の地をも餘さず。太鼓の音こだまに響きて。幕の陰より舞人のあらはれ出でたりし時は。岩戸のむかしも思ひやられて神々しなどは世の常なり。持ちて舞ふには。幣あり。榊あり。扇あり。弓あり。太刀あり。長刀あり。旗あり。盆あり。松明あり。四手しよてと稱へて。長き竹の兩方に細かく切りたる紙を附けたるも

あり。装束は能に似て。面は東京の三十五座より今少し品よきものを用ふ。歌は一段づゝ終りたる間に用ひ。名づけて神祇歌といへり。

おもひつる事はかなひぬ神よ猶

この道まもれ千代に八千代に

全く果つれば。龍華山の鐘。入相を告げたり。名残をし。待ちわびたる日も別になりぬ。夜は舞人慰勞の宴を催すとて。なほ社務所の奥座敷にあり。更けたれば毛山氏に泊る。

三十日。朝の程ふりたる雨。十時頃はれたり。昨日の神樂に關係せし人々と共に。社頭の石段にて寫眞す。おの

く職服を着する事と定めて。神官は祭服を。軍人は軍服を。辯護士は法服をなど。中々興あり。

夕方は新造の第六宇和島丸運轉式とて。招かれたれば。お濱より舟にて行く。石崎毛山伊藤玉井の諸君と共なり。宇和島丸は樺崎に居て。七夕竹めきたるものを立て。吹貫を靡かし旗を翻し。酸醬提灯を數珠のやうに掛け連ねたるが。波に映じて。平家の舟装せしもかくやと思はれたり。陸にも同じ飾りしたりし其下蔭を。賑みんとて。幟のやうに並みゆく人々。舟よりながむるも一つの見ものなり。打上花火は隙なく響きて空にあらはる。委員の人々に導かれて。厚き響應を受けたれども。暑さ

の堪へがたさに。扇おくまもあらざりしが。つひにブリッヂの上の四階なる處を見いだして。清水君こちへといふ。火の見櫓ほどの廣さなれども。五六人をも容れつべし。月も出で、今までにかはれる涼しさ。さすがは海の上なり。花火ますく面白く。時々話をとぎらす。

波に浮ぶ火かげ美し古の

すみよし祭みる心地して

卅一日。雨となりぬ。今日立つ事を新聞にて見たりとて。土産など持ちて訪ふ人宿りに満ちぬ。深情謝すべし。新聞何をか聞き違へつらん。

泰平寺に堀江伯父上の御墓詣です。堀江家の絶えたりし

より。今までは誰も草掃はする人なかりしを。此たび宇都宮とおのれとの兩家にて。世話する事に定めたればなり。老僧いで。私は此寺に小僧の時より五十年も住み居るとて我知らぬ事まで物語り出づ。佛壇には線香の煙たえぐくに立ちたり。

宿りに居ては客多ければ。小林氏にゆきて。頼まれの絹など書かんとて。寺より直に物しつ。二宮菊地の二君きたりて。硯を運び墨をするなどの勞を取れば。家の乙女は水など持ち來れるもうれし。

夜に入りて歸らんとすれば。雨つよくして道は沼に似たり。

いつしか九月にもなりぬ。明日はいよく立たんとするれば。來客に接し。親類を訪ひ。母上の御墓に暇を告ぐるなど。終日いそがはしくて暮れたり。

なごりをしくも石崎忠八君の別荘にて。今夜は語り更かす。妻の君盃もちいで。來ん春は必よなどいはるゝも。涙の種なり。

二日。曇りたれど風なし。住みなれたる城山の麓を別れて。第三宇和島丸に乗る。數十の人々。小舟を並べて送り來れり。あはれ樂しかりしも過去になりぬ。惠比須が鼻の岩打つ波よ。又來ん日まで健康なれかし。時刻きたりて。舟の室には我のみ残りぬ。漁笛は心なく

響きわたるぬ。甲板にいづれば。既に三四間も離れたる小舟の人々。一同帽子を振りて萬歳を呼びたり。時に一時三十分なりき。

ふるさとの高嶺の空に唯ひとり
たゞよひのこる雲のさびしさ

日頃のつかれ出で、よく眠りたるに。雨いみじく降ると。ボーイ來りて戸をしめなどす。お鼻の難所は來れりやいかに。

夜も半過ぎて佐賀の關に着きぬ。陸に燈火二つ三つ見え。波の上あつからず。あくれば三日。雨やみて日いでたり。朝飯の來れるを見

れば。皿には竹輪。汁には夏芋あり。海老の殻の附きたる宇和島海苔も。名残と思へば心細し。かねて約しおきたる伊豫日報への。文章かゝんとして矢立の筆とる。室靜にして我外に人なく。窓よりは自然の友なる海と島とをながめ。かたはらの火鉢にはたぎれる湯もかゝりおたり。波さへ荒れずは。心地よきは舟路にこそあれ。

三津が濱もいつしか過ぎて。來島くるしまの瀬戸にさしかゝれり。畫に見たるやうなる水鳥。燈明臺のあたり高く低く飛ぶ。其日もくれて。高松につきたるは十時頃なりき。月一つ屋島の上にある。

射ちぎりし扇のゆくへ何くとも

しられぬ波に月ぞたゞよふ

四日も明けたり。寐すこして驚きおくれれば。見んと思ひし淡路島も夢の間に過ぎて。舳先に立てるは。早くも神戸の諏訪山なりき。のこれる火影はなほ明方の星に似て。林なす帆柱の間に我舟は入りぬ。

大阪に着きて陸にあがれば。秋の色すでに。女郎花賣る翁の肩にあり。おのが庭のも咲きてやあらん。散りてやあらん。

家に歸りしは又の日の夜。見しや夢。さめしや夢。故郷は又もや三百里のよそに離れぬ。

我やどは昔なりけり玉くしげ

くれし乙女の身にはなければ

雑の歌

十首

新

咲きそめしはちすの花に風のまだ

知らぬ露こそ置きあまりけれ

舊

ふるさとの野寺の佛名をよめば

半むかしの友にぞありける

高

皇孫すめみまの天降あもりたまひし高千穂の

くじふる嶽に雲かゝる見ゆ

低

見おろせば裾野の原に若葉つむ

をとめは蟻の大きさにして

遠

ちりひちのつもりはじめし古を

おもへば遠し富士の高山

近

寐ながらに秋の頼みを語りあふ

隣むつまし賤がやまざと

泡

なげくなよ空しき水の上にだに

結べば結ぶ泡もある世を

影

何事もたがひがちなる人の世に

わが身はなれぬ影もありけり

極樂

露の身を玉とみがきて來ん世には

蓮の花のうへに生れん

地獄

身をせむる心の鬼は三瀬川

わたらぬ世にも住まぬ物かは

初茸狩

稲は何くも色づきわたりて。 漁車の内。 豊年の話ならぬ

はなし。 名もなき道の小草まで。 秋おもしろく咲きいで

たるをながめつゝ。 千葉佐倉など打ち過ぐる程に。 日は

暮れたり。 月あらば興更にそひぬべきを。

暗なるはなほよし。 雲かさなりて雨景色なるを如何にせ

ん。 されども道のかたへには。 鈴虫も鳴きぬ。 轡虫も鳴

きぬ。 美しき石炭の火花は。 螢となりてぞ飛び亂るゝ。

成田にておるゝ人。 我外にもいと多し。 宿屋よりは女い

で。口々に宿れくと呼ぶ。おのれは茸狩にとて。招
 かれたる石井氏に至れば。いたく歡びてもてなさるゝほ
 どに。夜も更けぬ。あるじは謠好む人なれば。吟じつゞ
 けて餘念なく。わが教子なる乙女子は。歌書など廣げて
 筆もてあそぶも。旅寐おぼえぬ夜半なりけり。
 まどろむ間もなく夜は明けたるに。思ひきや庭の飛石ぬ
 れるならんとは。糸の如き雨は。今なほ薄に玉を貫かせ
 てぞ降りぬたる。口惜しとも口惜し。
 さはいへ此町に來ながら。不動尊に詣でずして歸られん
 やとて。乙女子うちつれて出づる程に。降りやみぬ。寺
 はまだ靜にて。店の物買ふ參詣人もなく。やゝ黄ばまん

とする梢の色こそ秋めきたれ。
 おりのぼる鳩の羽風に寺山の
 秋の葉ひとこぼれきにけり
 うしろの山に登りて。梅の木蔭に。散りにし春の面影を
 忍ぶほどに。御堂には笙筆策などの聲おこる。ゆかしく
 て急ぎゆかんとするに。雨また降りいでゝわびしければ。
 名残をしくも聲きゝながら。石段を下る。乙女子に問へ
 ば。御護摩の始まれるならんといへり。
 石井氏より丁稚きたりて。雨傘を渡しゝかば。わが蝙蝠
 傘と取りかへたるに。雨また止みぬ。定めなきは。今の
 世の人心のみかは。

させば晴れ疊めば又も降りいで、
傘もてあそぶ秋の雨かな
いかにくくと。空ばかり仰ぐほどに。眞晝にもなりぬ。
ぬれぬとも山わけ入らん今朝の雨に
かさ打ちひろげ待ちもこそすれ
思ひ立たずやと促したるに。あるじ心よく賛成して。車
を命じ辨當を詰めさせなど。早くも用意は整ひたり。お
のくぬるゝ覺悟にて。湯かた足袋はだしの輕き装とな
り。車におくられて町を出づ。
小さき籠に檜の葉を敷き。初茸五つ六つ入れたるが。柿
栗と共に店に並びたるは。今日の得物の標本めきて。先

づ頼もし。鎌と籠とを手にくく持ちて。かなたより來る
は。先鞭つけたる朝山の歸りか。木犀なつかしく。何く
よりか風にかをる。
一里半ばかりも行きて。森の下道に入る。薄はいやが上
に生ひ茂りて。露いと多く。雨ますく暗し。車をおり
て搔き拂ひつゝゆけば。氷よりもつめたき車は。時々
楠よりこぼれて顔を打つ。
石井氏の心やすくする一軒屋を訪ひて。初茸狩に來れる
よしを語れば。あるじの翁は。雪より白き髯を撫でつゝ。
まだ十日も早かるべし。されども今日山に入りて。檜茸
を大笹に一つ取りて來つるものもあれば。何かは取るゝ

ならん。などいふ。樗茸とは如何なる形したるものぞと問へば。其嫁なる人。茄子と一つに煮たれば。色は黒けれどとも召しあがりてよとて。皿に煮つけて出だしたり。しめじに似て味やゝ淡く。齒切れ極めてよし。さらば行きて見んとて。更にぬるゝ仕度をなし。手に手に籠と鎌とを携へ出づれば。かの翁さしづしつゝ。汝もゆくべし貴様もゆけとて。嫁も娘も案内者として附けられたり。我等四人に。車夫まで加へて十一人の同勢。鼻唄うたひつれつゝ、雨中の茸狩をなさんとす。勇氣は凜たり。松の下露も物の數かは。栗林のかなたに響きぬ。さて有つたといふ聲。はやくも栗林のかなたに響きぬ。さて

は先んせられたりとて。急ぎ野菊を踏みしだきゆけば。こゝにも一つといふ聲。又もやうしろの方より響く。初茸こゝろなし。などてか我ために居所を告げざる。薄紅の光みつけて取らんとすれば。雨にぬれたる落葉なりしも悔しきに。我ふみすてたる跡をさがして。乙女は二つぞ見いだしける。おくれじ我もとて。一つを籠に入れんとせしに。そは食はれぬぞと。笑はれし時の腹立たしさ。かゝる菌は。我ゆく道に立ち居らずしてもあるべきに。さはいへ。あさりくゝて五つ六つは取りたり。今は日もやゝ暮れんとすれば。心は残れど。いざなひつれて。又

かの一軒屋に歸りぬ。雨しづかに烟りて。庭の柿の實のぬれたるも美し。歸るさは夜に入りて。道もいとあしく。互に押しつ押されつして。車の進みも早からず。町につきたるは八時にやありけん。客よぶ女の聲も今宵は聞えず。店の燈のほのぐらきが。ぬれたる道に影を散らせり。歸りて今日の得物を并べ見たれば。大きな箕と。大廣蓋を満たすだけの數なりき。さるにても乙女の片腕にだに。及ばざりし事の耻かしさよ。又の日は曉に起きて。一番の瀛車に乗らんとせしに。出でゆく煙を。目の前に見ながら後れたり。雨は寒し。次

の發車には時間あれば。眠れる茶屋を敲き起して。暫く休む。烟は竈より登りて。茶も湧きたるさまなれば。朝飯あつらへたるに。初茸の羹そへて持ち出でたり。是も名残のもてなしとやいほまし。瀛車からうじて出でぬ。見かへる岡山松おほし。又こん秋もと。石井氏のいひしはあのあたりならん。をとめ子が折りてくれたる山里の木の實に秋のいろは見えけり。秋の色。秋の聲。いたるところに我を待てども。昨日の樂しさくりかへすは。又いつの時にか。

大磯の海

相模の學生の集まれる湘中義塾の開塾式を祝ひて。

相模なる箱根の山

相模なる大磯の海

その海の廣くゆたけく

其山の高く尊き

日の本の大和心を

國の爲めきはめつくして

相模川ながるゝ水の

潔き名をし立つべし

此宿に來入り集まる

ますらをのとも

節分詣

人のよくする成田不動の節分詣。おのれも今年はじめて
 せんとて。其前の日に成田町の石井氏に行きぬ。石井氏
 は町の舊家にて。不動尊の寺なる新勝寺とは。殊に由緒
 深く。年々の吉例として。節分の豆は。五斗五升づゝ此
 家より煎りて納むると云ふなり。
 家に少女ありて和歌の教子なれば。着きたる夜と次の日
 とは。此頃讀み居るといふ平家物語の質問を聞き。詠草

文章の添削などしつゝ徒然ならず。暮れて後湯あみし。豆まきの式は夜の二時なりといへば。暮れて後湯あみし。寺より贈られたりといふ。精進料理のもてなしにあふも。心すでに清まりたる様なり。今宵の豆を拾はんとて遠近より詣づる人々。何千をもてか數ふべき。瀛車の着く毎に潮の満ち込むが如く。車を並べ旗を立てなどしては。町に入り來る。成田町百二十軒あまりの旅人宿は。暮れぬ内から。客どめの札を出だす程なりとぞ聞く。一時も過ぎたれば。いざとてあるじの案内に従ひ。下部に提灯もたせて行く。外套も羽織も脱ぎ捨て。浴衣を

上に引張るが習なりといへば。いはるゝまゝにしてゆくに。夜風身にしみて寒さいはんかたなし。さはいへ山寺のかたを見れば。ともし火の光晝の如く。物賣る聲。石段のぼる音。いさましさを又たとふべからず。御堂は四面みな戸ざして。提灯ふりてらしつゝ警官あまた之を守護し。雑沓を制し非常に備ふるさま。さながら火事場にや似たらん。おのれは特別の切符を持ちたれば。後の口より入らんとするに。巡查五六人して一つく之を改め。細目に扉を開きてこゝより入れいふ。猫の如く鼠の如く。辛うじて巡查の袖の下よりくゞりぬけ。廻りて本尊の前に出づれ

ば。さしもに廣き御堂の内も。針一つ立つべき餘地を残さず。珠數押し揉みつゝ不動經打ち誦する聲は。次第に同音者の數を加へて。雷の如く響き渡れり。並びたる頭の數を。三百まではかぞへたれど。その上は知らず。仰ぎて内陣を見れば。香の烟くゆりわたりて。花の如き御あかしの影に。威ありて猛き不動明王の御像は。右に劍。左に索を持ちてぞ拜まれ給ふ。その寶前には護摩壇ありて。五色の蓮華を立て。餅飯など供へて準備至らざるなし。護摩木いと白く打ち積み置かれて。相圖の鐘を今や遅しと待顔なり。時刻やう／＼に來らんとす。一方の口を開きて。尋常の

切符あるものを入れんとするに。あたかも穴の狭き箱より金米糖を振り出すが如く。轉び込むは一人づゝにて。穴の外を襲ふもの。水の漏斗じょうごに押し入らんとするに似たり。外にてあぐる閨の聲。内にて漏らす苦痛の聲。いづれも慈眼じげん視衆生しゆじやうの同じ信徒なるを如何にせん。合圖の鐘の音響きわたりて。大波打たする群集の一方を掻き分け。讀經の僧は。麻上下きたる十一人の年男と共に。まるばさるゝが如くに入り來りぬ。笙筆しやうひつの妙なる音樂は湧き出でぬ。御堂の外には早くも豆まき始まりぬと見えて。一の谷の落城もかくやと思はるゝばかりの聲きこゆ。内には護摩の焰晝よりも明く。衆僧しゆそう勤行ごんぎやうの讀經

今しも春の來れるを告ぐるなり。間もなく年男どもは。三方に一升櫛のせたるを脇に抱へつゝ立ちぬ。すはとて騒ぎ立つ人々。いざ拾はんとして詰めよする人々。包圍攻撃の砲聲一時に起りたるも。之にや過ぐべき。飛び來る豆は彈丸よりも繁く。鬼は外の聲は呐喊よりも烈し。立ちたる人は股をくゞられ。坐したる人は肩を踏まる。足もとに落ちたるを取らんとして身を屈むる間に。早くも人に奪はれてつぶやくもあれば。思ひもよらず懐に入り來て。たやすく得たりと喜ぶもあり。おのれも勞せずして。胸に來れるを一つ受けとめたれば。

運こそよけれと。少し退きて打ち休まんとすれど。右にも左にも出づべきやうあらず。我手も胸のあたりに屈めたるのみ。伸ばす事だにいとかたし。あはれ此さわぎよ。抑々如何なる運を求めんとての望ぞや。富貴か壽命か。さては名譽か。一粒の豆。數分間の汗。もろくの厄難を拂ふの御利益あるこそ有難けれ。暫くにして式をはり人散り。嵐の吹き過ぎたる後の如し。いざとて本尊に別を告げ。出で、寺山を下らんとすれば。木の間の星影梅の花よりも白く。石井氏に歸りて聞けば。此家の二番鳥。今しも鳴きたりといへり。

雪の恨

凍死兵士の母にかはりて。

朝夕に向ひ馴れたる

八甲田の峰の白雪

千重八千重つる恨の

仇としも思はざりしを

行きし人生きて歸らず

歸りし子又も語らず

大丈夫の草むす屍

國の爲め捨てん物とは

反歌

見る毎に恨は深し降りつる

雪も幾重の遠の山の端

消えし身の命のつらさ

同じくは鷺の住む野に

血をば染めずて

劍太刀手にも執らずて

攻め圍む仇と戦ひ

かねてよりをみな我身も

物の書よみて知れど

黄なる筋入りし冠に手をあて、

さらばといひし人は歸らず

立ちながら煙くゆらし出で、行きし

我子のおもわ面影に見ゆ

玉くしげ三年は早しまさきくて

待てといひしは現なりしを

金毘羅まゐり

いとこなる人の。金毘羅まゐりせずやといふにさそはれ
て。思ひ立ちたるは。十七の年の春なりき。我里よりは
陸路およそ五十里。花見つゝ鶯きゝつゝ。疲るれば心の

まゝに休まんとする旅路の楽しさ。生れて始めて知り得
たるは。此時にこそあれ。三里ふへる山登り来て、
家に父あり母あり。無事にと宣ふ御聲を耳に残して。別
れ來ぬれば。ふりかへり見る城山の松も。其御おもかげ
に霞みわたりぬ。一夜の程だに別れし事なき。家の空な
ればぞかし。
見返坂をこえて。大浦といふあたりを磯づたひし。吉田
の町に出づ。こゝまでは亡き祖母上などゝ。祭見物に來
りし事もあれば。昔いと戀し。
法華津といふ嶮しき坂路にかゝる。我家につかひたる男
の。この山をえにて俄に病おこりて。身まかりしといふ

物語かねて聞きぬたりしかば。此松かげのあたりにやな
 ど思ひつゝ。登り行く程に。雉子の聲右にも左にも聞え
 て。心おのづから慰めらるゝやうなり。いとこはいへり。
 初日から。あまり元氣を出し過ぎては疲るべし。今少し
 ゆるりと行かずやと。此時おのれは十三四貫にも足るま
 じき程の身なりしぞかし。

卯の町を過ぎて東多田ひがしたといふを行く。我宇和島領の境な
 れば。昔は關所のありたる處。歌の師とせし穴戸千建大
 人も。こゝを守られたる事ありしと聞けば。なつかしき
 心地しつゝ。早くも鳥坂とさか三里といふ山道に來りぬ。道の
 かたへの芝生には。堇紫に咲き満ちて。空は晴れたり景

色はよし。寐ころびても行かばやなど思ひし事。夢にも
 あらず。

大洲の城下までは十里なれども。日高く着きたり。肱川
 といふは。船橋なりしやうにも覺え。こぎて渡りたるか
 とも記臆す。宿りしは川のあなたなる中村にて。巽屋と
 いふ家なりき。今日は祝事ありとて小豆飯をすゝめつゝ。
 あるじの妻にや出で、何くれと物語りす。國を出でたる
 事も。宿屋に泊りたる事も。是までなければ。見る物聞
 く物。皆神代なり。今朝までも若旦那とのみいはれたる
 身の。俄にお客はんくと呼ぶるゝを。「おい」といはん
 か。「はら」といはんかと考へ居る折しも。隣の座敷にて

は皆々「へい」「へい」とぞいふなる。次の日も空うらゝかなり。見渡す限。菜の花に咲き埋められたる處を行く。珍らしさ面白さ。足の疲も忘れはてたり。若宮といふあたりにやありけん。新谷内子にんやうちのこなど過ぎて。中山三里を越え。郡中ぐんちゆうといふに宿りぬ。家の名は忘れたり。此町に入る折しも。かなたより走り來るものこそあれ。人力車とはあれなりと。いとこは教へつ。此時實に我里にも大洲にも。すべて此車はまだなかりしなり。乗りたるは女なりしが。前なる赤ゲツトをのけて。誇らはしげに二三軒先の家に入りぬ。是からは處々に是ありといへば。いでや我等も乗りて見

んとて。あるは一里二里など疲れもせぬに乗りたりしかば。後には常になりて。あるくよりはといふ心も起りぬ。奢ほど進歩の早きものはあらじ。其次の日も次の夜も。いかなる道を歩みて。いづくの里に宿りしか。讃岐の和田濱といふあたり。けしきのよかりしことならでは覺えず。山路の茶屋に腰打ちかけて。菓子かと思ひつゝ油揚を手に取り。笑はれたる事もありき。床几ならべて休みぬたる旅人に盃を廻され。いとこに目くばせしつゝ急ぎ立ちたる事もありき。小米櫻の淡雪なして咲きこぼれたる處に。首さし延ばして。岩もる清水を。口に受けたる心地よさと。田中の道なる松の下

枝に籠をつりさげ。施行としるしつゝ。搗餅あまた入れ置きたりし古風さとは。今も猶忘るべしやは。大師めぐりの四國順禮は。老若男女。いたる處に杖つきつれつゝ行く。遠く見れば菅笠の並びたるさま。麩を糸にとほしたるやうなりなど評しつゝ。おのれも口眞似に。南無大師遍照金剛と唱へ行けば。いとこ笑ひて。いつ大師さまの信徒にはなりたると問ふ。かく唱ふれば。拍子に浮かれて足の運びこそいと輕けれ。又一つの御利益ならずやといひしを。かれも賛成せしにやあらん。小溝一つまたぐとて。南無大師とつこいとこそ唱へたれ。金毘羅大權現と昔はいはれ給ひしを。今は琴平神社とて

祭られおはします。其町につきたるは。五日目なりしか六日目なりしか覚えねど。日なほ山の端に近からぬ頃なりき。宿りは虎屋とて。二階には赤の欄干などありて。賑はしきさまいはん方なし。まづ詣でんとて打ち連れ行くに。境内の廣さ。御社のきら／＼しさ。我里の和靈神社をもて想像せし心には。譬へいふべき詞を知らず。さはいへ石段が幾つありしか。石燈籠はいかなりけん。拜殿のさま。神樂殿のさま。おぼろ／＼として。夢よりも猶あはし。只繪馬殿に。濱田彌兵衛の名を海外にあらはしたる處かきたるに。野之口隆正翁の替せられし長歌のみは。すきの道とて今に忘れず。

歸れば土産買へとて。商人ども入りかはり立ちかはり來りぬ。湯にも入り。夕飯も終りて。二人寐ころびつゝ。隣の座敷の物語など聞きおたりしが。其頃は語學に志なかりしかば。方言の聞書もせずして寐入りやしにけん。呼れて見れば床敷き並べて。清き枕も置てありけり。いとこは高松に用事ありて行けば。おのれも行く。更に十里の道なるべし。早乗り覺えたる車にてなれば。苦しくもあらず。着きたる夜は。そゝろあるきしての歸るさ。善哉といふ行燈ともしたる家に入りぬ。物食ふ店に入るは始めてなれば。小さくなりて従ひ行くに。やがて小女膳もて來れり。丸からぬ杉箸一つ付きてあれは。いかに

する事ぞと見ておたりしに。いとこは二つに割りてぞ食ひはじめたる。此時までは。割箸といふ物を知らざりしこそをかしけれ。又の日にや。寫真屋さがして寫しに行きぬ。廢刀の令まだ出でざる時なれば。家に傳はる鳩丸といふ刀は。帯びて腰にありしを。其まゝに物したれば。今思ひても物々るはしき様なるを。寫真師いかにほゝゑみけん。是ぞ我身の寫真は開闢なるを。誰にか送りし。刀と共に手に殘らぬぞ。くちをしき。歸るさは多度津より漁船に乗りて。三津が濱に渡れり。道より流行の麻疹にかゝり。熱いでゝ寒け甚しかりしを。

いとこねんころに介抱して。波止場に手を引き連れ行かれし事。折しも有明の月出で。波にきらめきたる光と共に。猶さだかにぞ思ひ出でらる。漁船に乗りしも始めてにて。乗合の人々。あるひは歌をうたひ詩を吟じ。病み臥す枕元に騒がしく感せられしは。公德などいふ問題の。夢にも知られざりし頃なればにや。航路も今とかはりて。備後の鞆津によりたるに。巡査は邏卒と名づけたりしが。よぼくしたる老人。靴ひかして入り來り。客を隈なく見渡して。検査済とて出で行くを。皆々見おくりはて。一度にとつと笑ひぬ。風采のをかしかりしか。威嚴のとのはざりしか。病苦の中に

も。我もほゝゑまるゝ心地こそしたれ。かくて駕籠にて家に歸りしを。驚き給ふ事一方ならず。父上は醫者をや迎へんなど宣ふかたへに。母上御手づから巨燧に火を入れなどし給ひし事。幾年へても忘るべくもあらず。否それ程の事にも侍らずとて。琴平神社の御札など取り出だせば。やゝ御心おちゐて旅がたりなど聞き給ひぬ。硯の形して。筆さへ墨さへ附きゐたる落雁の菓子。土産なりとて興ふれば。末の妹はいと喜びて手を離さず。妹は幼なかりし折にて知らずやあらん。今語らんとするに。三百里外の故郷にあり。さても我初旅のしるべせしいとは。おのれに唯一つの

兄なりしを。いかにせん。しるしの石ぶみ。苔既に青し。

春の歌 十首

春はなほ浅澤小野の初わかな
 つむ手も切るゝ心地のみして
 曆みぬをとめも春やしりぬらん
 梅さきにけり松の山ざと
 鐘はあれどつく人もなき古寺の
 軒端うづめて梅咲きにけり
 鶯の聲するまでは道のべの
 一もと柳冬木なりしを

子すゝめの友よびかはす梢より
 白玉つばき花ぞこぼるゝ
 土筆つみつゝ半ば來にけり
 花ぐもり雨になるとも知らざりし
 庭の石こそぬれそめにけれ
 池の上に垂れても人のとがめぬは
 となりの花の下枝なりけり
 さきうづむ花の雲間に里宮の
 棟上いはふ歌ぞ聞ゆる
 さくらさく春の心の常ならば

人の命や千とせならまし

木曾路の旅

雨の日のつれぐに。手箱の中を探りたれば。木曾路の旅といふ手帳一冊見いだしぬ。父あり家ある故郷に物しつる折の忘れがたみ。又今更のやうに思ひ出でられて。拙なき處に筆加へ讀みもて行くも。我ながらいと樂し。時は木曾見て歸りしより十五年へたる。明治壬寅の彌生七日。

故郷を出で、より早くも八とせになりぬ。今年は必ずと。父上の宣はするに。木曾路も見ながらと。思ひ立ちたる

は八月始めの五日。雨そぼふりて涼しき曙なりけり。

面影にあすは忍ばん吾妹子が

やどの垣ほの朝顔の花

上野より瀛車に乗りて。緑波うつ青田のおもてなど。見渡しつゝ行く。雨やうく晴れて。蓮の葉の露に。朝日のきらめきたるなど。美しきながめなり。高崎にては乗り替へありて。見る目危き妙義の岩山など見つゝ。横川につきたるは二時三十五分なりき。宿りの家より人々出できて。兩手をのばし。すくひ上ぐるやうのわざをしつゝ。休めくといふ。此地の風にやあらん。雨また降り出で。篠をたばねて突くやうなり。瀛車は

是までなれば。馬車はと問ふに。坂本までならではなしと答ふ。人力車はあれども。とても乗らるべくもあらぬ價なれば。馬車に定めて晝飯もてこさせなどす。干瓢の羹など。碓氷峠も越えざるに。木曾路の面影は早くも膳に浮べり。

馬車は五六人の合乗なるが。此あたりは朝よりをやみなかりしと見え。道いと悪しくて。泥は礫の如く時々はねて。顔を打つだにわびしきに。車は左へ右へゆらめく事甚しく。今昔物語にある頼光の四天王が。祭見に行きたる時の心地して。人々互に額など突きあつる事もしばしばなり。暮にはまだ早けれど。此雨にては峠こさるべく

もあらねば。坂本の萩野屋といふに宿る。

合宿は二間に四人。中の二人は東京品川の人とて。商などするにや。母と子となりしが。今一人は小學教師なるべし。絶えず一二三四など口くせに唱へ。又は螢の光など鼻唄にうたひぬ。

雨はますますく暗く。碓氷峠の山の腰さへ見えす。神なり稲妻などして。明日の山路きづかはるゝ空なり。ともし火も來たれば。する事なさに。人も我も蒲團ひきかぶりて打ち臥しぬ。

みどり子も父のゆくへや尋ぬらん

その面影の見ゆる夜半かな

六日も雨猶やまず。馬車を上田まで約束して。五時に立つ。峠の道は風さへ加はりて。雨いよ／＼急なり。されど雲飛び霧うづまく中を。秋草など見つゝ行く心地。其景色の千態萬狀なるに目もさめて。愉快限なし。

たをや女と名には呼べども嵐にも

たわまで立てる花の雄々しさ

九時頃輕井澤につきぬ。峠こえてよりこなたは。木蔭なく草のみ茂れる原山なり。蕎麥あたゝめてくれよなど皆々いひつゝ。大火鉢を取りまきて休む。さながら時雨つめたき初冬の頃なり。月見草のやうなる花。こゝかしてに咲きたるを見る。

沓掛追分など過ぎて小諸にかゝる。雲深くして淺間山は顔をも見せず。道の邊の桔梗撫子など靡きおたるは。秋の半にも似たり。小諸の町はづれなる立場にて。馬をかへんとするに。其馬俄に病出でたれば。こゝにておりてくれよといふを。怒りてつぶやきたるもあれど。せんかたなければ。徒歩にて立たんとする時。上田より馬車來りたれば。これに召せといふ。さらばとて皆々乗りたるに。馬丁いづこに行きけん。待てども／＼來らず。一時間ばかりありて來りしが。今よりめしくふとて。心ながくも箸持ち始めぬ。其内に馬は綱を放してあれば。馬丁を残して獨りはねい

だし行かんとす。人々驚き追ひかけて引きもどしはしたるものゝ。乗りたる心地は安からず。さる程にめしもすみていざといふ時。馬丁又他の馬丁といさかひを始め。打つやらなぐるやらの幕は開けぬ。さても運のわるき日に乗り合はせたるものかな。是もからうじて事はてゝ。今ぞ蹄の音勇ましく進み行く。二時間もやかゝりつらん。十返舎などにも見せたらましかばと。いとをかし。上田より坂城までは。徒歩にて三里の道を行く。雨晴れて空清し。紅の如き雲。入日の跡に棚引きて。小川の水にうつるを見れば。長倚子の上よりながめたる。昨日の空こそ思ひ出でらるれ。

家人は誰と見るらん此夕べ

花にもまさる雲のけしきを

七日は朝とく立ちて。長野にと志す。千曲川には船橋かゝれり。川中島の故戰場はこゝなりと聞きて。

朽ちつゝもる屍に生ひし種ならん

川中島の秋草のはな

大門前より左に折れて。櫻枝町といふに長坂氏を訪ふ。

こゝにて夕方までもてなさるゝ事ありて。日のやうく傾く頃より。そゝろありきせんとして共に出づ。

狐湯とふい温泉に湯あみして。疲れも暑さも忘れ。心すがくしうなりて善光寺に詣でぬ。聞きしにもまして堂

宇壯嚴を極め。たふとき事二つなし。公園に入り城山に登りなどして。長坂氏に歸れば。おすきのお蕎麥はいかゞとて。刀自の君手づから勧めらるゝ事いと急なり。又もや鼓腹の民になりて。泰平を謳歌しつゝ。二階に設けられたる閨に入りたるは。九時過なりけん。昨日今日は一月おくれの七夕とて。家毎に短冊竹を出だし。晴衣きよそひたる乙女ども道に賑へり。八日は再び善光寺に詣で。靴も荷物も一つに包みて肩に掛け。草鞋がけのいでたちとなりて。長坂氏を立つ。氏は送りて川中島まで來れり。松本街道に別れ篠の井までは昨日の道を跡もどりして。

行く。鹽崎稻荷山など遇ぐるまに。今日は雲もなければ。暑さ苦しき堪ふべくもあらず。桑原といふにて休みたるは。きたなげなる家なれど。既に一時なれば。何かあらずやといふに。豆腐ならばと答ふ。さらば晝飯すべしといへば。書物ならば四六板といふ程の大ききなる豆腐を。十字架あてゝ四つ切となし。井鉢めきたる茶碗に。富士の山程の飯もりそへて。味噌漬の香の物と共に出だせり。飯は赤く黒く黄色を帯びて。譬へやうもなき様したるに。かたき事石の如し。さはいへ。是は後日の評にて。其時の心地は。百味の飲食も物の數かは。

こゝより登れば。馬場峠ばんばといふ三里の坂なり。焦熱地獄。いよ／＼燄を吐き立て、來り迎へんとす。されど花の色々。右に左に咲き亂れて。虫のきり／＼と鳴くさへあるに。梢の鶯も歌をやめねば。苦しき山路も忘れはてたり。こがひせぬ里もなければ信濃路は

虫さへ絶えず機や織るらん

道のかたへの茶屋に入りて。峠は近きかと問へば。なほ二十八丁ありといふ。つめたき水一つ飲ませてよといへば。今汲みて來てとて。薬罐ひきさげ行きたりしが。間もなく茶碗とりそへて出だしぬ。わが飲む水の無きにもあらぬに。はる／＼草葉おしわけ。汲みに行きたりし

心こそ。都には得られぬ賜物なれ。

かくばかりすぐれし水の味を

家なる人に分ちてしがな

又や、登りたるに。名月屋といふ行燈かけたる茶店あり。こゝこそと思へば。まだ半道なりとぞいふなる。外に休みたる人もなければ。上着ぬぎすて。汗とりながらながむるに。遙に見おろさる、風景さながら畫にやなりなん。うねり／＼て流る、川は。庭しきたる如き青田に挾まれ。青田の遠近。村里の煙ゆたかに靡くもあり。うすくこき藍色の山の。霞の内より我を慰むるかと思はる。こゝを出で、やう／＼峠をこえ。又長々と下り／＼て麻

績に着きぬ。宿りはこゝにと。長坂氏は教へたれども。日高ければ。猶一里行きて青柳にとまる。廣き家に客はおのれ一人なれば。静かさ過ぎて物さびし。夕立すこし降り來て。日ぐらしの聲する方より暮れそめぬ。宿帳もて來たれば。附けんとして硯引きよするに。ふつゝかなる羅馬字にて。アチャギと蓋にしるしてあり。長野などより習ひて歸りし。息子の筆だめしならん。九日。霧にぬれつゝ五時半に立つ。それもやうく晴れ行きて。日影は峰に黄ばみわたり。残れる靄の山の腰を打ちめぐるなど。旅の景色は朝こそとやいはまし。西條亂橋など過ぎて立峙にかゝらんとす。休みたる茶店

のおやぢ。癩疽にて寝ても起きても居られずとて。指を赤くはらしつゝ。訪ひくる人に語りぬ。わが家を立つ時。二つなる子供もやけどして指をはらしぬれば。いかならんなど思ひ出でらる。今日は照りつけらるゝ事。昨日にもまされり。幾度も休みくゝて。下りぬと思へば。又刈谷原の峠來る。あはれ世の中は。一つかなへば又一つの。古人の歌にこそたがはざりけれ。これもあへぎつゝ越えて。車をやとひ松本まで行く。十二時も過ぎたり。こゝにて馬車を待つ間に飯を出だせといへば。飯はあれと菜なしと答ふ。漬物さへあらばとい

へば。瑠璃の色したる茄子の。いと大きなるを三つ。丸のまゝにて持ち來れり。名にしおふ信濃の大山もりなる茶漬をも。四たび五たびもや。給仕人かよはせつらん。朝忠の中納言めきたる振舞かなと。我ながらあきれぬ。箸をおきもあへぬに。馬車の仕度よしといへば。飯代いかにと問ふに。何もなかりしかば二錢賜はれといふにぞ。更に又驚かれぬ。思へば神代遠からぬ處もありけり。馬車も出でぬ。瘦せたるが鞭うたるゝはあさましけれど。居ながら青田の風に吹かれ行くは。足の豆をも忘れつゝ。いとこそ心地よけれ。洗馬せばを経て本田につきたるは。五時なりき。馬車の賃錢三十錢とやいひけらし。

下りて一里ばかりも行けば。櫻澤といふ合の宿あり。家毎にお六櫛。木曾短冊を賣る。暮れかゝる頃。贅川につきぬ。宿りを認めて入りたれど。誰もあらず。おいくと二聲三聲かくれば。女房らしき者出で來れり。とまられるかといへば。へいといふのみ物もいはず。込み合うて居るかといへば。いえ込み合もしましねいといふ。さらば頼まうとて。足あらひて通れば。奥の十疊の間に案内しつ。表を見たるよりはいと清し。十六七の女。茶と高杯に盛りたる菓子とを持ち來てすゝむ。風呂も膳部も。東京を出でし以來の上等なるを思へば。前に無愛相なりしは。全く山里人の天真なる處。色も香もなき野菊の花

こそ。中々なつかしき趣はありけれ。宿の名をば太田屋とぞいひし。

疲れたれば。床とりてよといふ折しも。かはゆき小猫の女の跡に付きて來りしを。こちくと呼びよせて。菓子一つ食はずれば。みしくと打ち食ふを見るに。去年の夏旅せし留守には。みよといひし猫のまだゐたりしが。今は歸らぬものとなりぬるよなど。そゝろにあはれの催さるゝも。旅の心の一つなるべし。

知るや人小猫を膝にかきあげて

木曾路の空に物おもふとは

今宵は蚊屋つらず。

十日。曇れり。寢過して七時に立つ。あるじ送りて外に出で。今日の道筋など教へくるゝ。いと深切なり。二里ばかり行き。奈良井を過ぎて鳥居峠にかゝる頃より。空晴れて暑くなりぬ。此道よりは。何となく想像したる通りの木曾路めきたり。我は只さへ堪へかぬるに。向よりは。三間ばかりもある材木を。二本づゝ横に荷なひて來るに逢ふ。中には鉢巻がけなる女も交れる勇ましさよ。峠の茶屋には。正面の床の間に。御嶽大神といふ懸物をかけ。御幣を立て青菰を敷きて。御酒など供へたり。打ち休む人々。すべて白装束の御嶽詣でなれば。我さへ中間入したる心地して。夏をもよそにや忘れ果てまし。

餅ありやといへば。あんころにしませうか。からみをあがるかと問ふ。からみこそといへば。釜から取り立ての餅に。大根おろしを附けて出だしぬ。わが童なりし頃。年のいそぎの餅つきたる日。祖母上の是たべて見よとて。賜はりし味にかはらねば。うまきが上になつかしくて。二皿ばかり盡したれば。勇氣更に十倍し。足踏みならしつゝ下りに向ふ。上り下り一里なりといへり。下りはつれば藪原むらなり。御座庭おひたる女通りかゝれば。茶店の女房見つけて。にしんでも素麵でもたべていけといふ。さすがは木曾の山家なるかな。此あたり何くにもお六櫛を賣る家多し。何とやらんゆきゝ賑はしきを。道

行く人に問へば。馬市なりといふ。

いづ方を夏は越えけん木曾の山

桔梗さく野に鶯の鳴く

道のべに清水流るゝ處あり。木曾義仲の鎮守。南宮神社の御手洗なりし處。といふ石ぶみ立てり。

あはづ野の薄にむせぶ秋風も

しらでや水の猶うたふらん

雨俄に降り出で。山々忽ちに隠れぬ。是より降つたり晴れたりして。いと涼しければ。道もはかどり。二時には宮の越につきたり。晝飯たうべんとて。とある家に休むに。木曾は蠅の名物とは聞きたれど。こゝは殊に甚し

く。給仕は片手に團扇をあげて。膳の蠅を拂ふとすれど。杓子とる間に又も黒山の如く集まり来る。うるさしともうるさし。

義仲の菩提所なりし。德音禪寺といふ寺など見て。五時福島に着きぬ。町いとさかんにて。戸數も中々ありと見ゆ。宿りしは富士屋なりき。

谷川の音より外に友もなし

山また山のあけくれの空

今日は晝飯にも夕飯にも。茗荷もて攻められたるは。膝栗毛めきていとをかし。笑ひあふ友のありせばと。かゝる折にも先ぞ思ひいでらるゝ。こゝにも蚊屋つらずやと。

枕もてこし女に問へば。蚊屋は見た事もなしといふ。さらば蚊屋つらぬ氣樂さも知らぬなるべし。

十一日。暑くならんとす。六時に立たんとして。車ありやと問へば。女の童。尋ねてこんとて行きたるが。暫くして歸り來り。今日は病氣にて行かれずと申しぬ。挽く人外になければ。御氣の毒なりといふにぞ。せんかたなく徒歩にて出で立つ。

木曾の掛橋は。芭蕉の句にても名高き所なれど。命をからむ蔦かづらも今は見えず。かねて思ひしとは事かはりて。飛びおりなばおりても行かるべき川の上なり。されどこゝより臨む景色は。岩のさま水の流れ。靜にていと

すゞし。
 上松あひまつを過ぎて寢覺に出づ。蕎麥の名物あり。一つくれよといへば。女房。蓋のある蒸籠と。片手には湯桶とを持ち來れり。喉かわきたれば。まづ蕎麥湯を飲まばやと。湯桶かたむけ茶碗につげば。こはいかに。色は赤く且つ黒し。蕎麥の醬油なりしこそをかしけれ。
 行きくゝて立町の茶屋に休むに。松葉をおほひたる下に。山吹色したる物こそあれ。狐ならねど。揚物好むおのれの事なれば。一つ取りて見るに。かたき事石の如し。大豆をあげたるにてぞありける。
 こゝにて車はあるまじきかといへば。今少しお出でなさ

れば。一人あり。今日はまだ内に居るべし。もし居らずとも。橋の向には必ずあらんと。懇ろにいはるゝ詞を杖にて行けば。果して一人おたり。野尻まで載せてくれよといへば。めしくお間を待ちて賜はれといふ。顔も隠るゝばかりの大茶碗に。婆々が山もり盛りて出だすを。さくゝとかきまはすかと思へば。見るまに二膳ぞ終りける。古人の語にも。活潑なる精神は健全なる身に宿るとこそいへ。都に出でゝ物學ぶ人に。かゝる健全の身を持たせばや。ところ思はるれ。
 須原平澤など過ぎて。野尻の少し前より車かはる。かはりて來りしは。いと正直なる男にて。おのが雨紙包を車

の蹴込の中に入れてたが。もしお忘れになりては大事なれば。斯うして置かんとて。自分の財布まで共に入れてた。おりたる時。賃錢受取る折に。思ひ出ださせんとてなりけり。

同じやうなる片山道の橋を。幾つも渡りて。坂をおり又坂をのぼる。男郎花などの處々に咲きたるも嬉し。清水の湧き出づる松蔭に。刈草負はせたる馬をとめて。休み居るを見れば。十か九つの娘なり。都人ならば鞠つく外には。まだ母の助けも出来まじきを。

山里は見る物毎にあはれなり

都をとめよ心して聞け

いづこもくゝ蕨おもしろく生ひいで。さながら暮春の野邊なり。

早蕨の生ふる野邊には秋風も

心おきてや吹きこざるらん

みどのより車を下りて。妻籠を過ぎ橋場といふに休む。今日は兵隊のおとまりなりとて。店にては夕飯の膳をこしらへおたるが。娘にやあらん。玉子はどちらのを附けんといへば。老母めきたる人。こちらが今日の買立なれば。新らしからんとて。それを客に出だすさまなり。蔭日向なきは。山里人の心ぞかし。馬込峠にかゝる折しも。風俄に木の葉を騒がし。雨つぶてのやうに降り來りぬ。

花のなき草葉もぬれて夕立の

雨かうばしき木曾の山道

日さへ暮れそめて。我ならでは又のぼる人なし。

村雨の木々うつ音も神さびて

夕暮すでき木曾の山でえ

半道程下れば馬込の宿なり。木幡屋といふを目ざして入らんとすれば。女いで来て。二階には明間あれども。お暑いから寝られまいといふ。天真爛漫とは是をやいふらん。今一軒きけば。風呂がなければとて。此宿のはづれによき宿あれば。そこにおはせとねんごろに教へくれたるも嬉し。

外より見れば。いかにも混雑して居るさまなれど。こゝなるべしと思ひて。おい／＼と五六ぺんも呼ばはれば。六十ばかりの老婆いで来て。官員様かと問ふ。まづそんな物よといへば。それおすゝぎよ。御荷物よ。奥の間に明りを。などゝて謹みうやまひつゝ案内す。草鞋とき捨て、上れば。幾間も通り過ぎたる奥の二階にて。十疊の間なるが。床には古びたらぬ文人畫の軸を掛け。前には一閑張の大机を置きて。料紙硯なども其上にあり。洋服掛。衣桁。火鉢。炭取。煙草盆。鐵瓶に至るまで。取り揃へて上等の品ならぬはなし。窓を開けば。遠景の眺望さへありて。表からの見掛とは雲泥なるに。

唯あきれらるゝばかりなり。家を池田屋といふとは。前なる行燈にしるしたるにて知りぬ。間もなく湯もすみて飯きたる。汁は白味噌にて豆腐なれば。今朝までの味とは似ずいとうまし。今一つ代りを貰はゞやといへば。小女椀もて行きたるが。久しく歸らず。わが詞の通せざりしにや。など思ふ程に。辛うじて捧げ來れるを見れば。此度は赤味噌に葱を入れたり。さては前のは。我ために一人前とて作りしにやあらん。氣の毒にもあり。をかしくもありき。膳も引けたれば。涼しき風に吹かれつゝ。下界の客の。淨瑠璃鼻唄。さまぐくに口ずさむを聞く。花の木間の鶯

よりも。中々興あり。

小女來りて床とり蚊屋を釣らんとす。こゝには蚊が居るかと問へば。昔は居ざりしかど。近頃は二つ三つ出づるといふ。されど涼しければ今宵は居まじとて。釣らせざりしに。暫くして又きたり。出は致さずや。夜中にも呼んで下さらば。いつでも参りて釣り申さんとて。おりに行く。田舎人の深切なるは。大かたかゝるさまぞかし。十二日。起き出づれば六時なり。昨夜賑はしかりし旅人は皆立ちて。おのれ一人になりぬ。急ぎ朝飯して。旅籠を拂はんとするに。小錢は皆つかひて。五圓札ならではあらず。是にて釣をと渡せば。お釣は侍らず。聞き合は

せて來んとて。老婆みづから出で行きしが。三十分ばかりもして歸り來り。こゝかしこを尋ねて。やう／＼出來申しぬとて。出だすを見るに。四圓五六十錢の金。悉く穴の明きたる物なるを如何にせん。文久もあり波錢もありて。勘定すこふるうるさければ。受け取りたるまゝ。上着チヨツキの隠しは更なり。兩のズボンの隠しまでも。張り切るゝまで押し込みたれど。まだ餘りたるせんかたなさ。俄に大福長者になりたるこそをかしけれ。老婆御氣の毒さまなりなどいひつゝ。茶などもてきて物語す。木曾の名物は人の心の正直なるにありて。此村などは附火盜賊などの噂。昔より絶えてなく。一村一家の

如くむつびかはすなどいへり。此家は老婆と娘と小女とにて。いと靜なる暮しと見ゆ。

明日よりは誰を吹くらん朝夕の
袂になれし木曾の山風

下り／＼て美濃の國となる。落合中津川など過ぎて。茄子川にて車に乗る。いつしか浮世に立ち歸りたる心地して。もんじやでなどいふ詞。耳につく事おびたし。かくて大井を過ぎ。十三峠の新道などいふを。ゆられゆられ行きて。釜戸。御嶽。伏見。太田などの村々を跡にし。鵜沼にかゝる頃は。暑かりし日もやう／＼暮れぬ。旅は夕べの空いとあはれなるを。いつも疲れて。宿りにのみ

心は急がるゝに。今日は車なれば。雲の山吹色なりしが薄墨になり。灰色になり。遂に其絶え間より星の光のぞき出でたるなど。見つゝ行くまに／＼身にしみ渡らぬ物なし。いづこなりしか祭賑はふ里など過ぎて。十一時加納に着きぬ。神樂の音なほ耳にあり。かぞふれば二十三里の道なりとぞ。かく急ぎしは。明日の一番漁車に乗らんの望あればなりけり。宿りを立花屋といふ。雷の如くに攻めよせ来る蚊の聲。いと恐ろし。顧みれば。木曾は早くも。雲のあなたになりぬ。

十三日。晴れぬ。七時二分の漁車にて。朝風に波打つ稲などながめ行く天地。昨日の山又山に似ず。長濱に着けば。漁船ありて待ち居たり。人も乗れば。我も甲板の上に座をしめたるに。岸には丁稚辨當を賣りに來る。笹折一つ受取りはしたるもの。拂ふべき金は。かの穴の明きたる物ならではあらず。ズボンの隠しよりつかみ出だすに。文久がちにまじりたれば。十露盤に不得手なる己の事とて。板の上に並べ見るのみ。心も急げば急にかぞへもあへざるに。岸よりは早く／＼といふ。船は漁笛ならして早出るといふ。時に乗合の中なる和尙。辨當屋とは懇意なりと見え。あとから戴いて置くからと

いひたるにぞ。丁稚は安心して歸ると共に。船は動きて陸を離れぬ。和尚さらば勘定してまゐらすべしとて。大きき小きより分けつゝ。早くも十何錢の計算をしてくれたり。お賽錢の勘定も。覚えおきたき物ぞかし。左に彦根の城を望みなどして。八景を我物がほなる船の上。風よく吹きて暑さも疲れも忘れはてぬ。大津より又瀛車に乗りて。逢坂山も一走りに打ち過ぎ。東寺の塔をながむる間もなく。京都に着きぬ。去年の夏も遊びし處なれば。舊友に逢ふ心地して。東山の緑もいとなつかし。かくて大阪に着きぬるは四時なりき。年頃親しうする清

水氏に至れば。待ちわびたりとて。浴衣もてこよ。水を上げよとて。もてなさるゝ事かぎりなし。さて今日きぬるは。中の島の夜能見んが爲めなるよし。語り出づれば。我もさこそは思ひつれとて。あるじの翁。いでや棧敷を取りてこよとて。丁稚を走らせなどしつ。日はやう／＼隠れたれば。行水夕飯などの情を受けて。翁と共に中の島へと行く。翁は商家の主人ながら。謠もうたひ酒も好み。義侠心と風流氣には富みたる人なり。所は豊國神社の宮舞臺にて。さほど廣くもあらねど。燭臺あまた燈しつらね。見處は地上に疊を敷き。屋根には葎簀を張りたり。それに隙なく入り込みたれば。暑き事。

蒸風呂の中にあるこゝちす。能は大西鑑一郎の天鼓と狂言一番終りたる跡にて。今しも脇の僧出で、道行を謠ひ。生一佐兵衛の杜若始まる處なりき。清水氏よりは。火鉢重箱など持ち來り。妻君娘たちもおひく集まりたれば。賑はしくなりぬ。樂屋より。能役者狂言師など尋ね來りて。名乗をするもあり。一別以來の健康を祝するもあり。金春廣成の望月にもなりぬ。おのれは東京にてしばく見たれば。珍らしくもあらねど。此地の人は。是を見んとて集まれるなれば。鳴りを静めて。さすがは家元の太夫よと。いふ聲などのみ時々聞えぬ。獅子舞すみて。か

たき首尾よく討ちをさめたれば。拍手の聲。暫しは鳴りもやまざりけり。清水氏に歸りたるは二時なるべし。酔ひも甚しければ。直に辭して床に入りぬ。十四日。朝より酒出で、主人と謠なとうたひ。午後は野村氏を訪ひて夜に入りぬ。十五日。北濱に大西氏と梅田氏とを訪ふ。梅田氏の母人は初対面なれど。いと喜びてねんごろにせられ。何くへか行かばやとて。三人打ち連れ。涼みがてら清水の瀧に行きぬ。されど十五日の故か。身に彫物したる人など。あまた込み居て騒がしければ。急ぎこゝを出で。天王寺

に詣づ。龜井のあたり。石の舞臺などを見るも。昔忍ば
るゝ御寺なり。それより茶臼山の雲水といふ寺に案内せらる。こゝは寺
ながら。静かなる座敷のあれば。精進料理出だすが名物
なりとて。風流好む人は皆行くといふなり。げにも我等
が外に客あまた集まりゐて。こゝにも。かしこにも。白
木の机を並べ。箸とりゐるさま。浮世の物に似ず。
わが前にも來りぬ。豆腐の羹。薩摩芋の揚物。じつけて
あるも唐めきたるに。給仕には。腰衣したる十二三の小
僧が。爛徳利など持てきて進むるを。何日より施餓鬼執
行など。張り出したる下にて飲み且食ふも。さる方に興

あり。折しも夕立さつと來りて。木の葉三つ四つ庭にこ
ぼしぬ。

日も西になりたれば。道より梅田氏親子に別れ。西長堀
に清岡貢子を訪ひたるに。家にあらず。歸りてはあるじ
の翁と對酌し。夜は又更けたり。十六日。あるじ父子に連れられて。土佐堀より舟漕ぎ下
し。傳法といふあたりより沖に出づ。翁みづから綱して
得たる魚を焼きもし煮もして。瓢の酒とゝもに進めらる
ゝこそ。風に次ぎてのもてなしなれ。夜又客あり。家の娘に琴をしふる盲人などきたりて。彈
き且歌ふ。

十七日も十八日も人を訪ひ。客に訪はれ。舟に遊び。天神に詣でなどして暮らしつ。十九日。朝の内にとて大西氏を訪ふ。いにし日中の島の夜能に。天鼓舞ひたる人なり。折しも子供二人ばかり謠の稽古にきてゐたりしを。早く返して。敷舞臺のかたはらに。敷物しかせなどして。いざこなたへといはるれば。二言三言語りあふ内に。早くも酒肴など並びたり。古寫本の謠本などあまた取り出だし。是は觀世三代目の自筆なり。これは世になき珍書なりとて。示さるゝも嬉しきに。來合はせたる門人何がしは仕舞など舞ひて。興いよくそひぬ。

いたく酔ひたれば。暇を告げて歸り來るに。今日は日蝕なれば。それを見るとき。人々物干に出で。火の見にあがり。又は金盃に影をうつしなどして。騒ぎゐたり。恰もよし。今まで焔の如く照らしたる光は。やうく薄くなりて。花散る頃の朧月夜に向ふ心地す。夕方よりは。道頓堀の芝居見にさそはる。書生氣質と云ふ外題にて。上野公園の花盛に。人力車の客まちをる處などあり。歸りたくはなり給はずやと。清水氏の娘のいへば。さなり。十錢も出ださば。宅にも歸らるゝやうなりなど。笑ひあひつゝ。夜も更けたれば。一幕見残して歸りぬ。

二十日。起き出でたるに。家内の人々青き顔して。出つ入りつ騒ぎをるさま。只事ならじと見ゆ。聞けば。あるじが秘藏の蘭を。物干に置いてありしに。曉盜人入り來て十八株持ち去りしとなり。とかくする程に。親類もかけつけ。植木屋も來りて其價を積り見たるに。二千四百幾十圓なるべしとぞ。いふなる。あるじの翁。我内職を失ひたれば。此秋東京に遊ぶ事も叶はじとて。打ちしをれたるも理りぞかし。かのれは人訪ひ暮らして歸りたれど。氣の毒なれば黙しゐたるに。翁これより謠うたひて縁起を直さんといふ。それこそよけれ。酒をつくべしと。妻君ぬからず取り持

たるれば。遂には愁も忘るゝばかりの酒盛になりぬ。嬉しきは謠の徳よと。妻君も翁も喜ばるゝ事甚し。二十一日。梅田氏と京都に遊ぶ。清水の塔なつかしく迎へて。瀧の白糸。くりかへしても盡せぬは。竹田伏見のながめなり。舞臺にのぼれば。風いづこよりか涼しく來りて。繪馬堂に立つ人の袂まで吹く。下加茂は去年の夏も詣でたれど。緑かさなる木の間より。赤の鳥居ながめ入れたる。御手洗の水涼しく流れて。梢に小鳥の囀り居るなど。何かは昔戀しき處ならざる。水の上に納涼臺あまた並べて。客待つ女あり。我も其一つを占めて。鯉など作らせつゝ盃めぐらす。試に足さし浸

すにつめたき事いはん方なし。
 日ぐらしの鳴くや糺の木の間に
 夕日こぼれて秋たゝんとす
 京極などそゞろありきして。四條河原に出づ。入日の跡
 の雲きえて。水の上やうく黄昏の色もて。掩はれんと
 する頃なり。岸にも河にも。ぼんぼりあまた燈し連ねて。
 遠く望めば星の如く。近く向へば晝よりも明るし。おの
 れ等も川の中なるに腰打ち掛けて。初夜の頃まで涼む樂
 しさ。東京にてかゝる處のあらましかばといへば。さは
 いへ。兩國の河開は京都にて得がたしと。梅田氏いふ。
 かくて終列車にて大阪に歸り。今宵は梅田氏にとまりぬ。

二十二日。朝は田口氏を訪ひて。諸共に舟に遊び。夜は
 あるじの翁と打ちつれて。松諷社の素謡會に物す。早す
 みたる處なりしかど。折角の御來臨に一番何をがなと。
 大西氏のいへば。暑き折には早き物こそとて。橋辨慶と
 極りぬ。おのれのシテに翁の牛若。鑑一郎にトモを謡は
 せたるこそ中々一興なれ。歸れば十二時も過ぎたり。
 二十三日。清岡貢子の結婚披露に招かれたれば。午後四
 時より北濱の天娛樓といふに行く。貢子は女子師範學校
 にて教へたる門人にて。此度海軍々人の武田氏に嫁した
 るなり。
 樓は大川に臨みたれば眺望よく。ガラスを隔て、舟の行

きゝなどながむるも徒然ならず。客やうく集まり。祝宴まさに鬨なり。おのれ祝言を述ぶる代りに。よみて出だしたるは。

難波江に根ざしかたむる松二木

巢ぐはん田鶴の千代をこそ思へ

歸り來ればあるじ待ちゐて。倶楽部の素謡會より案内ありたれば。御同道申すべしといふ。さらばとて洋服を日本服に改め。伴なはれ行く。謠も獨吟も既に終りて。今しも酒宴半ばなり。五十人以上の出席なるべし。いたく進めらるれば。八島の仕舞一番舞ひて。にぐるが如くこゝを出でぬ。臆したるに非ず。眠くなりたればなり。

二十四日。今夜は博物館に夜能ありとて。人々とゝむれども。思はず日数を道に送りつれば。さまではとて。午後二時暇を告げて清水氏を立つ。住み馴れし處は。暫しも別れまをしき習なれば。あるじを始め。下女や丁稚に至るまで。道まで出で、見送らるゝを。振返り見つゝ行く。こぼるゝ物は涙なり。乗らんとする船の名を宇和島丸といふ。名既に故郷。雁ならば只一飛にも行かまし物を。波と風との立たずもがなと。祈らるゝ事一方ならず。間もなく神戸につきぬ。日は早暮れて。萬點の燈火。水に映じ空にかゝやく。油畫にても見たるやうなり。

播磨灘は波おだやかに夢と過ぎて。明くれば多度津にあり。短冊つけたる笹の流されたるが。こゝかしてに漂ひ居るを見れば。こゝの七夕祭は陰曆にやあらん。三津に着けば。早くも故郷に來ぬる心地して。山の色水の光。すべてなつかし。わが宇和島に汽船なかりし日。こゝまで陸路を來ては乗りつる事など。思ひいでらる。二十五日もおだやかに暮らし明かして。二十六日の午後の三時に。事なく舟は宇和島灣に入りぬ。誠にこの度の如き海上は。一年に二三度ならでは得がたしと。水夫もいへり。神の恵みか天のあたへか。おのれ船には敗北しやすく。乗りたる後は箸とる事も無きが多きに。此度の

みは。三度ながら常にかはらざりしこそ幸なれ。上陸して行くく見れば。城郭の荒蕪。士族屋敷の零落。目もあてられぬ様なるに引きかへ。市中の賑は又思ひの外なり。

家に着きて恐るく玄關を入れれば。父上急ぎ出でおはして。いと待ちかねつと宣ふ。御喜びは御顔のおもてに満ちくたり。やがて酒をあたゝめよ。着屋に人をやれとて。妹など使に急がし立てつゝ。もてなし給ふ。嬉しさ餘りて。まづこそ袖はうるほひけれ。

かくばかり嬉しき物と思ひきや

別れし父に逢ひし心は

九年へて父上より戴く御盃。酔はじとすれど時の間に酔ひぬ。父上も御耳あかくなりて。いつもより過し給ひしやうなり。

二十七日。朝日花やかに扇の峰を昇る。心地いとすがすがし。祖先の御墓より始めて。母上の御しるしまで詣でめぐる。あはれ生きておはさばなど。戀しき事こそ多けれ。

何事をまづ申さんと膝折れば

聲なき露ぞ袖にこぼるゝ

日の入る頃より。招かれて毛山氏に行く。宅は暑しとて。其奉仕せる社の社務所に。圓居の庭を設けられたるが。

こゝは宇和島城を目の前にながめ渡し。これを取り圍む町も山も海も田も。悉く眺望に入る所にて。外には昔ながらの天地あり。内には心隔てぬ舊友あり。なつかしさ嬉しさ。譬へんとするに詞を知らず。酒めぐりて。あるじ筆策とりいだし。合歡鹽など吹けば。おのれも調べあはせて。三四曲にもなりぬ。思へば此社務所にてなりき。十七八の頃始めて筆策の稽古始めんとて。毛山氏に譜を習ひたりしに。其聲がをかしきとて。祠掌の三輪田氏に笑はれしは。三輪田氏は笙を習ひて。遂に上手の域に達せしに。今あらば圓居の内の一一人ならましを。今宵は草葉の蔭より聞きをるやいかに。

年なみの過ぎし昔の笛の音を

又立ちかへり聞く今宵かな

かなたの岡に燈あまたかゝやきたるは。潮音寺觀音の。
四萬六千日詣でする夜なりといふ。これさへ社の木の間
より。見えかくれにながめやらるゝ涼しさ。氷々と呼ば
るゝ聲まで手に取るやうなり。

寢よとの鐘に驚かされつゝ。よるめく足を踏みしめく
歸り來れば。父上早や十二時を打ちたりと宣ふ。

二十八日。をとゞし亡くなりたる妹志津尾の墓詣せんと
て。龍光院といふ寺に至る。昔は書畫會などに來りし處
なれど。今は荒れはてゝ墓のあり所も知れざれば。草深

き中を尋ねくゝて。辛うじてめぐり出でたり。崩れかゝ
れる岸の下に唯一つ立ちたるが。二回忌にや手向けゝん。
百日紅の黒う枯れたるを。花筒に残せり。我も一枝をと
思へど。石より高き夏草の中に。尾花一本だにまじりて
あらず。

いつしかと待たれし兄は歸りしを

物いひたげの墓のすがたや

君が爲め泣かん物とは昨日まで

思はざりしをあはれ世の中

今宵は家にありて。靜に御物語しつゝ。父上の御盃を戴
く。嬉しき事二つなし。御身は謠ならひたりと聞くを。

一つ謠はずやと宣ふ。先づ久しぶりに伺はんと申せば。弓八幡を謠ひ給ひぬ。さらば建樹もとて。舟辨慶や笠の段やと發聲せしかば。父上小鼓とりて打ち給ひしが。曲終る毎に。いたく御満足の御おもひにて。餘程修業が積んでをるとぞ宣ひし。此御一言こそ。おのれに取りては。戰場にて感状たまひしにも彌やまして。胸の浮雲一々に晴れ渡る心地しつ。是ぞおのれ生れてより始めて。父上の御前にて謠うたひたる開闢なりける。さはいへ嬉しき中にも。御年いたく老い給へるしるしにや。御聲いたく低くなりて。鼓の音色も昔のやうには立たざるのみこそ。ひそかに思へば悲しけれ。

あはれ此旅の歸省。何の家づともなかりしに。思はざりし謠をもて。父上の御心を慰めまゐらせしは。幸何物か加ふべき。さるにても。猶これよりも大きな得物をば持ち歸らざりし。不孝の罪をいかにせん。

雲の上にかけし望はなりもせで

もとの穴なる鼠はづかし

志たわらび 終

明治三十五年七月五日印刷
同 三十五年七月十日發行

またわらび

定價金五拾錢

大和田建樹

發行兼
印刷者

金港堂書籍株式會社
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

代表者

右社長

原亮一郎

東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

印刷所

會社 東京國文社

東京市京橋區宗十郎町十五番地

不許複製

